エニックス文庫

ドラゴンクエスト

精霊ルビス伝説 中

運命の翼ラーミア

久美沙織

ENIX

ドラゴンクエスト

精霊ルビス伝説 中

運命の翼ラーミア

イラスト／いのまたむつみ

目次

第三章　翼あるもの

1

煉瓦作りのカリクティスの居城は、白茶けた岩だらけの辺境にあった。『追放されし者』たちと五大家に従う精霊等との天然の境界線である険しきヴェリダヌスの山々を、すぐ背後に控えしこの山国は、潤いに乏しく、起伏がちで、天候が変わりやすかった。生命あるものといえば、地を這う僅かな羊歯草と、低い空の遥か遠くを黒い点となって通りすぎる鳥の群ればかりの、荒れた土地である。

運河の街ランデールから故郷に戻って以来、こころを鎮め慰め落ちつかせてくれるはずのこの懐かしい風景が、ルビスには、やけに殺伐とした寒々しいものに思えてたまらなかった。後にしてきた都は祭りの気配に華やいでいる真っ最中であり、家城の周囲は地味で無骨なまま時に取り残されたような土地柄である。若い娘のこころには比べるべくもなかったが、ま

して彼女にはことさらに気鬱になる原因があった。

言わずと知れた、クリプトカリオンとの婚約である。

親族の誰を名指されたとしても、これほど驚きはしなかったであろう。また、これほどの嫌悪と不安を抱きはしなかったであろう。

神託を受け取ったスクレロパゲスなど、あれきり高熱を出して寝ついてしまったと聞くが、無理もない。サラマクセンシス往復の苛酷な道程もさりながら、我が身に受くると思われていた定めを、一族きっての厄介者である弟クリプトカリオンに奪われた驚愕と衝撃は、かの繊細な青年の脳天に鉄槌を下したようなものであっただろうから。

（何かが間違っている。けして間違わぬはずのミトラ神なのに……神託なのに……おかしい。絶対に、何かが間違っている）

そう思うと、ルビスは魂から震えた。虚心に信じ従うことのできた偉大にして神聖なるものを、傲慢にも疑ってしまったこころが恐ろしく、自分自身が見知らぬものになってしまったかのような心地がした。が、ひとたび崩れてしまったものは、いくら目を背けていても、けしてもとどおりにはなってくれぬ。戦かせしも戦くも、共にルビスの内にある。どんよりと曇った胸を、彼女は、どうする術も知らなかった。

今になってみれば、かの祭りの夜、禁じられていることを知りながら別邸を抜けだしてみたこともまた、この忌まわしい運命の最初の一歩であったような気がしてならぬ。それは、

不吉な決心だったが、やはり必要な一歩だったのだ。自分を口車に乗せた当のアリナと、遠き灯台に追いやられているはずをしゃあしゃあと遊び回っていた許婚との、あの炎の口づけ。当主家の懐深くにて育った自分の与り知らぬ一族のものたちの無頼で驕慢な姿……。あれらをこそ見るために、あのような事実をこそ知るために、ミトラ神は、あえて表面上の言いつけを破らせてまで自分を祭りに行かせたのではないか。そうでも思わないことには、耐え切れるものではなかった。

(ならば、ここでじっとしていていいはずはない)

眠れぬまま、指を嚙みながら、ルビスは幾晩も幾晩も考えた。

(何も知らなかったころのわたしならば、おとなしく、叔父の言いつけにすべて従っただろうな。勧められるまま、誰のところにでも嫁いだはずだわ。クリプトカリオンの妻になることにだって、唯々諾々と従い甘んじたかもしれない。けれど、今は。今のわたしには、もうできないわ！　今はもう知っている。あの男はわたしには、けして相応しくはないと……！)

かといって、どうすればいいのか。

ルビスにはわからなかった。胸は苦しく、頭の中は朦朧混沌として、ただ意味もなく涙ばかりがこぼれた。時には癇癪を起こして物を投げたり燃やしたりもしたが、たいていは、それほどの元気さえも出せなかった。このような時に、こころを打ち明け、傷を癒してくれる相手とてもない。肩を丸めて窓辺に座り、赤い髪のひと房を弄びながら、彼女は遠いコウデ

マ山を見つめては重いため息をついた。
気丈なはずの跡継ぎ娘が打ち籠って泣いてばかりいる様子に、叔父グアモンは途方に暮れているようだった。執務の暇を見つけては菓子やら楽しげな話題やらを携えてこの我が儘な姪の機嫌を取りに訪れたが、ルビスはろくに相手をしてもやらなかった。やつあたりだとわかってはいたが、叔父の顔は見たくなかった。この凶事を仲介したのは、こころやさしいその叔父自身であったのだから。
今日は絶対に誰とも逢わぬと頑なに宣言をしたある日の夜分、ルビスの部屋の窓にまで、マルランドの甲高い声が聞こえてきた。無駄足を踏んだ叔父を慰めているのであった。
「ええ、そりゃあ確かにひどく萎れていらっしゃいます。いつものルビスさまのようではありませんわ。けれども、グアモンさま、それほどのご心配はいりませんことよ。嫁ぐ前の娘なんて、みんなあんなものなのですから」
(冗談じゃないわ！)
ルビスの瞳は紅蓮に燃えた。
(そこらの小娘といっしょにしないでよ。結婚するくらい平気よ。相手が、よりによって、あんな男でさえないならば！)
(ああ、もう月が細くなりはじめた。じき新月になってしまう。早く、早く、何とかしなくっちゃ……！)

……月。

暗い窓をぼんやりと照らす月は、悪はしゃぎをするこどものように次々と駆け抜けてゆく小さな雲に半ば隠されているが、既に半分近くも欠けている。そのような月をなにげなく見上げ見つめているうちに、不意にルビスは、あ、と声をのんだ。

(そうだ。

ラルバタスに行こう。湖の神殿の、月の巫女の処に行ってみよう!)

巫女は女たちの、ことに処女たちの味方であるはずだ。親や男たちに合点の行かぬことがらを無理強いされそうになった時、イデーンの女ならば誰でも、神殿に駆けこんで助けを求めるではないか。わたしだって、うまく匿ってもらえるかもしれないではないか、とルビスは思った。

(そうすれば、このまま、清らかなからだのまま、新月を乗り越えてしまえるかもしれない)

(だって、わたしには、どうしても信じられないもの! きっと、神託は誤って伝えられたのだ。誰かが神のことばを歪めているのだ。そうだとしたら、巫女は、誰よりも頼もしい味方になってくれるはずだ……!)

思いつくと、ルビスはいてもたってもいられなかった。数日座りこんで意味もなくべそをかいてばかりいたので、この計画にはひどくこころが高揚した。どこか早計であることを頭の隅ではわかっていたが、何がしか自分から行動に移すことができるのは、たいそう好まし

いことだったのである。

簡単な支度をして、深夜、ルビスは、家を抜けだした。革サンダルを砂埃にまみれさせながら、ひとり歩いて荒野を渡りはじめた。ラルバタスは遥かなるコウデマ山と、ほぼ等しい方角にある。月の暗い夜とても、道を誤らずに行けると踏んだのである。屋敷のものたちが起きださぬうちに、一歩でも遠ざかっておこうと、ルビスは急いだ。

どれほど歩いたころか、夜明けが来た。昇りだした冬の太陽に、ちょうど背を向ける恰好であった。

あたりが明るくなってみると、隠れ場所もない岩山の狭隘なみちのりが、不安を誘った。前後から追っ手がかかれば、手もなく捕らえられてしまうだろう。ルビスはいらだたしげに小走りになったが、長くは続かなかった。慣れぬ徒歩に疲れてからだは重く、足は痛く、ぼんやりしているうちに眠気すらも兆してきた。たびたび座りこんで休息を取ろうとしたが、その都度、何かがそこまで迫っているような気がして、すぐに立ち上がってしまった。

ルビスは歩いた。歩きつづけた。岩山の間を抜けると、次の荒野が広がっていた。そのあたりは既に、彼女には全く覚えのない風景であった。ふと日が翳り冷たい風が駆け抜け、黒雲が空一面を覆い尽くしたかと思うと、小石のような雹が降りだしてルビスを打った。はじめルビスは両腕をかざし発熱させて果敢にそれを防いだが、おいそれと止みそうもない。ルビスは走った。走って走って、軒のように斜面に突きだした岩を見つけ、その下に隠れた。

冷え切って鳥肌の立ったからだを擦り、背嚢の中の果実を齧って、待った……。浅いまどろみの中でかすかにまぶたを開いてみると、いつの間にか日がさしている。溶けた氷が頬に落ち、ルビスは飛び起きた。

ルビスは歩いた。いくら歩いても、湖の在りかは知れず、山は遥か彼方に揺らめいていつまでも近くならなかった。天頂に達した太陽は冬とも思われぬほどの強さで照りつけ、口の中が粘り、乳房の間を汗の玉が走り抜けた。疲労と睡魔にはっきりと開かぬまぶたを、両手で擦ってこじ開けながら、ルビスは歩いた。豊かな髪が乱れて顔にかかり、邪魔になった。急速に乾いてゆく大地の小石のひとつひとつに乗り上げながら長く細く伸びた自分の影が、ふらふらとからかうように揺れて、孤独な徒労をせせら笑っているかのような気もした。が、ルビスは依怙地に歩きつづけた。うっとおしいほどたっぷりとしたマゼンタ色の髪を手巾で結んで、細いうなじを風に晒しながら。

……あまりにも単調な景色に、ルビスのこころはいつしかこの場を離れて時を彷徨い、遠い日の記憶を蘇らせた。

一面の緑。春の匂い。五大家のおもだったものたちの家族が何組も集まって、テネルス大草原にピクニックに出かけた、あの日。

（わたしは夢中で駆けた。丘の道を。草の海原を。他のこどもたちや、その子たちのペット

である仔馬や麕蜥蜴や、星蝶とじゃれあいながら、どこまでも、走ったわ）

息が切れて笑いながら草に寝転び、ふと振り仰ぐと、丘の上のほうからおとなたちがやって来るのが見えた。各家の長とその配偶者たちは互いに親しげに談笑しながらゆったりと郊外の散歩を楽しんでいるのだった。

逆光の構図の中、色とりどりの衣裳が日差しにきらめき、イデーンきっての名家のひとびとは、幼いルビスの目にたいそう立派に見えた。壮年の男たちはみな、家紋をつけた正式の衣裳をつけている。アヌビアス家の奥方はぎらぎらと輝くマントを得意そうに翻しているし、ポリプテルス家の小うるさい姉妹はお揃いの青い胴着ですましかえっている。コリドラス家の老婦人がオトシンクルス家のご長老になにやら盛んに相槌を打って、癇癪持ちの夫を憮然とさせているのまでが、遠くにいるルビスからもはっきりと見てとれた。

みなことのほか上品で優雅なひとびとであった。が、その中であえて一番美しいものを探すならばそれは他ならぬ自分の母だ、とルビスは思った。女らしくふくよかに整った肢体を慎ましやかに覆い隠した真紅のローブのいかにも豪奢で見事なこと！ 誇らしさと慕わしさに、ルビスの胸はドキドキと音をたてた。萌えいでたばかりの若緑の鮮やかな絨緞を敷き詰めた丘には淡く陽炎がたち、抜けるような青空を背景にして揺らめく母の姿は、うっすらと霞んで儚かった。そのあまりの麗しさは、母を、この世のものではないかのように見せた。

わけもなく不安になったルビスが瞳を凝らして見つめると、母は、ふと、顔をこちらに向

け、幼い娘のひたむきな視線に気づいた。すると母は、はんなりと微笑み、紅孔雀の羽根の日傘をかすかに持ち上げて合図をしてくれたのだった。

「あれが、きみのママ？」

　幸福になって盛んに手を振り返すルビスに、よく知らない少年が、傍らから声をかけた。

「うん」

「きれいなひとだねぇ」

「うん」

「…………」

　少年が黙ってしまったので、ルビスはやっと、彼の顔を見た。黒い目、黒い髪。穏やかそうなまなざしと、整った横顔は、五つばかり年上らしく見えた。大地の種族のものらしいが、ダトニオイデスではないと知っていた。では、当主の血統であろうはずがない。

「あんたのおかあさんは、どれ？」

　ルビスの口調もことばも顔つきもあからさまに、自らの優位を表したので、少年は年の割には少しばかり皮肉っぽい苦笑を浮かべた。

「ここにはいないよ」

「じゃ、あんた、五大家の子じゃないのね。なんで来たの？　誰かの遊び相手に連れてこられたの？」

少年はぽかんと口をあけて、ルビスのツンとした鼻のあたりをまじまじ見つめたが、突然クスクス笑いだした。

「鋭いなぁ。まぁ、だいたいその通りだよ。ねぇ、きみは、カリクティス家のひとだね？そのみごとな赤毛は……ルビス・アピスト？」

「……無礼な！」

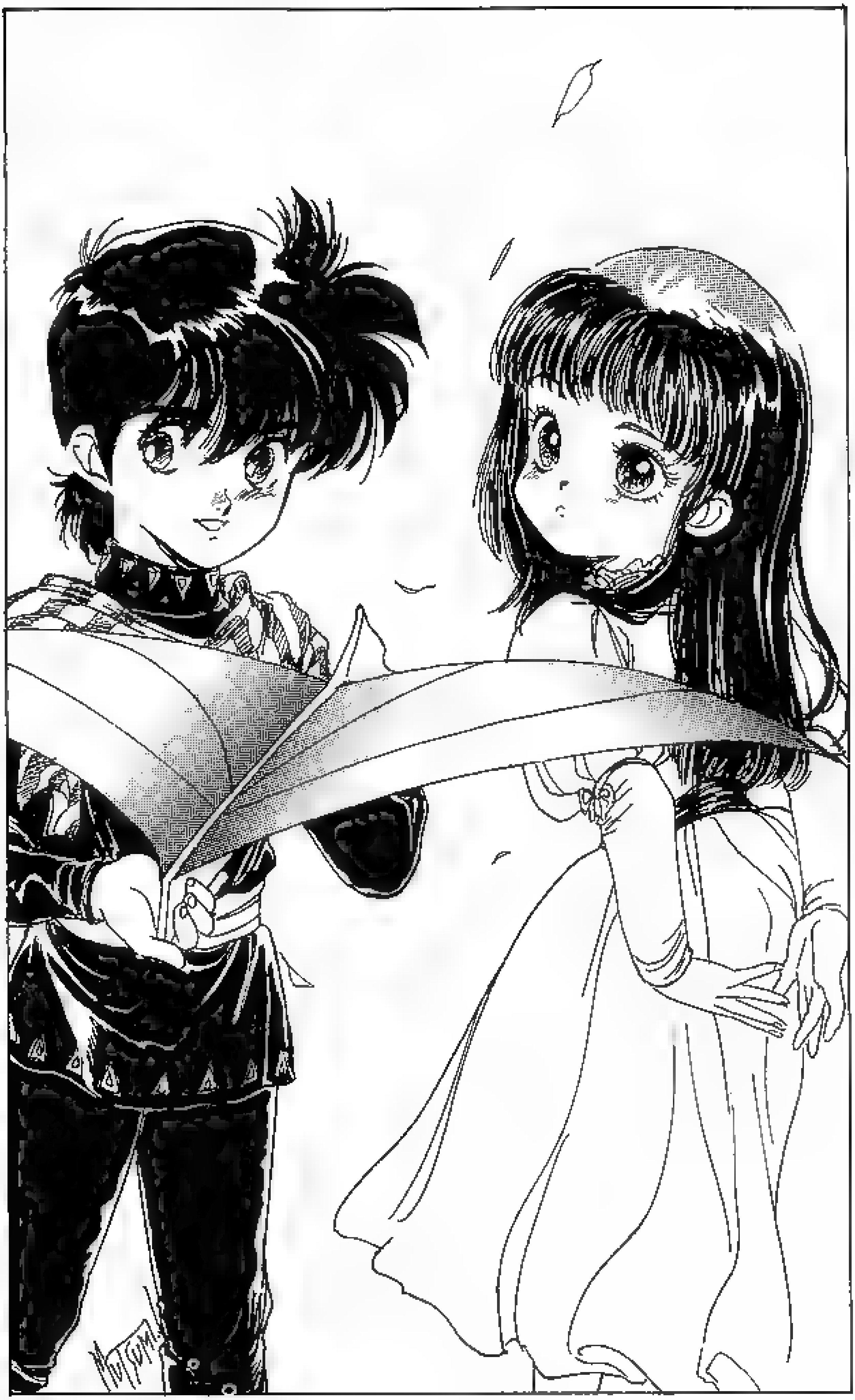
こどもらしく丸い頬をたちまち紅潮させながら、ルビスは少年に触れられた髪のひと房を鋭く払いのけて、ザッと立ち上がり、しっかりと両足を踏ん張った。が、その手は実は、スカートの尻についた草をそそくさと落とすのに忙しかった。

「おとめにその名を問うならば、まずそなたより名乗りあれ！」

「ああ、ごめんごめん」

少年は、唇に合わせた両手の指先をつける奇妙な仕種をした。それは少年の育った地域特有の赦免を乞うふるまいであったが、ルビスにはただ面妖な呪のように映るばかり。すぐにそのことに気づいた少年は、今度は立ちはだかるルビスの前に片膝をつき、恭しく頭を垂れた。

「卑しく生まれしこの身ゆえ、無作法仕った、お許しあれ。これなるはディアルト・ケントロピーゲ。血の繋がりを言うならば、ダトニオイデス・バコバ・コリドラスの最も近き従弟にあります。ルビスさまには、よしなにお見知りおきを」



「うむ、しかと心得たぞ。でもぉ……ね、よしなに、ってなーに？」
「わぁ、だめだめ」
しゃがみこんで耳打ちをするルビスに少年はくすぐったそうに身を捩(よじ)り、彼女を自分の隣(となり)に座らせて、小声で言った。
「あのねぇ。どうぞよろしく、仲よくしてくださいね、ってことだよ」
「ふーん。ありがとディナント。ひとつ覚えた！」
「ディアルト」
「ディ……ア……ロト」
「言いにくい？」
「ちょっとね」
うまく言えないもどかしさにぷっと頬をふくらませたルビスを、少年は暫(しばら)く、何やらせつなげな瞳で見つめた。が、ふと顔を上げると、向こうの木の下から、今話題にしたばかりの従兄(いとこ)ダトニオイデスがこちらを睨(にら)んでいるのが見えたのである。彼は、やれやれと肩をすくめ、立ち上がった。その時、手にしているものを思いだしたのであった。
「ねぇ、きみ、凧揚(たこあ)げ見たことある？」
「たこ……あげって、なに？」
「こいつを空に浮かべるんだ」

「あ、鳥！」
「そう。布と木とで、さっきちょっと作ってみたんだ」
「あんたが？」
「うまくやると、きっと、ほんもののラーミアみたいに見えるよ。……風は……うん。なんとかなりそうだな。……いいかい、よく見ておくれよ、ルビス！」
「呼び捨てにしないでよっ、バカあっ！」
ルビスは怒鳴ったが、走りだした少年の耳には届かなかったかもしれない。
駆け抜けるその手の中から、たちまち一羽の鳥が飛び立った。鳥は、丘のおとなたちの頭上を越えてぐんぐん空の高みに昇っていく。
「う……わあ……飛んでる飛んでる！」
旋回し、滑空し、また上昇し……少年が手の中に握りこんだ糸を操作すると、鳥はまるで生命あるもののように自由自在に空を駆けた。しまいに、どこからかほんものの鳥が集まって来て、不思議そうにその周囲を飛び廻るのであった。草原じゅうのおとなたちこどもたち誰もが、それを見上げ、見守り、笑いあい、ほうと感心の声をあげた。……ただ、ダトニオイデスとその祖父アカントホプスだけが、むっつりと唇を引き結んだままであったけれども。
「……ああ……」

草原の真ん中で、後ろにひっくり返ってしまいそうなほど顎を上げ大きく口をあけたまま空の様子をずっと見送っていたルビスの上を、作られた鳥のしかしほんものと見紛うばかりの形の影が撫でていった。

「さ、持ってごらん」

いつの間にか傍らに来ていたディアルトが、悪戯っぽい顔つきで糸を差しだしてくれている。

「いいの？」

「もちろんさ」

「うん！　やってみる！」

糸は思ったよりも遥かに重く固く扱いにくかった。はじめルビスは引きずられて自分まで空に連れだされてしまうのではないかと想像して、ひやりとした。が、ディアルトが教えてくれる通りにすると、鳥は、ルビスの思い通りに動いた。右に、左に、上に、下に。そして、くるりと廻すことも。

「うまいぞ！」

「きゃあ、できた、できた！　あたしにもできたわ、デラート！」

「ディアルトだってば……ああ、なに？　きみもやってみたいかい？」

無言のままふたりの背後に躙り寄って来ていたのは、青い衣のシフィル・ロリクタス。デ

イアルトに問われて、無言でうなずく。
「代わってあげる？」
鳥の持ち主の黒い瞳に見つめられて、ルビスは小さく肩をすくめ、糸を返した。もう少しこの栄誉を独占していたいような気もしたが、他ならぬシフィルが相手ではしかたがないと思ったのだった。
「いいかい、きみ、まずこのへんをこう持ってね……」
シフィルは神妙な顔つきで糸を受け取った。ひとしきり説明を聞き、手を取られて勘どころを悟ると、さっさと自分で鳥を繰りはじめた。ルビスが後ろ手に手を組んでにやにや待っていると、案の定、ディアルトが眉間に皺を寄せながら戻って来た。
「……驚いた、女の子じゃないんだね、あの子」
「あれでも、水の種族ポリプテルス家の正統な跡取りよ。育ちも頭もいいんだけど、あの子ってさ、ものすごく内気で人見知りなの。あんまり喋んないでしょ。はっきりしなさいよって、ちょっとつっつくと、すーぐめそめそしちゃうのよぉ」
「厳しいなあ」
「ふん。男のくせに泣きべそ虫だなんて。情けないわ。ねぇ、あんた、泣いたことある？」
「………」
ディアルトは黙ってしまった。すぐさま『あるもんか！』と、明快な答えが返って来るこ

とだけを期待していたルビスは、彼の口許が小さくこわばるのを見て、急にちくりと胸が痛んだ。知らず知らずのうちにこの少年にひどく親しみを覚えてしまっていたのだ。当主の血統から外れた、自分で自分のことを『卑しい生まれである』と言うような少年であることがわかっているにもかかわらず。

「でも、……あんたって、すごいわ。あんなの作れるなんて、最高よね！」

　ことさらに明るく、ルビスは言った。自分がなぜか彼を庇っていることを意識もせずに。

　ディアルトは照れたように笑って、草の上に腰を下ろした。ルビスは急いで、彼の真似をした。両手を後ろについて、軽く脚を折った姿勢が、すっかり同じであるかどうか、横目で確かめる。ディアルトと相似であることを確認すると、彼女はなんだかひどく安心して、うっとりと空を見上げた。

　まぶしくて、目がくしゃくしゃになってしまう。一点の曇りもない空の中、シフィルの飛ばす、影絵となった鳥の翼の向こうに、春の太陽がきらめいて、六角形の光の矢を地に放っているのだった。

「あたしねぇ。前からよく、空が飛べるひとたちっていいなぁって思ってたの」

　ルビスは言った。

「ほら、ごはんの時間が近づいたのに、うんと遠くまで遊びに来ちゃった時なんかよ。あたしがもし蜜雀の精や剣鷹の精だったら、びゅーんと飛んでお家に帰れるでしょう？　そうし

たら、ごはんにもちゃんと間に合って、マルランドにお尻をぶたれなくってすむのになあって、いっつも思うの」

「……そうだね」

ディアルトがこちらを向いて唇をかすかに笑わせてくれるのを見て、ルビスは安堵し、思わず甘えるようにその腕にしがみついた。

「ね。笑わないでね。あたし、もっとこどもの時、信じてたの。いつか、おとなになったら、あたしにも、うーんと立派な羽根が生えて、どこでも好きなとこに飛んでいけるようになるって。絶対そうだって思いこんでたから、いつも動けなくなるくらいいっぱいいっぱいごはん食べて、早く大きくなるんだあって頑張っちゃってたの。……えへへ、バカみたいだけどさぁ」

「ううん。バカなんかじゃないよ」

ディアルトは、いやに真剣な、ひどくおとなっぽく見える顔で、そう言った。

「え」

「全然バカなんかじゃない。もう少し、信じておいでよ」

「でも」

まるで呪文でもかけようとするかのようにじっと瞳を覗きこまれて、ルビスは頬がぼうっと熱くなるのを感じ、急いで腕を離した。

「だいじょうぶ。きみは、きっと、飛べる。いつか……！」

「それがほんとなら、今こそ飛ばして欲しいわ……」

ルビスは小さくつぶやいた。微笑んだ頬が濡れていた。

（わたしは大きくなった。もうすぐお嫁にいかなきゃならないくらい、大きくなったのよ。

でも、まだ飛べない。

どうしてなの。いつまで待てばいいの。

教えてよ、ディアルト！　もう一度、励ましてよ！）

遠い幸福の余韻がまだ甘く胸に広がっている。だが、それはもはや過ぎ去ってしまった日の幻にすぎない。ここは草原ではなく、今は春ではなく、傍らに黒い瞳の少年はいなかった。

母も父も、他の多くのひとびとも既に亡い。時は流れ、けして戻ることはないのだ。

その後ルビスはディアルトの出自を知った。母も父も、マルランドも、あからさまにではなかったが、彼のような忌まわしい男と親しくふるまってはならぬと、ことあるごとに厳しく窘めた。それでも、作られた鳥を介してではあるものの、自分を生まれてはじめて空に触れさせてくれた少年を嫌うことはできなかった。幼い夢を笑わずに聞き、いつかきっと飛べると力づけてくれた彼を、良くないものであると思うことなどできなかった。隠れて逢いに

行ったこともある。遠くに姿を見かけて、じっと見つめていたこともある。ことばひとつ交わさずとも、嬉しかった。彼が近くにいてくれるだけで幸福だった。眼が合って、やあ、と手を振ってもらえでもしようものなら、うきうきと一日じゅう心が弾んだ。愛している、ということばの意味を、ルビスは知ってしまったと思った。思いがあふれたあまりに、できるだけ冗談めかして、娶ってくれと懇願してみたこともある。だがディアルトはいつも慇懃にそっけなかった。ルビスをこども扱いしているのか、なにごとも真面目には捉えてくれなかった。受け入れられぬ情熱、許されぬ望みは、灰の中の熾のようにいつまでも冷めることはなく、小さな藁でもあったならば、たちまち天を焦がすほどに燃え立ったであろう。

が。

ある日突然、ディアルトは消えた。どこにもいなくなったのだ。地上に去って永遠に戻って来ることはないのだとみなが言ったが、ルビスは信じなかった。死んだとも思われなかった。恋する娘の狂気は、自分の直感を信じた。それだけを認めた。こんなに愛する男が死んでしまったとするならば、自分にわからないはずはない。彼は死んでなどいない。たぶん、自分のことを考えてわざとどこかに姿を暗ましてしまったのだ。そうに違いない！　やがては火の一族の誰かに嫁がなくてはならぬと定められている自分が、叶わぬ恋に苦しまぬよう、非道な行いに走らぬよう、やさしいディアルトはそっと姿を隠した、それほどまでに彼はわたしを愛しているのだ……！　そう思いこめば、張り裂けそうな胸に小暗い喜びの潤いがで

きた。証拠などなかった。ただ、そうとしか思えぬだけだった。もしも誰かに洩らしたならば、そんな危うい自惚れをよくもと、呵々大笑されたことだろう。だが、彼女はそこまで愚かではなかった。彼女は固く口をつぐんだ。本心を、密かなる確信を、けして誰にも打ち明けなかった。ひとり抱きしめ守ったその思いだけが、ルビスを救った。強くした。

(……ならば)

と、ルビスは、その小さな拳を握りしめた。

(わたしはおとなしく定めに従おう。彼のために、彼の願ったように生きよう。ほんとうのこころは彼と共に消して、族長の座に相応しい女となって生きてゆこう!)

決意した時は、苦しみを昇華した自分のけなげさに痛い快感をさえ覚えたルビスだったが、時の流れは不思議なもの、いつしか、演じているだけであるはずの次期当主としての自分に、誇りと自信を感じるようになった。こども時代は徐々に遠ざかり、過去に属するなにもかもが幼稚で笑止なことがらとなる。母に叱られて死のうかと思い詰めた夜のせつなさや、大切な帳面をなくして絶望したことと等が、今はもうなんと愚かで純情だったのだろうと微笑ましく懐かしく照れ臭く楽しくさえ思えてしまうのと同様、ディアルトに対する激しく一途な思いもまた、幼き日の過ちであり錯覚であり恥のようなものなのかもしれぬと思わずにいられぬようになっていた。確かにあの時は、真剣で深刻で必死だった。けれど、何といっても、あの時自分は、まだこどもだったのだ……そう考えてみれば、楽になった。もう、忘れてし

まってもいい、時折思いだすことを楽しめばそれでいい……ディアルトの名を顔を、ルビスは埋めた。こころの中の、とっくに死んだ両親と同じあたりに埋めた……はずだった。
あの、祭りの夜までは。
再び彼と、出逢うまでは……！

新たな涙に行く手が霞んだ。全身の倦怠と喉の渇きが耐えがたくなってきた。座りこんで、思い切り声をあげて泣きたくなった。
その時である。ルビスは不意に、埃に汚れた素足が、ひんやりした朝露を感じはじめていることに気がついた。胸がときめく。いつの間にか、あたりに草が多くなっていたのだ。湖が近いらしい。思えば、荒いひと息ごとに吸いこむ大気も冷たいほどにすがすがしく、ここが既に聖い領域であることを示しているかのようだ。ホッとして、また、今さらながら無茶な自分に不安にもなって、ルビスは思わず歩を早めた。
神殿ラルバタスを擁する貴湖レピディオは、訪うものすべてを迎え入れてくれるわけではないと言われているのだ。
邪な目的を秘めたもの、愚鈍な問いを携えたもの、そして、不貞なる男女には、その麗しい姿すらも見せてくれぬ。神殿の小島に住まうは、尊い誓願を立てた月の巫女ただひとり。だが、彼女の寛容なこころや、たおやかな容姿を侮って、不埒な企みを持ったものは、神秘

美の象徴であるレピディオの持つもう一方の顔を見ることになる。峻厳なる裁きによって、永劫の薄暮に封じこめられることになるのだ。

（通して。通してったら）

急ぎ足に歩きながら、ルビスは半ば祈り、半ば呪った。

（通しなさい。さっさと通してくれないなら、わたし、帰るから。そうして、なんでも自分で勝手に決めちゃうんだから。何をしでかすか、わからないんだから……！）

脅迫めいたそんな思いを持ってしまったことで、ますますこの聖域に拒絶されるのではないかと僅かに恐れながら、ルビスはできるかぎりしゃんとした顔を作り、昂然と顎を上げ、こころの中で、もう一度言い直した。

（聞け、湖。わが名はルビス・アピスト・カリクティス。掟に従って言うならば、火の一族を束ねる古き地の家の、次代当主だ。

我を迎えよ。神殿の島に上げよ。

わたしは巫女に話があるのだ……！）

いつしかあたりには、重たく靄が立ちこめている。梢の先も見えぬほど丈高い木立や、ひと抱えではすまぬほどの叢が、大気のヴェールに霞んで、おどろおどろしい姿を覗かせた。

これらの奇妙なかたちは、いつも不意を突くように現れ、ひとや動物や魔物を模して、ルビスを脅かした。地面にはひねこびた根が這い回っていて、行く手を阻んだ。迂回し、行き止

まりに突き当たり、もと来た分岐を探して回り道を繰り返しているうちに、ルビスは迷った。どちらから来てどちらへ行こうとしていたのか、今自分がほんとうにまっすぐ歩いているのかどうかも、たちまちさだかではなくなってしまった。

水際に踏み惑うことを恐れて、ひと足ひと足固い地面を探り確かめるようにして歩いて来たのだが、もはや、濡れても転んでも構わなかった。一刻も早く、湖に辿りつき、巫女の島に渡りたかった。

炎の主人の血族であるルビスとても、この地にはさほどの馴染みがあったわけではない。記憶のとばりの彼方になるほど幼いころに幾度か、両親に連れられて来たことがあるはずではあった。だが、かつて迎えてもらうことができたからといって、いつでも許されるとは限らない。まして、今度のように、人目を忍び、供も連れず、発してはならぬかもしれぬ問いを持って訪ねて来た場合には……。

（巫女はわたしを追い返そうとしているのかしら。来てはならないって言ってるのかしら。疑問なんか持たずに、神託通りに、流されるままに、与えられた定めに従えと……？）

ぐらつくからだを支えようとあわてて出した足が、地面の枯れ枝を力任せに踏み砕いてしまった。ぱしり、と甲高く響いたその音に鞭打たれて、ルビスは再びはっきりと覚醒した。

ぎゅっと伏せ再び開いた真紅の瞳に、いま一度新たな決意と力をこめて、頭を上げたその時、唐突にあたりが開けた。

さやかな高原の風に吹き払われて霧の一部が晴れると、そこには、清冽なる水を満々と湛えた幻の湖レピディオが横たわっていたのである。

2

安堵のあまり笑みを洩らしたルビスの耳に、遠く、瀑布の音が聞こえた。パンカックスの滝が近いようだ。この湖水は、彼の大滝を経てネリル河となり、ランデールの数多の運河を通り抜け、アンギス湾からパンガシアノドン・ギガスに注ぐ。また、広大なるテネルスの草原全体をも、潤しているのである。

ひとたび懐に迎えいれられ、辿りついて見れば、世界の果てまでも続いているかと思われんばかりの巨大な湖であった。このようなものを、どうして見落とすことができたのか。ほんの鼻先にありながら、いかなる魔術によって隠されていたのだろうか。まさに神秘、ミトラの左拇指が落ちたと伝説に言われる場の力であった。

ルビスが赤い瞳を凝らすと、水面の彼方、たゆたう靄の間に間に、ラルバタス島の白い岩塊が窺えた。

ルビスは満足して、岸辺に降りた。水際に立ち、乱れた髪や衣服を手で整えて、黙って待った。

やがて、島の手前側に、一艘の黒っぽい小舟が現れた。舟は、濃い霧をかきわけながら滑るように近づいて来た。漕ぎ手のない黒舟は、惑いのない軌跡を残しながら、不意の客の足許に正確にやって来ると、ゆっくりと横付けになった。ルビスは素早く乗りこんだ。舟縁を越える時なにげなく下に目を向けると、水の中から舟を支えている何ものともしれぬ生き物が幾体も揺らめいて隠れるのが、見えたような気がした。狭い足場で舳先を向いて立つと、舟は、即座に、僅かに揺れながら島のほうに向きを変え、動きだした。

レピディオの水はあまりにも透明であまりにも深かったので、無限の彼方まで続いているかと見えた。大きな魚らしい影が現れては消えた。時折、霧が薄くなって、湖の周囲も見透かすことができた。寒々しい裸木の森の彼方に、ナスタチウムの丘らしい柔らかな稜線が窺えた時には、ルビスはなんとはなしにため息をついてしまった。このような、この世とも思われぬ、神々に近い場所で、普段見慣れた景色を見つけてしまうのは、奇妙にいぶかしい気持ちのするものであった。

舟は進んだ。水面を渡って来る風に、汗ばんだからだが涼しくなり、やがて、寒くなった。ルビスは血の気のない唇をきっちりと噛みしめ、両腕で自分を抱きしめるようにしながら、昂然と立ち続けた。

小一時間ほども乗りこんでいたろうか。近づいても近づいても、島は大きくはならなかった。湖の全体に比べると、それは儚いほどに小さかったのである。神殿の島は、盛り上げら

れた塚のように鋭くとがった形をしていた。何本かの古木が根を張り巡らせてその土を支え守っていなければ、今にも崩れ、水に溶けてしまいそうに見えた。

巫女の祠は、島の頂上近くにあるらしい。水際から高いほうへ、何百年となくひとが通って自然にできたのであろう小道が続いているのが、霧の彼方に仄見えた。迷う心配はなさそうだった。

(そうだわ。こうだった。こんなだった。ここだったわ。

ここに来た。

あれは、いつだったのだろう……)

細い糸を手繰るように思いだそうとしてみても、父母に連れられて来た日のことは朧に遠く、ただ、奇妙な懐かしさだけがルビスの胸を満たした。

(それでも、覚えているわ。かすかに、この場の雰囲気だけは。

巫女どののほうは、わたしを覚えておいでかしら。わたしをわたしだって、わかるのかしら?

それとも、もう、あの時のひととは別の巫女がいるのだろうか)

尋ねる相手とてないままに、ルビスはひとり、思いを巡らした。こどものころの自分を知っていて欲しいのか、そうではないのか、自分でもよくわからなかった。

(……それにしても。

いくらミトラ神さまのためだからって、こんな場所に一生幽閉されて過ごすなんて、ひどい話だわ！　せめて、何年交替かで、順番ってことにでもなってればいいのに。巫女になんかなっちゃった運命を、恨むことはないんだろうか。わたしは、当主の娘になんかならなければ良かったって、何度も何度も思っているのに……）

舟は、島の桟橋に到着した。

逸るこころに急かされて、ルビスは舟を飛び降り、朽ちかけた板を踏み抜いてしまいそうになった。祠への小道を駆け登りはじめたその背に、ぱしゃん、と高く水音が響いた。思わず振り向いて見ると、舫われた舟の周囲に、何か小さな物が跳ねたかのような波紋がゆっくりと広がってゆくところだった。水中の案内人に、礼を言うのを忘れてしまったことにルビスは気づいた。神よります島に対して、まったく乱暴もいいところだと、自戒した。

「ごめんなさい。ありがとう」

早口につぶやきながらも、ルビスは先を急いだ。

小道は島の周囲を巡って、幾度も折れ曲がりながらうねうねと続いた。張りだした木の枝や根に邪魔されて、土に両手をつかなくては進めぬ箇所もあった。気の急くあまりうっかり足を滑らせて膝を汚してしまってから、ルビスは、ますます大胆になって衣の裾をめくりあ

げ、こどものようにがむしゃらに登って行った。

頂上附近に辿りつくと、いくつかの大岩が目に入った。それらは、何かの冗談の種にでもされたのではないかと疑いたくなるほど奇妙な形に、危なっかしく、組み合わされ、積み上げられ、互いに互いを支えているのだった。巫女の祠に入るには、その剣呑な岩の間を潜らなくてはならないらしい。

(まぁ、居丈高だこと。
今にもガラガラ落ちてきそうね。あんなのの下敷きになったら、ぺっちゃんこだわ。
ちょっと飛び跳ねてみようかしら)

ルビスは思い、自分の愚かさにすぐに気づいて、笑ってしまった。

何百年もの間、ここは、この姿のままであったのだ。この地を訪れたものの中にはルビスよりもずっとからだの大きなもの、重たいものもいたろうし、歩き方の乱暴なものもいただろう。大きな声で話すものもいなかったとは言えない。落ちるものなら落としてしまおうと四苦八苦したものとても、あるいは、長い年月の間には、何人かあったかもしれない。大勢がうち揃ってやって来た場合もまたあったはずである。それでも、岩は形を変えなかった。変えたのならば、そのような話が伝わっていてもよいはずだ。今、ルビスがひとり軽やかに駆け抜けたからといって、危険な目に逢うはずもないではないか。

亡き両親と共にこの地を訪れた昔、二親はこの場を少しも恐れはしなかったように思う。

ルビスには、はっきりとは思いだせなかったが、特に苦労をした記憶がないのだから、そうなのに違いない。彼女もまた、その時には、怖いとも思わずに通ったのだ。

（ミトラ神の御前に出ようって時に、岩ごとき怖がってたんじゃあしょうがないものね）

ルビスは赤い唇に悪戯っぽい微笑みを浮かべ、それでもあくまで頭上は見ないようにして、最初の大岩を潜った。そのまま、一気に走り抜けてしまうつもりであった。

と。たちまち、不思議な音楽が聞こえて来たのである。

どこからか迷いこんだかすかな風が、閉じこめられて何度となく反響し、囁くほどの笛の音となり、あえかな震え声となり、あるいは豊かな美声となって、それぞれの主題を吟じていたのだ。誰が作ったわけでもない旋律、誰に聞かせているのでもない歌、この世界そのものが楽器となって自然に醸しだしている永遠の交響曲の、いったいどれほどの楽章の何節めにあたるものか、僅かな僅かな一部分に、今、ルビスは、偶然立ち合ってしまったのだった。

ぼうっとして、ルビスは足を緩めた。そうして、岩の中央にしばらくそのまま立ち尽くしてしまった。そこを、危険であるかもしれないと感じたことなど、はや忘れ果てていた。途切れないその音楽のどこで立ち去っても、残りのすべてに未練を抱かずにいられないような気がした。

が、ルビスには目的があった。あまり長い時間、行方を暗ましていれば、叔父グアモンらがどのように誤解をして、何をしでかさないとも限らぬ。急がなくてはならないのだ。少な

くとも、できる限りは。
頭を振り、耳を塞いで、ルビスは岩の下を抜けた。すると、そこはもう、祠の前だった。
鐘紅松の古木が一本、門番のように立つ傍の山肌に、ひとひとり通れるほどの縦に長い亀裂が開いている。その入り口の上あたりを注意深く見つめれば、童児が蠟石で描いたかのような三日月の徽があり、くさび形のミトラ文字で、陰または左を差すことば『ラルバタス』が記されてあるのだった。それらは、光の加減で、見えたり見えなかったりした。あるいは、こころがけ次第で、見えぬものかもしれなかった。
（ここね！）
ルビスはひとりうなずき、からだを斜にして、慎重に亀裂の内部に踏みこんだ。
無意識のうちに黴臭く湿った空気があるのを予想して身構えていたのだが、そこは違った。おもてから来たばかりの瞳にはずいぶん暗く、全体にひんやりと涼しくはあったが、新鮮な草木を思わせる良い香りがした。指先を鳴らせば手燭ほどの灯りはすぐに作ることができたが、ルビスはおとなしく待ってみた。このような結界の中で血族の技を行使することが良いことであるかどうかはわからないし、薄暗闇に目が慣れるまでに呼吸も気合いも整えられよう、と思ったのである。案の定、しばらくするうちに、岩を切って作ったらしい下り階段がかすかに見えるようになったのだった。遠くの下方に、ちらちらと何かが揺れているようだ。巫女の点す灯りであろうか。ルビスは渇いた喉を意識した。爪先で一段、段探るようにしな

がら、岩の階(きざはし)を下っていった。

階段の終わりが、湖の神殿ラルバタスの心臓、ミトラの聖堂であった。それは、半分岩の中であり、半分外に開かれた空間なのだった。

中央奥(おく)に祭壇(さいだん)、親指のない左手を上げたミトラ神の神像が立つ向こうに、小さな滝の裏側がのぞく。透明に注ぐ薄い水の幕越しに、緑と花々のあふれる美しい庭が窺(うかが)えた。こちら側の壁際(かべぎわ)には金の燭台(しょくだい)にたくさんの蠟燭(ろうそく)が並(なら)べられ、小さな炎(ほのお)が並んでいる。そして、床(ゆか)は滝から流れ落ちる水に囲まれた土間になっていた。

(水、土、木、金、そして火だわ。

ふうん、なるほど。五大家に属(ぞく)するものが、ここには、ちゃんと全部あるのね)

ルビスは感心した。この機会に、さまざまなものをもっとよく見ようと、足を踏みだしかけた、その時である。

「ようこそ、炎のおとめ」

声がかかった。

いつの間にか、片脇(かたわき)に、淡紫色(うすむらさき)の髪をした婦人が立っていたのだった。その衣も、瞳も、早春浅く儚(はかな)くも美しく咲(さ)くユキヤマスミレを思わせるような、あるいは、暮(く)れかかった空の一角にほんのひと時だけ現れて消える色彩(しきさい)にあるかのような、不思議な紫色であった。

ミトラの左拇指、ラルバタスの今日の預り手に、ルビスはかすかに見覚えがあるような気がした。この年ごろならば、ありえない話ではなかった。

「久しぶりね、ルビス。ますますお美しくなられて。お元気そうでなによりですわ」

「月の巫女さまにも、ご機嫌麗しう」

ルビスは恭しく頭を垂れて、巫女の冷たい手を取った。

この世にふたりとない尊き巫女であろうとも、高き血の一族のひとつカリクティス家の当主の娘であるルビスにしてみれば、さほど目上の存在ではない。ただ、巫女のほうが遥かに年長であること、自らが未成年であること、また常ならぬ頼みごとを携えて来たことのために、ルビスは、ことさらに丁寧なことばを使い、堅苦しい恭順の口づけを巫女の掌に為したのであった。

「早速ではありますが……神秘なる巫女さまには既にご承知のことであろうと存じますが。本日、わたしが供も連れずにこの地に参りましたのは」

「まあ、お待ちなさい。遥々おいででお疲れでしょう。茶を淹れます。こちらへ」

口上を遮って、さっさと背を向け歩きだした巫女に、ルビスは鼻白んだ。いやに親しげなことを言ったかと思えば、このそっけなさである。

（小娘だと思ってバカにしてるんなら、目にもの見せてくれるから……！）

燃える掌を握りしめて、ルビスは巫女について行った。

滝越しに見えた庭園の隅に、既に半ば茶の支度ができていた。鼻腔をくすぐる香りは甘く、石作りの炉では清い水がしゅんしゅんと沸き返り、素朴なテーブルの上には、花や菓子が丁寧に飾りつけられてあった。茶器は質素ではあったが染みひとつなく、木製の肘掛け椅子は使いこまれて飴色に輝いていた。どれほどの昔から使われてきたものばかりであるか、たぶん巫女とても知りはしないのであろうとルビスは思った。

巫女は晴れやかに微笑み、ゆったりと腰かけていたが、茶を供してくれる所作には、全く隙がなかった。湯わかしを傾け、皿を並べ、勧める優雅な動作の全体がひとつの音楽のような流れを生み、途中で邪魔をすることや押しとどめようとする試みを一切、無言のうちに封じこめた。礼を失さぬためには、じっと待たなくてはならなかった。すべてがあるべき場所に納まり、この場の雰囲気が整うまで。ひとたび目下らしいふるまいに甘んじてしまった以上、この紫色の婦人のほうから話しかけてくれるまでは、何ひとつ問うことはできないのであった。ルビスはイライラしながら、不機嫌に曲がってしまいそうな口許に力をこめ、せいいっぱいのにこやかさを装った。

「さあ、どうぞ」

熱い湯気を上げる茶椀を差しだされて、ようやく、目があった。

「いただきます」

受けながら、ルビスは巫女のスミレ色の瞳をひたと覗きこんだ。そこには、何か彼女を焦らし、駆り立てる光があった。そんなつもりはなかったのに、気がついた時にはルビスはいきなり、口走ってしまっていたのである。

「クリプトカリオンとわたしの婚礼は、ほんとうにミトラ神の御意志なのですか？」

「……まあ……」

不躾な問いに、巫女は戸惑ったように目を細め、顔を逸らそうとした。ルビスは急ぎその手を捉えて、その瞳を二度と逃さぬようじっと見つめて惹きつけた。

「神託があったと、聞かされました。けれど、どのような形の神託であったか、誰も教えてくれません。叔父のグアモン・セミアクイルスのほうから特定の誰かの名を挙げて可否を問うたのでしょうか。あるいは、さまざまな形に受けとめ得るお告げを、わが身内が、良かれと思ってのことではありましょうが、つまりは勝手に解釈したものだったのではないのですか。それとも……それとも、わが伴侶となる殿がたの名そのものを、ミトラ神御自身がはっきりとおっしゃったと、巫女どのが保証してくださいますか。お答えください、いったい、どのようにして、その神託とやらは為されたのです？」

「…………」

巫女は無言のまま、許しを乞うようにルビスを見つめたが、ルビスはきっぱりと首を振った。

「いいえ、はぐらかされはしません。このことは、どうしてもはっきりさせておきたいのです。是非とも、答えていただきます！」

「ルビス……」

紫色の婦人は、そっとルビスの手を握り返した。励ますように、あるいは、やさしく咎め窘めるように。

「けれど、そんなことを知って、いったいどうされるおつもりなのです。わたくしのいらえが、たとえばあなたのお気には沿わなかったとしても。御一族のかたがたが既に決定され発表なさったこと。いまさら、覆せるとでもお思いですか？」

そんな声音で話しかけられたのは久しぶりだった。諭すようにあやすように、やさしく掌を取られた記憶は、絶えてなかった。このような慈愛に満ちた瞳でルビスを見つめてくれたのは、遠い昔に死んでしまった母ただひとりであった。

囚われた掌から、年長の女性のぬくもりと鼓動を確かに感じた刹那、ルビスの虚勢は脆くも崩れた。堪えていた何かがドッと破れ、たちまち瞳が潤んでしまった。

「……だって……だって！　わたし、嫌なんですもの！」

ルビスが叫ぶと、湯わかしのかかっていた小さな炉がたちまち天高く燃え上がり、巫女の手がびくりと反応した。が、ルビスのマゼンタ色の髪は、既に炎となって逆立っていた。

「嫌、嫌、絶対に嫌！　どうしても嫌。我慢できない。認めないわ！　あんな……あんな失

礼で下劣な奴！　いくらおとなしぶって髪を切ったって、まともな恰好をして見せたって、いまさらよ。ごまかされるもんですか。クリプトカリオンはクリプトカリオンだわ。乱暴者の、無法者の、一族の面汚しの、禍つ稲妻の主じゃあないの――

「……ルビス……」

「そんな奴が、ああ、このわたしの夫だなんて！　冗談じゃあないわ。あんな奴、大っ嫌い。だいたい、あいつはね、ついこの間、わたしの目の前で、ひどいふるまいをしたんですよ。わたしだけじゃなくって……他にも大勢一族のものが見てるところで、アリナに……他の娘に、せ、接吻をしてみせさえしたのよ！　そんな恥知らずな男と……うまくやってけやしないわ。そんな男に、一生涯仕えて？　貞淑に、質素に、清廉潔白に??　そんなこと、できるわけない！　あんな奴に、連れ添わなくてはならないくらいなら、わたし、わた……」

嗚咽のあまり、ルビスは咳きこんだ。巫女は、背を摩ってくれ、熱すぎる茶に水を差して飲ませてくれた。

「だいじょうぶ？　落ち着いたかしら」

「……すみません……」

こどもっぽいだだをこねているようにしか見えないふるまいをしてしまったことを、ルビスは恥じた。

（もう少しうまく言うつもりだったのに）

濡れてしまった頬を乱暴に擦りつけ、瞳の腫れが少しでも静まるようさかんに瞬きながら、ルビスは、庇うように伸ばしてくれた巫女の腕を、そっと避けた。

「ねえ、ルビス」

巫女は静かに言った。

「あなたは知らないでしょうけれど。クリプトカリオン・レグナスどのはね、ほんとうに、とてもあなたを愛していてよ」

「え……？」

「わたくしには、わかるの」

紫色の髪の端を弄びながら、巫女は遠い空のどこかを見つめ、微笑んだ。

「クリプトカリオンどのは、とてもこころ濃やかで、むしろ少し臆病なくらいのかたですもの」

「まさか！」

「いいえ」

吐き捨てるように言ったルビスに、巫女はゆっくりと首を振った。

「そうなのです。彼は、ほんの少年だったころから、こころの底で、たいへんあなたを慕っていたの。あなたの強さも、美しさも、高き血の濃さも、彼にとっては、大きな憧れの対象だったのです。けれど、自分には手の届かぬひとだと……あなたがいずれは兄嫁に、スクレ

ロバゲスどのの花嫁になるに違いないと思いこんでおられたからこそ、粗野で礼儀知らずなふるまいをせずにいられなかった。内心のいらだちや不安を、クリプトカリオンどのは、自分を傷つけることでようやく堪えて、そうして世間じゅうからも完全に隠しおおせていたのですね」

ぽかんと口を開けたままのルビスに、巫女ははにかんだように微笑んでみせた。

「ですから、これまでの彼を見て彼の真実を知っていると思ってはいけませんよ、ルビス。あなたを得てこそ、彼は輝くのです。あなたがそばにいてあげさえしたなら、きっと、どんな男よりも素晴らしい男になってみせますよ」

「……でも……！」

紅潮した頬を隠そうとして、ルビスはわざと顔をしかめた。恋愛感情の告白は、他人を介したものであっても充分にこそばゆい。まして、今言われたことには、思い当たる節があった。

一、二日前、ルビスの機嫌を伺いに来たクリプトカリオンは、確かにやさしく頼もしかった。相変わらず口調は乱暴で、何かと言うとひとをばかにしたような態度を取ってしまうところはあったが、努めて抑えようとしていることは、ルビスにも理解できた。訪問に当てた時刻、手土産、語る話題などについてこころ遣いはたいへんに濃やかで、しかも押しつけがましさがなかった。そしてまた、これまでいったいどこに隠しておいたやら、不意に目に止

まる横顔などには、精悍な野獣のごとき美があった。消えぬ五芒の徴はあれど、その鼻梁、その瞳、その引きしまった口許には、卑しからぬ生まれゆえの気品と、既に勝手放題をし尽くした男の穏やかな諦めのようなものが匂って、ルビスの胸をときめかせずにはおかなかった。そのような資質は、なるほど当主の配偶者に望まれてしかるべきであるとも、感じられたのである。

だが。ルビスにとっては、戸惑いのほうがさらに大きかった。いまさらどんな神妙にされても、あるいは、されればされるほど、騙されまい、懐柔されはすまいと思わずにいられなかったのだ。

「……ひとは変わるもの」

と、巫女は言った。

「神の許したもう昔の罪をいつまでも言い立てて裁く権利は誰にもありません。それはわかっていますすね？」

「はい、……それはわたしだって……」

「正直におっしゃい。スクレロパゲスどののよりも、クリプトカリオンどののほうが、ずっと魅力があるでしょう。でも、実際に婚礼の契りを結ばなくてはならないのだとしたら、兄上のほうがましだったとあなたは思っている。スクレロパゲスどのであれば、覚悟ができていた。諦めがついていた。あのかたならば、なるほど、夫となってもあなたにとって少しも恐

ろしくないでしょう。勇敢なふるまいをしたいと願うあまり、身に過ぎた無理をして病に倒れるようなかたでしょう。あなたの我が儘を咎めるほどの覇気もないし、あなたが何を考えているかもけして理解はしない、あなたを邪魔だてするほどの力を、あのかたはお持ちではないのだから――

「……巫女！」

「失礼。言い過ぎたかもしれないわ」

眉を聳やかして、巫女は茶を啜った。

「けれどね、ルビス。何よりもわたくしに求められていることは、直截であることなのよ。神のことばは歪めてはなりませぬ。たとえどんなに厳しくとも、また信じられぬような内容であるとしても、わたくしは、それをそのまま伝えることを自分に課しています。言いにくいことがらを遠回しにして、誤った救いの脇道にひとを逸らさせてはならないのです。ましてあなたは手加減をされることはお嫌いでしょう？」

「ええ。ですから！」

ルビスは両手を握りしめた。

「なれば、神託を。真実を。どうか、はっきりと明かしてください。ほんとうに、クリプトカリオンでなくてはならないと、ミトラさまがおっしゃったのですか？」

「……そうね……」

茶碗を置くと、巫女はまっすぐにルビスを見つめた。
「お互い、細腕に似合わぬ霊力を持たされてしまった女同士。今は、正直に申しましょう」
「……はい」
何者ともうかがい知れぬ予感に、ルビスは声が掠れるのを感じて喉に手を当てた。巫女は、この年若い総領娘の勝気な仮面の下の初心なこころに、やさしく笑みを洩らし、ひとつうなずくと、言った。
「お聞きなさい。紅蓮なる炎のおとめの唯一の夫について、神託は、このように告げました」
巫女はずっと座ったままだったが、みるみるうちに、そのからだが天に聳えんばかりに大きく見えるようになり、その瞳は逸らさずに見つめていることが難しいほど強く輝きだした。そして巫女の声も、今はその華奢なうなじに似合わぬほど重厚に、凜凜と響き渡った。ルビスはあわてて頭を垂れた。
「『そは不羈にして不遇なる美丈夫、親き手によりて故郷を追われ、異邦人の内にて育まれ、流浪を知り、怒濤の内に眠りし。天駆ける益荒を繰りながら、なお、禍つ黒星抱きし』」
「……不羈にして不遇……天駆ける益荒……禍つ……」
（え？）
ルビスはことばを切って顔をあげた。
（……まさか……でも、でも、それはもしかすると……）

ルビスが見つめ直しているうちに、巫女はもとの手弱女らしい姿に戻った。そして、恐ろしいほど白い顔になって、そっとうなずいた。

「ああ！　巫女さま」

ルビスはうめいた。

「では、あなたも、そうお思いなのですね？　それは、それは、クリプトカリオンのことではありますまい？」

「ええ」

スミレ色の瞳を伏せながら、巫女はつぶやいた。

「御一族がレグナスの次男坊を考えたのも無理はないけれど……黒星というところがそぐわないわ。キショウンの五芒星は、黒くはない、血の赤であるはずですものね」

ルビスは刮目した。

「では……神託は……神託は……誰を？」

「おそらくは、ディアルト・ケントロピーゲ」

聞こえるか聞こえぬか、ぎりぎりの声で、巫女は言った。

「神託のあった瞬間わたくしが考えたのは、そのように呼ばれる、上の種族の若者のことです。ミトラ神は彼をこそお示しになった、と、わたくしは思います」

「……ディアルトですって……!?」


MUTSUMI.

時は凍った。きっぱりと発せられたその名の不吉さのために、また、ふたりの女の驚愕と感動と恐怖のために。

恐ろしくはあったが、ルビスが震えているのは、ただそのためだけではなかった。彼の名を聴いたその時から、からだの奥深いところが熱くなって、どきどきと鼓動が早まっている。その慕わしい顔を思い描けば、自然に唇が微笑みのかたちになってしまう。ああやはり、という気持ちと、まさかなぜ、という気持ちが、ふたつながらルビスの頭の中を駆け巡った。

本来ならばあってはならぬはずの告げであった。一族のものたちが枉げて解釈せずにいられなかったのも、無理はなかった。

（じゃあ、わたしは次の当主ではなくなるのだろうか。わたしには、はじめから、炎の一族を率いる資格などなかったということなのだろうか。恋のために、地位も、一族全員をも捨てようとするなんて恥ずべきことだと、ミトラはお怒りなのだろうか。いっそ死ねとおっしゃるのだろうか。それとも、それとも……上の種族と火の種族は、ここにひとつに溶けるべき運命になっていたのだろうか……？）

ルビスが戸惑っているのを不服従の徴と取ったのか、巫女は今いちど顔を上げ、叱るような口調で言った。

「勇気あらば、真実を受け入れなさい。神託はディアルト・ケントロピーゲ……いいえ、神より賜いし名を言えば、ディアルト・バコバ・コリドラス！　名も知られぬ地上のおとめを

母に持ち、逃亡者の汚名を着せられた若き世継ぎを父に持ち、川辺の民等のもとにて育ち、ひとたび実家に帰還せるも外聞と野心の犠牲となって再び野に放逐されたる。世が世ならば、大地の司等の真の頭目であったやもしれぬ器の持ち主。あの悲劇の青年ならば、すべての符号が当てはまりましょうぞ。そう、彼こそが、ルビス・アピスト・カリクティスの娶さるべき唯一の男なのです」

「ああ！」

ルビスはたまらず、両手で顔を覆った。顔も、手も、灼熱して、変形しているような気がした。嬉しいのか、悲しいのか、恐ろしいのか、何ものと決めることのできない激情に全身が震えた。自分がどんな顔をしているのか、していればいいのか、していなくてはいけないのか……彼女には、何も、わからなかった……。

3

川辺の村では、丈夫な蔓を編んで作った筵に、革や草の穂や鳥の羽根を止めつけて隙間をなくしたタペストリーのようなものが、ホリゾンタリスと呼ばれて重宝がられている。それは大きさと厚さ、模様の美しさや丈夫さによって、さまざまな価値と用途を持った。川辺に住まうひとびとはこれを敷物に使い、寝床のかけものになし、また戸口に吊って扉の代わり

ともした。村のこどもたちは好んでこれの作りかたを習った。幼いうちには材料集めを手伝い、次にさまざまな編み地を覚え、成人するまでには必ず生家独自の複雑な色合いや模様を伝授されるのであった。

日常の実用に充てられるホリゾンタリスは、そのような伝統をもった幾何学的な柄がほとんどだったが、中にはとっぴな創作もあった。ことに素晴らしい意匠や絵画的な作品を遺したものの名は、当人が死に、作られたホリゾンタリスが古びて滅びようとも、なお長く残った。

天駆ける竜とも燃え上がる炎とも、また、美しい女の姿とも、角度によってさまざまな様子に見える一枚の美しいホリゾンタリスが、今ゆらりと揺れ、水甕を担いだディアルトが現れた。それは彼の苫小屋の出入口を覆って外気の侵入を防いでいた。今は亡き父インテルプタスが、苦労して谷の慣習を学び、先に死んだ妻への思いをこめて、一年余の歳月をかけて作った物であった。

「……うう、寒いな」

皮衣の衿を立てるディアルトのひとり言は、白い息の塊となって漂った。

風は身を切るように冷たい。見上げる空は透明で、どこまでも広い。山に囲まれたこの辺りでは、空気は希薄で、たいてい良く乾燥している。より高い峰々に雨や雪を落としてしまうため、ここで仰ぐ天は、ほとんどいつも抜けるような青空なのだった。

えい、とひとつ気合いを入れて、ディアルトは狭い峠道を歩きだした。地面は凍って固くなっている。ブーツの中の足指が、ひどく冷たい。だが、行かないわけにはゆかぬ。この谷の水場まで降りて一日分の水をもらってくる、それは毎日のつとめだった。

少しばかり登って峠を回りこむと、径は狭い尾根にさしかかり、突然に視界が開けた。凍える足を止め、あたりを見回すのも、常日ごろから変わらぬ行いだった。

山、また、山……そこに立てば、見渡す限りが魔の山々の荘厳で秀麗な風景だった。

山はけして動くことはなかったが、日差しや雲の具合で、また移り行く季節によって、見るたびに微妙に違う姿を見せる。それはいつも華麗なる物語絵巻のごとく、興味深く、彼を魅了するのだった。

澄み切った青の遥か彼方に、ひと際飛び抜けて高く大きく険しく聳え立っているのが、かの魔峰オーブだ。その頂は純白の雲を突き抜けて淡く霞み、正しく天にも届いているかと思われた。オーブはその麓と呼ばれるこの辺りからすらも、まだなおひどく遠かった。どんな健脚をもってしても、ひとの足ではけして到達することができぬと言われている。川辺の民等の祖先の中には、困難を厭わず、忍従をよしとせず、己が力を試さんとその覚束ぬ目標に果敢に挑戦してみたものもあったが、かつて誰ひとりとして、戻っては来なかった。そこは聖域であった。このイデーンのどこよりも天に近く、罪深い『追放されたる者』たちの末裔には、あまりにも恐れ多かった。

オーブは村のひとびとに裁く神ミトラを思わせた。孤高なる山は威風堂々と美しく神々しかったが、甘い憧れや信奉の対象となるというよりは、その峻厳にして魁夷なる顔でひとびとを圧し、屈服を誓わせる厳しさのほうを、より強く感じさせた。オーブの前では、ひとびとはいつも卑小で猥雑な己を意識せずにはいられなかった。苛酷な山の暮らしを、あらかじめ否定された血筋を、ひとびとは冷たく立ちはだかるオーブを眺めて、静かに諦観し、堪え忍んだ。オーブの肌に触れることを許されているただ唯一の生命である巨大なる怪鳥ラーミアを、このひとびとが自分たちと同等あるいはより高次なる存在として、よく信頼し尊重したのも、つまりはそのためなのであった。

魔峰オーブほど猛々しくはなかったが、その裾野の周りに連なる数多の山々の稜線もまた、それぞれに怪異で独特な形を見せている。遮るものとてない冬の朝の日差しを浴びて、あるいは頭に抱いた雪を輝かせ、あるいは岩肌や枯れ木の複雑な色を見せ、あるいは紫がかった神秘的なシルエットとなって、山麓は、互いに重なりあいながら、ディアルトのすぐ足元まで延々と続いていた。それらの奥深いどこかには六本の細い川があるはずだった。深山から流れ来る渓流は、あちらこちらで滝をなし岩を伝い地を這ってうねうねと曲がりくねり、やがて海に注ぐのだ。

（……すごい……）

ディアルトは嘆息した。

（いつ見てもすごいな。このようなものを作りだしたミトラ神とは、いったい、どんな存在なのだろう……？）

その時、右手の連なりの上に、ふと、何かが動いた。

（ラーミアだ）

巨大な鳥は、ほとんど翼を動かさぬ特徴のある飛び方で、悠々と空を横切っていった。その優雅にも力強い飛翔に、ディアルトの唇は我知らずうっとりと微笑んだ。ラーミアが薔薇色を帯びた岩山の彼方に隠れてしまうまで不動のままに見送ると、ディアルトはようやく我にかえった。頭を振り、甕を担ぎ直して、彼はまた歩きだした。ここからはずっと下りになる。慣れた道なので、いちいち考え思いだそうと努力しなくとも、どこが滑りやすいか、雪が溜まっているか、どの角を曲がると急な崖になるか、よくわかっていた。ディアルトは危険のないぎりぎりまで足を速めて、ぐんぐんと山を降りていった。

やがて、下方に目的地が見えてきた。三の谷の集落である。

川辺の民等の住む村は、その抱かれた山々の偉大さに比べるといかにも小さく貧相だったが、それだけに、闇夜にひとつ灯されたともしびのように、可憐に健気に、いじらしく見えた。

山より来る清流が僅かに弧を描き、長い年月の間に岩肌の幾らかを削りとったために生じた土地であった。激しく切り立った谷の遥か底を流れる川をなんとか利用することができる

この場所に、ひとびとは集い、固い大地を耕し、険しい斜面にどうにかへばりつくようにして家を建てた。畑は厳しい季節を迎え、そのほとんどが倹しい収穫を終えている。僅かな樹木はみな枯れ果てて、少ない枝を寒々と張っている。家々の屋根からは炉を示す細い煙が上がり、細やかなるひとびとの営みを匂わせていた。

　切りだした岩や貴重な材木を積み重ねて築かれた飾り気のない住居は、互いに肩を寄せ、支えあうように伸び上がり並んでいて、どこまでがどの家と区別することが難しい。建物と建物の隙間は岩を刻んだ無骨な階段で埋め尽くされている。高い階同士ではどこでも、隣の家との間を利用して綱を張り巡らし、さまざまな家族の洗濯物を並べて翻らせる習慣だった。広場には、水場と、みなの楽しみである花壇があり、粉碾き小屋の屋根等では、小さな風車がいくつも乾いた音をたてながらゆっくりと回っていた。風車は、彼等の最大の財産だった。彼等はたとえば飲み水さえも、遥か下方の谷から汲みあげなくてはならないからだ。

　ひとりひとりの力ではどうすることもできないことが、ここにはたくさんあった。この深い山奥で、あくまで青い空の下で、世界の王のごとく君臨するオーブに遥かに見下ろされるこの場所で、この谷の村びとたちは、互いに励まし助け合いながら、質素に堅実に暮らしているのだった。

（おかしいな）

　村に入ってしばらくすると、ディアルトは落ち着かなくなって、顔をしかめた。いくら寒

いからとはいえ、出歩いているものがまるで見当たらないのが妙である。気配が変に張り詰めている。おかげで、愛想がないはずの野良豹のこどもまでが、彼の姿を見つけるや嬉しそうに擦り寄って来てにゃおんと甘え声で鳴いたほどだ。それで気づいたが、村には、いつものような音がない。路地でかくれんぼをするこどものはしゃぎ声もなければ、噂話に花を咲かせる女たちもいないようだ。

水場の路石に甕を降ろすと、ディアルトは白い息の塊を散らしながら、周囲に頭を巡らした。大声を出して誰かを呼んで、なにごとか尋ねてみようかと思った、その時である。

「……ほっ、ほっ、ほっ……っしょっと……！」

愛くるしい声が近づいて来た。振り向いたディアルトに相手も気づいた。幅広い石段を飛び跳ねるようにして駆け降りて来た小さな姿は、驚きのあまり調子を崩し、あわてて両手を振り回したが、かなわず転げ落ちた。

「ピパ・ピパ！」

ディアルトは駆け寄った。

「うう、く……くそぉ、痛つっ……」

ぼさぼさ頭の少年はその場に座って、擦りむいた膝を抱えこみ、唾をつけて擦った。砂まじりの傷口にじわりと血が滲むと、みるみる両目が潤んだが、歯を食い縛って泣かなかった。

「だいじょうぶか。何を急いでる」

「あ……あんたを呼びに行くとこだったんだよっ」

吐きだすように、ピパ・ピパは言った。その勢いに、うっかりこぼれてしまった涙を長すぎる袖でグイと拭くと、目を丸くするディアルトに、早口に続けた。

「大変なんだ。新しい石切り場のほうで崖崩れがあって、作業小屋がいくつか潰れた。だいたいは逃げたけど、パーチが……パーチが塡まっちまった。唸ってる声はするんだけど、自分じゃ出てこれないみたい。大岩の下敷きになっちまったんだよ！」

たちまち無言で走りだすディアルトを、ピパ・ピパは痛む片足を引き引き必死に追いかけた。ディアルトが背中を差しだすと、かすかに躊躇ってから、飛び乗った。幸い少年は軽く、石段を急ぐ邪魔にはならなかった。

「ああ、そっちじゃない！　こっちからのが近い！」

うろ覚えのディアルトには、よい道案内にもなった。

「良かったよ、ピパ・ピパ、あそこで逢えて。村じゅうひとけがないんで、なんか変だと思ってた」

「うん。みんな集まって岩をどかそうとしてるんだよ。でも、だめなんだ。また崩れちまいそうで」

「ラーミアは？　何羽か、いつも、石切り場を手伝ってたろ？」

「おっかながって逃げちゃったんだって。だいたいラーミアの馬鹿力じゃ、片っぱしからぶ

っ壊すだけだろ。パーチ、ぺっちゃんこになっちまうじゃないか。だから、お爺が、急いであんたを連れて来いって」
「ああ」
ディアルトは目を細めた。
「悪かったな、気がつかなくて。そんな事故があったと知っていたら、もっと急いで来たのに」
「無理だよ、ディアルト」
ピパ・ピパは慰めるように、ディアルトの肩を叩いた。
「おいらたちだって、パイクが真っ青になって走って来るまで、誰も気がつかなかったんだ。いつもの切りだしの音とそう違わなかったし……あんたのほうからじゃ聞こえなかったろ。責任感じることないって。……あっ、その角曲がって。その先だよ！」
石切り場には、村のほとんどのひとびとが集まっていた。潰れた小屋の破片がそこらじゅうに散って、もうもうと埃を舞い上げている。みなが見つめる崩れた岩の重なりのどこかが、まだ時折、ずずっ、と恐ろしい音をさせて、揺れ動く。そのたびにひとびとは声もなくからだを震わせ、裾にしがみついたこどもたちの手を、関節の白くなるほどきつく握りしめた。
ディアルトが駆けこんでいくと、振り向いた男や女が、ああ、と顔を輝かせた。

「来てくれたか！」
「すまないねえ、ディアルト」
　ピパ・ピパは素早く飛び降り、うっ、と顔をしかめた。忘れていた膝の傷が痛み、また血が滲んだが、顔を真っ赤にして我慢した。
「パーチはどこですか？」
「こっちだ、こっちだよ！」
　ディアルトは急ぎ、案内に従った。通りすがりに立った年老いたものや女たちが、次々に彼の背や服の裾に触れた。いま一方の手は自らの心臓の上に当ててある。できぬことを他者の手に託す時、せめてもの力添えを念じる村の呪であった。ディアルトは拳を握りしめた。
「来たか」
　地面にめりこんだ大岩の前に、賢者と呼ばれる老人が待っていた。その傍らには、パーチの妻であるガーとその幼いこどもたちがいた。みな目が赤く腫れ顔に血の気がなかったが、凛と唇を引き結んだまま、ディアルトを見て、小さく頭を下げた。
「この奥らしいのだ。できるかな？」
　こんな時には相応しくないほど落ち着いた、からかいを含んだようにさえ聞こえる声で、賢者は言った。ディアルトが耳をすましてみると、岩の向こうから、幽けくほどの息の音が聞こえる。挟まれた男は、まだ、生きているのだ。

ディアルトは老人を見た。老人はもしゃもしゃとまぶたに垂れかかった白い眉を持ち上げた。

「やってみます」

「むう」

老人は笑うと、大義そうにみなのほうに向き、両手をあげて、邪慳に追い払うような仕種をした。多くのものは黙って従ったが、

「お爺」

「手伝います！」

屈強なからだつきの男たちが何人か、かえって前に進みでた。

「何でも言ってください」

「そいつにだけ任せるわけには！」

老人は歯のない口をあけて、うんざりしたように首を振った。

「邪魔をするな。これは、儂の弟子じゃ。信ぜぇ」

（……ありがとう、お爺）

ディアルトは黙って下を向いて待った。老人はむっつりと唇を結び、『何かまだ文句があるか』とでも言いたげにそっくり返って、あたりを睥睨した。男たちは顔を赤くし、舌を打ち、凄まじい目つきでディアルトを見たが、やがて、誰彼となく袖を引いて、おとなしく引き下

がった。
今は、未練らしくなおそばに残ったのは、パーチの家族たちばかりであった。
「これ」
老人がやさしく尻を叩くと、パーチの妻ガーは思い詰めたような瞳を彷徨わせ、突然ディアルトの衣に触れた。そして、力を抜いて立っていたディアルトがたたらを踏むほどに、それを強く引き、拳の中にきつく握りしめて、笛のような音をさせて息を吸いこんだ。ディアルトはどぎまぎしたが、動かなかった。力づけるように手を握り返してやりたかったが、それでは呪を無視することになってしまうのだ。
母の腰にまとわりついたこどもたちが心配そうに顔をあげた時、ガーは気丈にも笑みを浮かべて、言った。
「さ、行くのよ」
「おかちゃま、おとちゃま、助かう？」
末っ子のチャカ・チャカが急きこむように尋ねる声がしたとたん、また、岩が揺らぎ、ずずん、と低く、からだを揺さぶり、背筋を凍らせるような響きを轟かせた。
「おお、くわばらくわばら。では、そろそろ儂も行くぞ」
賢者は緊張のあまり棒のようになったディアルトの肩に、ずん、と重く片手をかけた。
「しっかりな」

「お爺」
「ここだけの話だが」
　と、老人は声を潜めた。
「あんな大岩にぶっ潰されたんじゃ。無理に引きずりだしたところで、どうせ助からぬかもしれない。いいから、ま、気楽にやれ、気楽に」
「……そんな！」
「怒るな、怒るな」
　老人は歯のない口を丸く開けて密かに笑った。
「おまえが固くなっているから思いださせてやったんじゃあないか。何度も言うたであろうがよ、人生で大切なことは、けして深刻になりすぎぬことじゃ。思い詰めるとろくなことはない。どうせひとの力なんざ、知れたものよ。為る時は為る、為らぬ時は為らぬ。うむ、これぞ、真理じゃ」
　白い眉をぴくぴくさせる老人に、ディアルトが思わず吊られて口許を緩めると、相手は急にきりりと表情を引きしめた。
「……とはいえ。弟子じゃと公言してしまった手前、あまりいい加減にされても困るぞ。よいか、ディアルト、思い切ってゆけ。決死の覚悟でゆけ。今こそ修業の成果を見せてやるのだ！」

「……はい」

苦笑まじりに答える弟子に、老人は眉尻を下げて、よしよしとうなずき、たどたどしい足取りで去って行った。

（修業ねぇ）

ディアルトはため息をついた。

（薬草摘みだの繕いものだの炭焼きの番だの、砂蛇酒の仕込みを手伝わされるのを、修業って言うかなぁ。まぁ、確かにその時々にいろんな話をしてくれたことが、身になっているとは思うけど）

老人は村一番の、医者であり教師であり調停者だった。これほど年をとる前は、身寄りのないディアルトを連れてよく山を歩き、森羅万象について語り、相談ごとに乗ってくれた。精霊の血筋を示す彼の力を……亡き父母の他には誰にも見せたことのないその魔力を……偶然にひとり知ることとなり、恥に思うことはない、恐れなくてもよい、ミトラ神がくれたものなのだから大切に守り磨くがよい、だがけして人前で使ってはならんぞと、強く戒めたのも彼であった。

その戒めを、老人は今、自ら解いたのだ。

「よし——

ディアルトは目を閉じ、意識を集中させはじめた。



（大地の力よ……ここに集え……我に積もれ……!!）

だらりと下げた手の先がチリチリと痺れはじめる。踏みしめている足の下から地面が消え、からだが宙に浮いているように感じられだす。息と共に入ってくる世界の生気が、ディアルトの心臓で弾みを得て、からだじゅうを渦巻き駆け回りながら次第に溜まり、ひとつに凝縮してゆく。濁流を遡る竜のこどもの心象。

（形のない、扱いにくいこの気合いを、黒竜の姿に擬して成長させてみてはどうかと助言してくれたのも、お爺だ）

竜は今、翼を広げ、四肢を突っぱって、激しく暴れのたうち回っていた。充分な力を得て、その鱗だらけのからだが内部からまぶしく光り輝きだしたのを知ると、ディアルトは薄く眼を開き、岩を見た。

岩は塵の塊だった。目に見えぬほどの細かい粒がほんのかりそめに繋がり合って、ひとつに見せているだけだった。塵の結合の最も弱い部分を、ディアルトは探り、その命脈に向けて、内なる光の竜を一直線に解き放った……!

「……おお！」

「わ……割れた……!!」

「いや、割れたのではなかった。ふくれ上がったかと思うと、まるで雲のように消えてしま

ったぞ！　俺（おれ）は見た！」

「パ……パーチーっ!!」

「待て」

飛びだそうとしたガーを、老人が制した。

「まだ危（あぶ）ない。ここで、待て」

言うが早いか、煽（あお）りを食って四散したあたりの岩や瓦礫（がれき）が、空の高いところから降り注ぎだした。落ちて来て、ひとびとの並んだすぐそばの地面にざくりと突き刺さった赤子の頭ほどもある岩の破片が、如何（いか）なる魔法の影響（えいきょう）か朱（しゅ）を帯びた透明な色合いに輝いたかと思うと、不意に幻（まぼろし）のようにかき消えてしまうのを、ひとびとは見た。そして、いまさらながら思い知った。

ヴェリダヌス山脈の彼方にある精霊等の持ち得る途方（とほう）もない力を……『追放されし者』たちのほとんど知らぬ魔法（まほう）の世界を……山の庵（いおり）にひとり住む混血の孤児（こじ）ディアルトが、正しく、『高き血の五大家』のひとつ、大地の種族コリドラス家の尊き血統を継（つ）ぐものであることを……。

男も、女も、ただ待った。やがて、もうもうたる埃（ほこり）の彼方に、揺らりと人影（ひとかげ）がのぞいた。ガーは乾いた喉（のど）を片手で押さえ、がくがくと顎（あご）を震わせていたが、とうとう走りだした。こどもたちが、追いかけた。

「……あんたあっ！」

パーチのひょろ長いからだを横抱きにしたディアルトの姿がはっきりと見えるようになると、他のひとびとも駆け寄った。パーチは全身埃だらけに汚れていて、片手の肘から先がありえない形に曲がってはいたが、覗きこんだ妻の隈の浮いた顔に、にやりと薄く笑ってみせた。どよめきがあがり、男たちがディアルトの腕から怪我人を受け取った。

「良かった！」

「良くやった」

「ありがとう、ありがとうディアルト！」

ディアルトは汗だくで息が荒かったが、ひとびとの歓喜や、差しだされる手に、せいいっぱいの笑顔で答えた。連れ去られるパーチと共に村に戻ろうとするガーが、振り返り振り返り深々と腰を折って礼をするのがひとの頭越しに見えた。はしゃぎながら従ってゆくそのこどもたちの中から、不意に小さなチャカ・チャカがひとり駆け戻って来た。裾を引いてディアルトの注意を引くと、真剣な顔つきで、その首に腕を廻し、頬に接吻をした。

「あたい、お嫁さ、なってあげう」

チャカ・チャカは、よく回らない舌で言った。

「ディーのお嫁さに、なってあげーね。おとちゃま、いいて言ったららけど！」

「うん、チャカ・チャカ」

ディアルトは片笑窪を浮かべて、幼女の頭を抱きしめた。

「でも、ちゃんとおねしょが直ってからだよ？」

チャカ・チャカは真っ赤になってふくれ、ディアルトの胸を小さな拳でひとつ打って逃げるように駆けだし、母や兄弟たちの後を追いかけた。ひとびとは笑った。

地面に膝をついてやっと立ち上がってみると、ディアルトのそばに、老人と、ヤベ・ヤベやマタ・マタやパイクらが集まって来ていた。老人以外はみな、パーチと共に石切り場で働いていた男たちであった。彼等の顔はみなまだ埃まみれで、衣服はあちこちが裂けていたし、腕や脚に巻いた布に血を滲ませているものもあった。

「礼を言うのが先だとは思うんだが」

濃い頬髭を捩りながら、ヤベ・ヤベが言った。

「聞いてもらいたい話があるのだ。俺の家まで、来てくれないか」

「大地に……異変が？」

蜜湯の碗を口から放してディアルトが聞き返すと、ヤベ・ヤベのみならず、居並ぶ男たちがみな一様にうなずいた。

「おおげさなことだな」

老人がつぶやく。ヤベ・ヤベは傷ついたような顔を向けたが、老人は耳の穴を指でほじっ

て、知らん顔をした。

「信じたくないことだが、そうとしか思えん」

ヤベ・ヤベはまた、重苦しく、ディアルトに言った。

「俺たちは石切りには詳しい。岩を甘くみることの恐ろしさは、いやというほど知っている。どこをどう弄れば危なくないか、これでも、いつも、ちゃんと考えてやっているんだ。今日の作業だって、充分測量をして、安全を確かめた上でのことだった。ほんとうだ」

「うん」

ディアルトはうなずいた。

「あんたたちは素人じゃない。それは知ってるよ」

「けど、ほんとにさ、このごろ、どーもおかしいんだよ」

ンドゥロが言った。

「頑丈なはずの岩盤がぼろぼろ欠けっちまったり、昨日まっすぐだった切り口が、いつの間にか、こーんなにずれちまったりしてんだ」

「何かやなことが起こるんじゃないかって、びくびくしてた矢先のことさ」

「しっかり組んだ足場も、なんかやけに揺れるしよ」

他の男たちも、口々に言い合った。

「ほら、おいら言ったろ、うちの小屋の戸が緩んじまって、ちゃんと閉まらねぇ、どうもお

かしいって」

「岩や地面だけじゃねぇ、うちの嬶ぁが言ってたが、川も変らしい」

「だ。ちょぴっとだが、なんか、水が温いんだ。こんな季節なのによ、風呂沸かすんに、いつもよか、やけに早いだ。味も違ってるような気がするし」

「ラーミアたちも、なんだか落ち着かなかったよな、このところ」

ひとしきり発言がすむと、ヤベ・ヤベはまた老人を見た。老人は自分の掌をじっと見つめて、なにやらにたにたと笑っていた。重く息を吐きながら、ヤベ・ヤベは再びディアルトのほうに乗りだした。

「俺たちは、世界の理屈は知らない。ここで、ここに昔から伝わってきた理屈に沿って、やっと生きている。ここでは、これがぎりぎりなんだ。今のやりかたがだめだとなったら、どうすることもできない」

「……ヤベ・ヤベ……？」

そのことばに秘められた、何か責め訴えるような調子に、ディアルトは思わず表情を引きしめた。

「閉まらない戸はくさびを打てば使える。温い水はありがたいくらいだ。だが、石切りは中止しなきゃならんし、これ以上何か予想のつかないことが起こらないとも限らない。なあ、いったい、どうしちまったんだと思うね？　ひょっとして……ひょっとして、山向こうの魔

法使いの連中が、何かしでかしたんじゃあねぇのかい?」
「……ああ……」
(そういうことだったのか!)
ディアルトは嘆息した。
さきほど、岩の前を去ろうとしなかった男たちの、きつい目つきが思いだされた。
また、このところ水を貰いに二の谷に降りてくるたびに、どこからか冷たい視線を浴びせられているような気がしてならなかった。通りすがりに挨拶を交わした誰彼が、ふと何か言いたそうにしながら、もぐもぐと口をつぐんでしまったこともあった。いつも群がって遊びに来ていたこどもたちも、丘の上の彼の苫小屋に元気な姿を見せることがなくなっていた。
寒くなり暮らしが厳しくなって、みなゆとりがないのだと、深く考えてみることもなかったが、それはみなこのためだったのだ。おそらく村びとの間では、山向こうの精霊たちに対する不信が、密かに高まっていたのだろう。そいつらの最も濃い血のひとつを引くディアルトが、厭わしく思われるのも、無理のないことだった。
もともと、他所者の子であるディアルトを、はじめから好ましく思っていない連中も、村にいないではなかった。それは、父や母がこの谷の厳しい自然に相次いで長からぬ寿命を終えこの谷に埋められた時、幼かったディアルトがラーミアを駆って山を越えテネルス草原を渡ってコノドラス家に戻ろうとしたことの、切実な理由のひとつだった。そしてまた、虫の

知らせにラーミアに乗ってやって来た老人によって遥かゴスリニアの囚人島から助けだされた後、彼が村から少し離れた場所に自分で小さな小屋を建て、ひとり暮らすことを選んだ原因でもあった……。

（……俺は今でも、やっぱりまだ、他所者なんだな……）

ディアルトが眉を曇らせるのを見ると、男たちはもじもじと身動きをし、互いに気まずい瞳を交わし、そっとつつき合った。悪い連中ではない。仲間の生命を救ってくれたばかりのこの青年に、何も今、こんなひどいことばをぶつけなくても良かったのではないかと、胸を痛めたものも多かった。

ヤベ・ヤベにしても、実は苦しかった。

彼はディアルトを好きだった。認めていた。

幼いころ、ディアルトの一番良い遊び仲間だったのは、他でもないヤベ・ヤベ自身なのだ。他所者の子であるディアルトに、風の読み方、凧の揚げ方、ラーミアとのつきあい方をも、手とり足とり教えてやったのは、他でもないこの谷一番のガキ大将だった彼である。自分より少し年下のこの混血の青年が、見かけよりもずっと肝の座った根性のある男であることを、ヤベ・ヤベは肌で知っていた。他のこどもたちが脅えてついて来れぬどんな崖もいっしょに登ったし、辛い労働の時も不平ひとつ言わず力を合わせた。ひとつしかない魚は、ふたつに

割って食べた。そういう時、彼等はどちらも、より大きいほうの片身を相手に譲ろうとし、また、そんなふうに庇われることを嫌って罵りあい、殴りあいさえした。喧嘩の間に大事な魚が、ちゃっかり者の旗尾狸一家にこっそり横取りされていくのにハッと気づき、空きっ腹を抱えて大笑いをし、また冷たい川に並んで入って行ったこともある。

ディアルトが山向こうに去り、また戻ってからは、互いによそよそしくふるまうようになっていたが、それは、ヤベ・ヤベにとってはかけがえのない友を永遠に失ってしまった衝撃と寂しさの反動であり、また、ディアルトにとっては、不首尾にもそのような寂しさを味わわせてしまった気まずさのゆえであったのだ。

そして、妹であるガーが、その少女時代からずっとこの混血の少年に淡い想いを寄せていたことも、ヤベ・ヤベはよく知っていた。知っていながら、それを許さず、彼女にパーチの許に嫁ぐことを承諾させたのだ。

「ディアルトはいい奴だ」

その時、妹に、ヤベ・ヤベは告げた。

「ほんとうに素晴らしい男だ。俺だって、あいつが俺の弟になってくれたら、どんなに嬉しいか。こころ強いことか。だが、よせ。いかん。あいつはダメだ。どうしても諦めてもらわなくてはならん」

「……なぜよ……?」

若かりし日のガーは美しく、その分、気が強かった。野性味あふれるその頬に、滂沱と流れる涙を拭いもしないまま、怒鳴り返した。

「あんたは、わからず屋だわ！　あのひとが山向こうの種族だから、口先ばかり仲よくしてても、ほんとうはずっと内心軽蔑してたんだわ！　それとも、あのひとに親がないから、山向こうの家からも追放されちゃったから、だめだって言うの？　あんな財産のないひとは、婿には物足りないとでも言うの？」

「ガー」

「さもなきゃ……さもなきゃ……ええ、そうよ、あんたは嫉妬してるんだわ！　あのひとが、あんたよりも強いから、あんたよりも立派だから。昔、あんたを置いて行っちまったことがあるから、気にいらないのよっ!!　許せないのよっ!!　あんたはまだ恨んでるのよ。この強情っぱりの、ろくでなしぃぃっ！」

「バカ！」

むしゃぶりつく妹をヤベ・ヤベは床に引きずり倒し、そのまま力ずくで押さえつけて、耳元に怒鳴りつけた。

「わからんか！　あいつは、おまえには過ぎるのだ！　あいつは……あいつは、こんな山奥に埋もれてはいけないのだ。いつか、また、遠くに行ってしまうに違いないのだ。そんな男に……そんな奴に……たとえどんないい男でも……大事な妹をやれるものかぁっ……！」

兄の目にひと粒光った涙に、ガーはことばをなくした。妹の顔に広がった理解と同情の色に、兄は不意に我にかえると無雑作にガーを離し、酒を手にした。ガーは啜り泣きながら屋根裏部屋に籠り、ひと晩じゅうそのまま降りて来なかった。

そして翌朝、台所で酒盃を倒してうたた寝をしていた兄に、白い顔で、バーチの申し出を喜んで承諾すると告げたのだった。

近所きっての働き者の許に嫁ぐ日、婚礼衣裳を着けた妹は間違いなく谷一番の美人だった。祝福の口づけをしながら、兄は彼女を強く強く抱きしめた。これでいいんだ、このほうがおまえは幸せになるのだと、囁きながら……。

……ゆえに、今もまた、ヤベ・ヤベはこころを鬼にし、あえて冷たい怒りを瞳に宿らせながら、ディアルトに告げずにはいられないのだった。

「あんたを責めたくはねぇ。あんたのせいだとも思わねぇ。あんたを弟子だと言うお爺の前でもあることだし、こんなこと、言いたかねぇ。だが、俺たちの知らないあっちの世界のことを、あんたはいろいろと知ってるはずだ。なんたって、あんたは、大地の種族とやらの御大将の血筋なんだから、地面やら山やらのことは、あっち側の奴等の中でも格別よく知ってるはずだろう！」

「…………」

「だから、俺は聞きたいのだ。いったい、何が起こっているのか。俺たちは、どうすればいいのか。あんたの不思議な力でわかるなら、是非、教えて欲しいのだ……！」
「……確かに」
ディアルトは苦しげにうなずいた。
「言われてみれば、心当たりがないこともないよ。でも、確信はないし……」
ヤベ・ヤベがむっと下唇を突きだしていると、ディアルトは幼いころから変わらぬ少しも濁ったところのない黒い瞳をまっすぐに上げて、彼を見つめ返した。
「しばらく、待って欲しい」
「しばらくとは？　どれほどだ」
「そうだな……次の新月まででどうだ。俺はすぐあっちに行って、いろいろ探ってみて来ようと思う。新月の夜までには戻って来る。約束するよ」
「……みんな、それでいいか？」
ヤベ・ヤベが肩越しに見回すと、他の男たちはみな大きくうなずいた。
「お爺は」
「あ？」
老人は、かくりと頭を落としたかと思うと、照れ臭そうに片眉をあげた。
「すまん。居眠りをしたらしい」

ヤベ・ヤベは無言のまま、ディアルトに向き直った。傍らの男たちがあわてて老人に耳打ちをした。

「おー。そうかそうか。いいよいいよ、何でも任せるがよい。儂の弟子は、全くほんとに優秀じゃからのう!」

ヤベ・ヤベは、髭だらけの顔に今日はじめて、はっきりと笑みを浮かべた。

「よし。頼む。きっと、何か答えを見つけて来てくれ」

「ああ」

差しだされたヤベ・ヤベの手を、ディアルトはしっかりと握り返した。

その時、部屋のかたすみで、小さなボサボサ頭が飛び上がった。

「おいらも、おいらも行く!」

「ピパ・ピパ!」

「おいら行ってみたいよ。谷の向こうが見たいよ。いいでしょう、とうちゃん、いいでしょう?」

ピパ・ピパはヤベ・ヤベの膝にしがみついたが、ヤベ・ヤベは黙って睨んだ。ふくれっ面になって、ピパ・ピパは、今度はディアルトに目を向けたが、こちらも腕組みをして首を振った。

「ごめんよ。でも、今度はだめだよ。大事な用事だからね」

「ちぇっ。今度は今度はって、いつだって連れてってくれないじゃないかっ！　嘘（うそ）つき。ディアルトの嘘つき。おまえなんか、嫌いだいっ！」

　ピパ・ピパは思わず憤然（ふんぜん）と椅子（いす）の足を蹴（け）りつけ、逃げだそうとした時にはもう父親の大きな手につかまえられ、衿首を摘（つま）み上げられていて、真っ青になった。

「じゃあ、支度（したく）をするから」

　ディアルトは立ち上がった。

「ラーミアは呼んでおこう」

「弁当なら、うちの嬶ぁに作らせるぜ！」

「何でも言ってくれ」

　男たちは口々に言い、近いものは思いをこめてディアルトの手を握った。

「ありがとう、みんな」

　ディアルトは照れたように笑った。

「ありがとう……！」

「うむうむ、善哉（よきかな）、善哉」

　老人はうなずきながら立ち上がり、窓ごしになにげなく遠い山々を見つめて、おお、と声をあげた。

「みな見るがよい、あの青空を！　なーに、つまらぬ心配などすることはない。ま、なんと

かなるさ。だいじょうぶ、だいじょうぶ。わっはははははは！」

4

そのころ、遥かテネルス草原の彼方にあるコリドラス家の館の奥深い一室、当主ダトニオイデスの執務室は、冷たい緊張に包まれていた。

禍つ従弟ディアルトを束縛していたはずのゴスリニア島の大岩が、何者かの手によって幾万幾億もの破片となって砕け散っていることが報告されたところだったのである。祭りの夜の失策を挽回しようと進んで斥候に発ったバルブス、ゲメナ、ブンバらは、かの孤島より、巨大な鳥の羽根を一本持ち帰った。プレコトムスが無言のままに差しだした闇色の天鵞絨の上で、その羽根はキラキラとまぶしく輝いた。

（ラーミアの尾羽根だ……！）

震える手に羽根を摘み上げながら、ダトニオイデスはゾッと全身に冷水を浴びせられたように感じた。それは、幼き日よりの見果てぬ夢のかけらであり、同時に、みくびってはならぬ従弟の力の証でもあった。

怪鳥の尾羽根は、その希少さから、所有するものに巨万の富を与えるとも、どんな夢でも叶えるとも、また、恐ろしい災いを招くとも言われている。豊かなるイデーンにおいても真

実至宝といえる貴重な逸品であった。

当主ダトニオイデスは、光の加減と角度によってさまざまに色を変えるその宝石めいた羽根を、厳しい顔つきでしばらくためつすがめつ眺めた。羽根の発見者であった軟泥竜の主ブンバは、骨っぽい両手を握りしめた。

一度は懐に隠して、自分の恋人に持ち帰ろうとした品である。だが、女は口が軽い。宝が立派であるほどに、ひとに見せびらかさずにはおかないだろう。そのようなものを任務の途中で見つけだしながら、当主に差しだそうともしなかったことが、後に露見したらどうなるだろう？　一度目の失策は不問に付された。だが、それは自分ひとりの失策ではなかった。今度はただ自分だけの罪になる。けして言い逃れはできないだろう……そう思い改めたため、ブンバは美しい羽根を、いやいやながら献上したのであった。

それ相応の見返りが欲しかった。恋人の歓心を買うことのできるほどの貴重な金品か、せめて当主自らの極上の誉めことばを。胸をときめかせながら期待した。

が。ダトニオイデスは突然に力をこめてラーミアの羽根をふたつに折り、暖炉に投げこんでしまった。ブンバも他の斥候等も、プレコトムスさえもが、思わず、ああ、と喉声をあげた。が、当主は捨てたものを少しも惜しんでいる様子はなかった。

「ご苦労だった。さがってよい」

ダトニオイデスは座に戻って、両手を組み、一心に考えを巡らした。部下等のことなど、

眼中にもなかった。
(ディアルトめ。おとなしそうな顔をしおって、あくまで小癪な奴だ。
おそらく、繋がれたその日のうちに自由の身になっていたな)
(まさか死んではいまいとは思っていたが)
その一心不乱な様子にブンバがみるみる落胆するのが、プレコトムスにははっきりと判った。老人は、ブンバの肩を軽く叩いて、無言のまま彼を慰めた。斥候をつとめたものたち全部に、自らの革袋をさかさに振って褒美の金を取らせると、そっと追いたてて、部屋を引き取らせた。振り返り振り返り去ってゆくブンバ等を片手を上げて見送ると、屈強なるプレコトムスは小さく肩を丸め、頂のとがった禿頭を手巾でそっと撫でて、ため息をついた。それから衣服を改めて背筋を伸ばすと、当主の執務室の扉をぴったりと閉め、その前にしっかりと陣取って、番をつとめた。
閉じられた扉の内側で、ダトニオイデスはいらいらと考えつづけた。
(とっくに島を出ていたとは迂闊だったな。こんなに長いこと放置しておくのではなかった。
ああ、俺は油断をした。
いったいどうやって逃げたのだろう。何者かに解き放たれて? あるいは自力で岩を砕いてだろうか。ともあれ、すぐさま魔峰オーブの麓の養い親の許に帰っていたのに違いない)
……だとすれば、事は容易くなかった。

ナスタチウムの丘で秘密の会談を行った時はわざわざ諭されてみせたが、グァモンに言われるまでもなく、ダトニオイデスは、かの不遇な従弟を何とかして味方に引き入れなくてはならぬと計画していた。

囚人の島から助けだし、肉親らしく温かく迎え入れ、何かと取り立ててやったならば、ディアルトは感謝して自分に忠誠を誓ってくれるはずだ、と思っていたのである。

祖父の迫害は詫びねばならぬ。自分の非も認めよう。気の毒だとはずっと思っていたのだが、あのころはまだこどもで何もできなかった。こうして力を得、周囲を説得することもできるほどの身になって、ようやく迎えに来ることができた。これからはほんとうに仲よく暮らすことができるな、嬉しくてたまらないよ……ダトニオイデスには無邪気で真実らしい芝居をする自信があった。もともと自分は陽気で屈託がなく見える性分だし、ディアルトときたら田舎者の大間抜けだ。ひとのことばの裏など読むような男ではない。過去の恩讐を今は忘れて、イデーンのために、コリドラス家のために、共に働いてくれと誠意をこめて言ったならば、ひとのよいディアルトは必ず感激してくれる。腕と腕を絡め、盃を交わして、永遠の誓いができるに違いない。……そう読んでいたのである。

ダトニオイデスは歯ぎしりをした。いまさらながら、自分の考えの甘さに腹がたった。従弟がラーミアの使い手であることを知りながら、まだみくびっていたのだ。

（こんなことなら、もっと早く迎えにゆくのだった。爺が死んだ時にでも……いや、せめて、

事を起こすよりもずっとずっと前に和解しておくのであった)

(それにしても、どうやって、あの鳥を、あんな孤島まで呼び寄せたのだろう? 鳥の聴力はそんなにも優れているのだろうか。それとも、誰かが、陰からあいつを支援していたのではないか? はじめから、俺たちのやることをすべて見ていたのでは……?

いったい、どこの誰が?

ああ……それは、川辺の民に決まってるじゃないか!)

ダトニオイデスは恐怖した。

(ディアルトはまだいい。あんなに初心で開けっ広げな性格なのだから、うまく丸めこめぬわけがない。問題は、川辺の民だ。僻み根性のラーミア使いどもは、自分等が無条件に庇ってやったディアルトを、血族であるにもかかわらず酷い目にあわせたコリドラス家に対し、間違いなく悪感情を持っているだろう。だから、わざわざディアルトを我が家に派遣してみせたりしたのだ。俺たちがあいつの出現にいらだって、何かを起こすことを期待していたのだ)

(彼等は戦を知っている。裏切りの味を知っている。迫害の辛酸を知っている。信用してはならぬ人間に甘い顔を見せることの恐ろしさを、いやというほど知っているだろう。そいつらを、敵に回してしまったのか……?)

(これは既にコリドラス家だけの問題ではない。

彼等の狙いは、おそらく豊かなるイデーン全土！）
ダトニオイデスは脂汗を流しながら、考えつづけた。
（戦）
（戦）
（ああ、今こそ、ミトラによって追放されたものたちの復讐がはじまるのだ）
初めてラーミアに乗った少年を空に見つけたあの日から、自分は、このことを予感していたのだ、とダトニオイデスは思った。ひとつの国の中にふたつの種族。恵まれたものと、退けられたもの。何かきっかけがありさえしたならば、衝突が起こるのは、はじめから目に見えているではないか。
（いつか川辺の民たちが、大挙してやって来るのだ。ラーミアの大群がランデールを襲うのだ。微温湯の暮らしに弛緩しきった男たちには、自分の大切な家族を守ることもできぬ。街は乗っ取られて廃墟になり、女たちは辱められて連れ去られ、我等はみな彼等の奴隷にされてしまう！　ことによると、あの恐ろしい鳥の餌にされてしまうのかもしれない……！）
（ああ、その恐れを知るものの、なんと乏しいことよ！）
だからこそ、俺は五大家会議に焦れたのだ、とダトニオイデスは思った。
（なのに、あの、わからず屋どもめ……！）
（もはや一刻も猶予はならぬ）

（イデーンの秩序は既に目に見えぬところで崩壊しているではないか。五大家の正統になど拘わっている場合ではない。これからは、力あるものだけが、生き残ることが許されるのだ……！）

ダトニオイデスの瞳に、狂気のような光が踊った、その時である。

「……ならぬ！　今は」
「でも、一刻も早くお知らせにと」
「しばし待たれよ！」
「いいえ、通してください。邪魔をしないで」
「ああ、これ、いかぬというに！」

扉の向こうで争う声がした。声は次第次第に大きくなった。ダトニオイデスは思考を中断されて、顔を上げた。

「なんだプレコ、何の騒ぎだ？」
「ああ、ダトニオイデスさま！」

たちまちキンキンと脳天に響くようにあげられた声音は、ノーザンバラムンディ付きの女のひとりであると知られた。また妻が何か我が儘を言いだしたのかと、ダトニオイデスは顔を顰めた。

「どうかおいでになってくださいまし！　奥さまが、奥さまが」
「どうしたというのだ」
「はい」
たっぷりと効果的な間をあける女に、ダトニオイデスは頭を振った。
（まったく、この忙(いそが)しいのに、なんだというのだ）
「ご懐妊(かいにん)なさいました！」
「……な、なに……？」
女たちは早口に喋(しゃべ)りながら衣裳(いしょう)の裾(すそ)をからげて走り回り、男たちは秘蔵(ひぞう)の美酒を飲み交わして大声で笑いあった。にこやかでないのは、当主ダトニオイデス唯(ただ)ひとりであった。彼は今、むっつりと座(すわ)りこんでいた。妻と自分の寝室(しんしつ)に。
確かに喜びは大きかった。待望の世継(よつ)ぎができたのである。
「でかした」
目が合うと、ダトニオイデスは生真面目(きまじめ)な顔つきで妻に礼を言った。ノーザンバラムンディは、悪阻(つわり)のためにひどく青ざめ、あでやかに肉付きのよいからだをいつになく持て余し気味にして横たわっていた。額にはじっとりと汗(あせ)をかいていたが、取ってみれば、その手は死んだように冷たかった。ダトニオイデスはいつものように笑窪(えくぼ)を作ってみせた。妻は愛(いと)しそ

うに瞬きをしたが、すぐに苦しげに瞑目してしまった。

数々の宝石や香木、遊戯道具や美しい飾り物など、夫である当主からの褒美やら気晴らしの種やらが、次々に寝室に運びこまれて来た。おかげで、跡継ぎの母のお目覚めは、たちまち館じゅうに知れ渡ることになった。誰もが祝い事を述べに駆けつけたがり、誰もが今はまだお邪魔をしてはならぬと他人を諫めた。料理人たちは、どのようなものを欲しがってもすぐに食べさせてやるようにと厳しく言いつけられていたので、さあいよいよだぞと緊張し、それを運ぶ役割のものたちは、ひと目でも奥方を見ることができたならばしばらくみなの話題を独占できる、なんとか自分が最初に行かせてもらう方法はないものか、と思案投げ首であった。

が、誰も呼ばれず、招かれなかった。献上品の行進が終わると、寝室には当主夫婦とその胎児だけが、その次の間には、愚直なるプレコトムスただひとりが残されたのであった。

ノーザンバラムンディが孕んだのは、跡継ぎになるべき嬰である。一族待望の赤子であった。無事に立派に生まれでてくれるまでは、なんとしても妻に不自由をさせてはならない、と、ダトニオイデスは思った。大事な跡取りをこの世を見ることもないまま葬らねばならぬようなことがあってはならなかったし、コリドラス家の最も古い血を引くものの子を為すのは、いささか荷が重いことだったからである。どんなにたくましい女でも、五大家当主の妻ともなれば、たいがいの場合、ひどい難産を経験するものと相場が決まっている。優れて力

あるダトニオイデスの種になる子とくるなれば、その生命力はなまなかではあるまい。胎内より密かに母を喰らい、その定命を吸い取って成長もしよう。月満ちるまで、母子の戦いが続けばまだよい。妻が妊娠の途中で精根尽き果て倒れることにでもなれば、母子はもろ共に死んでしまうだろう。

「わたしはだいじょうぶよ」

乾いてひびわれた唇を無理に笑わせながら、不意に、ノーザンバラムンディが夫に話しかけた。

「伊達にあなたの奥さんはやってないわ。もう、覚悟はできています」

強がる妻を不安にも不憫にも思ったが、ダトニオイデスはことさら笑窪を深めて、茶化すように言った。

「そうか。じゃあ、そうさせてもらうよ。いや嬉しいな。腕が鳴る。いったい何人相手にしてくれるやら」

「何のことですの」

「おまえが腹ボテの間は、よその女に手を出してもいいと言うんだろう?」

「誰がそんなことを!」

ノーザンバラムンディが素早く投げた羽根枕を、ダトニオイデスはわざと真正面から顔で受けとめてやった。

「いい気にならないで、ダトニオ。いつまでもこんなとこに寝てる気はないし、たとえ寝てたって、外のことを知る方法はいくらでもあるんですからね！」

「それじゃあ、その子が生まれてくるころまでには、コリドラス家の財産がすっかり減ってるって寸法だな」

「どうして」

「そなたの間諜どもを買収するためだよ。すると、そなたはそなたで、俺以上に支払って裏をかこうとするだろう。俺がまた密かに値をあげ、そなたがまた……」

「バカ言わないで！」

ノーザンバラムンディの怒鳴り声に、寝室の壁という壁がびりびり震えた。隣の部屋では、生まれつきのようにいつも深刻な顔だちのプレコトムスが、いっそう皺を深くした。

だが、そのせりふの語尾が消えるか消えぬかのころ、ノーザンバラムンディの唇は夫の唇に塞がれていた。

「……意地悪」

「暴力女」

「天邪鬼」

「三段腹」

「お腹のことは言わないでったら！」

「いや、このみごとな脂肪はいい蒲団になる」
「あなたの子の?」
「いや、この俺自身のさ」
「やめて、重くしないで、赤ちゃんがつぶれちゃうじゃないの!」
「このくらいのことでくたばるようなガキなら要らない。生まれて来たってろくなもんにはならん」
非難しようと唇を開きかけたノーザンバラムンディは、夫の表情の厳しさに声をのんだ。しどけなく妻にのしかかった恰好のまま、ダトニオイデスはどこか遠くを見つめているかのようだった。
「今は時代の変わり目だ。俺は格別強い子だけが欲しいのだ」
「時代の……変わり目……?」
「そうだ」
ダトニオイデスは声を密め、妻の柔らかな耳朶を軽く嚙みながら囁いた。
「明日、五大家当主の会議がある。俺とグァモンはそこで、ちょっとした騒ぎを引き起こすだろう」
「騒ぎですって」
「そうだ。これまでと同じようなこれから、昨日と同じような今日が来るのは、あるいは今

日までのことかもしれぬぞ、ノーザン。そなた、確かさきほど、覚悟はしてあるとか言ったな？　できる限りの覚悟をしておくがいい。なまじの覚悟では、かえって仇となるやもしれぬぞ」

言い終わると、ダトニオイデスは、いぶかしがる妻を目にとめて破顔した。どこまで真剣なのか判らないような顔つきで、言う。

「まあ、人並はずれてたくましいそなたのことだから、心配はいらんな」

「いやだ……からかってるのね！」

ノーザンバラムンディは頰をふくらませた。

「あたしはこんなに気分が悪いっていうのに！　ほんとうにひどいひと。こんな時くらい、こころの底から大事にしてくれたらどうなのよ」

「よしよし」

ダトニオイデスは機嫌よく笑い、頰を叩いておいて、妻の傍らを去った。

が、次の間に入った時には、彼はもうすっかり顔つきを険しくしていた。プレコトムスが思わず緊張して立ち上がるほどの苦痛めいた表情だった。

（よりによってこんな時に、赤ん坊ができちまうなんて！　ミトラの恩寵）

ダトニオイデスは歯嚙みした。

身軽な装いをしているはずなのに、肩が重くきしんだ。まるで目に見えぬ重い頸木が嵌め

られたかのように、ダトニオイデスは感じた。彼はけして自分の妖馬にそのような不自然で屈辱的な恰好をさせたことはなかったが、世間ではなかなか言うことを聞かぬ家畜をも荷運びに使わぬわけにいかぬものだ。頸木を引かぬなら、固い面頬をつけさせ、鞭で打つ。そうなると馬等は、まっすぐ前しか見ることができない。脇目もふらず、ただ容赦のない背後の痛みから逃れるために、どこまでも進むのだ。

(走りだしたならば、走りつづけなくてはならぬ。どこまで引いて行けるものか、とにかく引きつづけて見るしかない。たとえ脚が折れ、心臓が破れようとも……妻や子が置き去りになろうとも。

そうして、俺は自分が駄馬ではないことを証明しなくてはならぬのだ)

(証明)

(誰に……?)

グアモンの顔が、死んだ祖父の顔が、従弟ディアルトの顔が、浮かんでは消えた。次に見えたのは、さっきいとま乞いをして来たばかりの妻、ノーザンバラムンディの、青ざめやつれた表情であった。嬰を孕んでくれたその女のカサカサに乾いたような顔を思い描くと、ダトニオイデスは胸の痛みを覚えた。

それは愛しさであった。切ないほどの情であった。

彼はかつて、冷酷といえるほどの冷静さで、ノーザンバラムンディを妻に選んだ。選択は

こころを躍らせたが、それは自らの馬を決める時とさほど変わるものではなかった。当主の配偶者たるに相応しい血統であるかどうか、男という男を奮い立たせ得る美貌と艶を持っているかどうか、性格は捩れていないか。さまざまな要素に点をつけて、他の女たちよりひときわ飛び抜けていたのが、たまたま彼女であったに過ぎぬ。彼女は彼の期待によく応えた。豪快なほど気風がよく、見込み通りに、さまざまなものを与えてくれた。甘えられ頼りにされる感触、いつも明るく温められた部屋、そして肉の悦び。妻が何かをねだって流し目を使う時、快活に笑い声をあげる時、ダトニオイデスは自信と満足を覚えた。妻を可愛いとも思った。が、少しも愛したことはなかったのだった。これまでは。

今、彼はめぐりあいの神秘を悟った。彼女を失いたくなかった。彼女を誰よりも幸福にしてやりたかった。自分自身よりも、世界の全体よりもずっと大切であると感じた。が、彼はそのような感情をよく知らなかった。

だから、ダトニオイデスは恐怖した。戦慄した。自分が途方もないばかになってしまったような気がしてならなかった。

（ああ、なぜこんなに寒いのだ。なにがこんなに怖いのだろう。

ひょっとすると、俺は、何か恐ろしいことを予感しているのだろうか。

あるいは。

あるいは、せっかくのわが子の顔を見ることができないとか……？）


MITSUMI

不意に浮かんだ疑問の孕んだ不吉さに、ダトニオイデスは顔を顰めた。この戦を無事に過ごすことができなければ……自分が死ぬにしろ、妻が死ぬにしろ……その愛しいものの顔を見ることはできぬ。わが子がどのような容姿であったのか、知ることはないのだ。

(ああ、明日……!)

(明日が、一年先だったら良かったのに)

(が。その時はその時でもっと先であったらと願ったかもしれない。何もかも、定めのままに流れてゆくだけなのだ)

(流れて……)

計略を立てだしてから初めて、ダトニオイデスは、変化を恐れた。

(くそ……ディアルトめ! どこにいる? どこに消えた?)

(戻ってこい。わが家に来て、まっ先にこの俺を倒せ。さもなくば、共に、このイデーンのために立ち上がれ、わが兄弟よ……!)

5

会議はランデール内の五大家別邸のいずれかを持ち回りで使用する決まりである。この日最初にランデール入りしたのは、その館を解放する順に当たっていたシフィル・ロリクタ

ス・ポリプテルスであった。彼は供も連れず、一艘の小舟を使って、ネリル河を下って来た。が、船を舫い、小さな館の門を潜ってみると、かの三人の叔母たちは彼よりもなお早くに、既に到着していたのである。

「閉め切っていたから少し匂ったけど、もうだいじょうぶ」

「お茶もお食事も、わたしたちがみーんな整えておきました」

「若いあなたに任せて、なにか準備に怠りがあってはいけませんからね」

「叔母上がた……」

シフィルはそっと拳を握りしめた。

「いつもながらの濃やかなおこころ遣い、まことに痛みいります。しかし、どうか、せめて他家のかたがたの前では、そのようなおふるまいは無用にねがいます。かくもあからさまに半人前扱いをされたのでは、わたくしの信望に関わりますゆえ」

「まあっ」

「わたしたちがいつ」

「あんまりじゃありませんの……！」

叔母たちは色めきたったが、シフィルは黙って背を向け、そばの窓の桟を指先でなにげなく擦ってみせた。

「あっ！」

「ま、まさか……いやだことっ！」
「これ、誰か、誰かっ！　掃除のものはどこです、まだ済んでいないではありませんかっ！」
衣ずれの音高く叔母たちが去ってゆくと、シフィルはようやく肩の力を抜いて、手近な椅子にかけ、長いまつげを伏せて嘆息した。
「荒れなければいいが……」

互いの種族、それぞれに尊き家系の繁栄と名誉を讃え祈る、しきたり通りの口上の後、会議は滑らかにはじまりを宣言された。差し障りのない報告が、連絡事項があげられ、それははじめいつもの彼等の集いと変わりのない、ゆったりとまどろむような雰囲気を漂わせた。
これを打ち破ったのは、ダトニオイデスの急な発言である。
青ざめるシフィルの止めだてする間もなく、大地の長は発言権を得、よく響く声色にて聞き捨てならぬ情報をもたらしたのであった……。
「つ、追放されしものたちが!?」
これを聞いてまっ先にひきつったような声をあげ、座を蹴って立ち上がったのは女王のように着飾った金の主、ペルラだった。
「こなたに攻めて来やると!?　まさか！　どこにそのような証拠がっ！」
「興奮しないでください」

ダトニオイデスは両手を机から離しもせずに、低く言った。
「わが一族の間に、そういう噂が流布していることは事実なのです」
「信じられぬ」
吐き捨てるようにつぶやくシフィルを横目に見て、ダトニオイデスはにやりと笑った。
「では、水の若君にお尋ねしよう。祭りの夜、あなたは何をなさいました？　不穏な噂に恐れ騒ぎ狂徒となって暴走せんとした民衆を、慈雨をもってみごとお鎮めになったのは、あなたではありませんでしたか？」
「……！」
「それとも、あれは、恐れ多くもあなたの名を騙った贋の御当主さまだったのかな？」
「これ、大地の」
片手をあげて、グアモンが制した。
「話が逸れてはおらぬか」
「失礼しました」
ダトニオイデスは笑窪を消さずに、グァモンに、同に唇を噛むシフィルに、深々と礼をした。
「しかし、信じられぬとはあまりです。あり得ない話ではないではありませんか。彼等にはラーミアがいます。我等には容易に越えられぬかのヴェリダヌスも、彼等には錠のかからぬ

扉も同然。どうか、みなさま、よくお考えください」
使いこまれた長卓の端には、至宝『青の水鏡』を模した作り物を背後に、この家の若き主が座している。たっぷりした陽光が玻璃越しに降り注ぐので、室内は少し暑かった。が、シフィルの額が汗ばんでいるのはただそのためばかりではなかった。
（謀ったな、ダトニオイデスめ……グァモンめ！　そ知らぬ顔をしおって……だが、我には読めたぞ。そなたらいつの間にやら結託したな⁉）
祭りの夜、あの大岩が騒動の中心となった以上、大地の種族がなにがしかを企てていたことはわかっていた。また、クリプトカリオンが扇動の一翼を担ったことも明確だった。だがまさか既に、手を結んでいたとは……！
『火と土の共に動く時、世界の礎は崩れ去る』
神託を思い浮かべて、シフィルは眩暈を憶えた。
（だが……だが……共に、いったい何をしようというのだ？　オーブが揺れなんとする、この時に……！）
他の当主たちもしばらく誰も口をきかなかった。シフィルはそっと、みなを見回してみた。ペルラはいらいらと爪を噛み、森の古老は眠っているかのごとくに瞑目し、グァモンは腕組みのままむっつりと卓の一点を睨んでいる。そして、ダトニオイデスは、あの薄気味悪い笑窪をくっきりと刻んで、いかにも嬉しそうに、次々にみなを眺めているのだった。目が合う

と、ダトニオイデスは剽軽にも眉を掲げてみせた。シフィルは急ぎ、顔を背けた。
「して、そなたの真意は？」
突然に、厳しい声でペルラが問うた。
「ダトニオどのは、かの忌まわしきものたちと交易を結ばんという以前の提案を、ただ蒸し返したいだけではないのか？」
「いいえ」
ダトニオイデスは立ち上がった。さすがに笑窪は消えていた。
「もはや、そんな悠長なことは言うておられません。急ぎ、力ある精霊等を集め、軍となし、奴等の侵入に備えるべきです。準備さえ充分であるならば、むしろ、今こそこちらからオーブ山麓を制圧にでかけるべきとも思われます!!」
「なに」
「戦を仕掛けると？」
「そうです、そして」
発言を封じるようにみなを睨み回し、ダトニオイデスは言った。
「当然、五大家会議は、解散します!!」
ピクリと、森の老人が動いた。
「まあっ！」

ペルラが喉を押さえた。
「ば……ばかな!!」
シフィルが席を立った。
「引け、ダトニオ。それは暴挙というものだ」
「何がばかだ」
ダトニオイデスは吠えるように、喝した。
「非常時においては、火急迅速なる決定が鍵となる。絶対的な決定権を委ねられた唯一の指導者こそが必要なのだ。だらだらと会議などして、誰に責任があるやも至極うやむやなこのような状態では埒が明かぬ。座りこんで死を待ちたいかたがたは、そうするが良かろう。俺は嫌だ！　もはや、じっとしてはいられぬ！」
「論旨が狂っている」
シフィルは言った。
「そなたは己が好悪を他者に強要する愚を犯している。今、騒乱を望むものがこのイデーンにどれだけある。我等が求めるべきは、和であって、戦ではない」
「ええい、その和とやらが、もはや絵空言だと言うに！」
「のう、大地の？」
こどもをあやすような声で、ペルラが言った。

「そなた、なぜそう癇癪を起こす？　不安はわからないではない、が、われらは天なる神々に守られしものではないか。なぜ、わざわざ掟から外れ、ミトラの教えに背かんとする？　その反抗こそが、あるいは天罰を招こう恐れのあるものを……のう、森の長どの、そうじゃありませんこと？」

「……む……」

木の精霊等の当主、ミラルダ・オトシンクルスは小さくうなずいた。

「与えられしものを受くるが良い。与えられぬものは、求めぬが良いのだ」

……そうは言ったが。その顔にも、態度にも、けして出されることはなかったが。五大家会議が解散すると言われた時、森の長老は、実は、密かに、長いこと喉を詰まらせていた塊が、すっと取れたような心持ちがしたのだった。

会議の解散は、高き血の五大家の尊さをまごうかたなく否定した。ミトラ神よりもたらされし長き掟の完全なる無視は、天の神々の消滅をも意味した。イデーンでは慣例通りであることが即ち正しいことであり、おのおのの家にはその暮らしの隅々にまで明らかな伝統があった。最も古き血を引きたるものたちは、最も頑迷で百年、日変わりのない生を生きていた。それが、ただのひとことで、あっけなく覆されてしまったのである。

ミラルダ老は苦しんでいた。外孫のヘテランテラとその嫁ディディプリス・ディアンドラ

の行く末を、どうしてやればいいのか考えあぐねていた。やがて自分が死んだ後、ヘテランテラは森の一族の長の座を引き継ぐことになる。それはそう先のことではあるまい。が、その孫の嫁は……さらに次なる当主の母となるべき女は……大地の種族に属すのだ。運命の歯車がミラルダの息子と孫の生命を一瞬にして奪うまで、ヘテランテラは全くの傍系であった。ためにまさか自分が長の掟に縛られることはないと、他の種族から妻を選んでいたのである。

「止めてくださいますな、どうか、お止めくださいますな！」

美尾猫の精は、緑色を帯びた黒に濡れたように輝くその素晴らしい尾を自ら切り落とそうとしているところを、辛うじて取り押さえられた。夫がこよなく愛し、自分でも何よりも自慢に大切にして手入れを怠らなかった尾を、彼女は、哀れにも恥じ、憎むようになっていたのである。この次には、己が生命を断たんとするやもしれぬ。あるいは、どこぞに行方をくらまして、夫の出世のさまたげとなるを避けんとするやもしれぬ。ヘテランテラの懸念と心衰も、また激しかった。

オトシンクルス家の親族には、この際は夫婦別れをさせるべきだと、したり顔に箴言するものもあった。が、それもまた、永遠を誓いし婚姻の忠実に背き、ミトラ神の顔を踏みつけにする行いのひとつに相違はない。ディディプリスはそのままに、森の一族の内よりよき娘を選んで儀式ばったおりにはそちらを妻と倣し、世継ぎは殊に注意深く、ただそちらにのみ生ませるが良かろうという意見もあった。が、かくも不自然な身の上に進んで自らを貶める

おとめのあるはずもなかろうし、また、ただでさえ気鬱の激しいディディプリスが、そのようなことがらを喜んで承諾するとも思われぬ。美尾猫の精が、この上我が身を虚しく儚いものと思いなすようなことを起こせば、彼女を我が半身と呼ぶヘテランテラまでが世を厭い定めを恨み、一族のものたちをけして許さぬに違いない。

かといって、他に世継ぎはおらぬ。他族なる女による子を望まぬならば、オトシンクルス家の純潔は、少なくともヘテランテラの次の代にて果てるのだ。

老人の苦悶は深かった。何ひとつ、正しく思われる道がないにもかかわらず、時は流れ、いずれ選択が迫られる。我が寿命の尽きなんとする日こそ、英断の望まれる時なのだ。が……。

が。もし、今、五大家全体が崩れ去れば。木・火・土・金・水の、どの種族も等しくその意義を失ったならば。すべては、何の問題もなく、あるがままに肯定し得るのだ……！

世継ぎの血筋を、なぜ、問うのか。愛らしい嫁が、どうして、その生まれつき神より恵まれし美しい黒緑の尾をかくも忌まわしく思いなし恥じる必要があろうか。仲よき夫婦は夫婦のままに、生まれしこどもはその子の育つままに、なぜ、ほうっておいてはいけないのか？ひとのこころを惑わせ傷つけるような掟に、なぜ、諾々と従わなくてはならぬのか……？

ダトニオイデスの発言は、老人の心臓に熱き血潮を呼び覚ました。反骨の気概に、その枯れ木のごとき指が、わなわなと震えたほどであった。が、彼は長老と呼ばれる男であった。

この席にある五人の中で、ひとり図抜けて長くその座にあったものなのであった。ゆえに、彼は、どんなにその心中が揺れ騒ぎ動いても、必ず不動でなくてはならなかった。真反対の主張をどんなにはっきり理解しても、そちらを主張することができたならばどんなに楽かを知っていても、家族を思う感情がどんなにせつなく暴れても……彼は、その生涯のほとんどを費やしてきた立場を、守らなくてはならなかった。

「大地の長どの」

擦れる声で、彼は言った。

「反対意見が大半であることはお気づきじゃろう。これ以上、枉げて主張を通すならば、我等はそなたを叛徒と見做さねばならぬ。ミトラ神に仇なす反逆の罪にて捕らえ、当主の名を剥奪し、それこそ、そなたの懼れる川辺のものたちのように、イデーンより遠く追放しなければならなくなるが……」

息を押し殺すあまり真っ赤になっているダトニオイデスを、森の長は慈悲深く見つめて、かすかに笑った。

「それは、あまり芳しくあらぬな」

「そうよ、そうよ！」

安堵して、ペルラは指輪だらけの両手を叩いた。

「ね、だから。もう一回、よーく考えなおしなさいよ。ね、ダトニ……」
ダトニオイデスは物凄い眼で金の女王を睨めつけ、黙らせた。しかし、意外にも、何も言わなかった。
「では……」
くらくらする頭をなんとかまっすぐに立て直して、シフィルはその美しく整っているが血の気のない唇を、苦しそうに押し開いた。
「この問題については、今しばらく静観するということに……」
「あいや、待たれよ」
グァモン・セミアクィルスが、低い声で遮った。
「わたしは大地の当主につく。これで二対二だ。大差とはいえぬ」
（ぬ……！）
シフィルは唇を噛んだ。
（それでも、こちらが多数だ！　無理押しはできぬぞ）
「まあっ！」
「まことか、炎の？」
グァモンは片側の頬だけを薄く笑わせて、肯定した。
「会議の無効を主張するにいまさら掟を考えに入れるのは、なにか片腹痛いようだが、この

ような時には二つの神殿に判断を仰ぐが定めであったかと存ずる。わたしは予め使者を立て、ラルバタスの巫女どの、サラマクセンシスの神官どのに、予想できる事情を説明し、お出でを乞うておいた」

(予めだと……!?

そこまで準備をしておったのか!)

シフィルはぎりぎりと奥歯を噛んだ。

(ふたりながらの陰謀ぶり、とうとう白状しおったな!)

「ふたかたとも快く賛同してくれた。ゆえに、今ここで、お招きしようと思うが?」

「その必要はない!」

シフィルは叫んだ。

「わたしは神託を知っている、それは、確かにあなたがたの密かなる結託を、謀叛をこそ、しっかりと示していた。ダトニオイデスだけではない、グアモンどの、あなたもまた反逆者だったのだ!」

「『火と土の共に動く時、世界の礎は崩れ去る』」

ダトニオイデスは言った。

「この神託のことか? なあ、シフィル、これのどこが反逆なんだ?」

「な、なに……?」

「世界の礎とは」
愛敬(あいきょう)あふれる笑顔を作ると、ダトニオイデスははきはきとよく響(ひび)く声で続けた。
「五大家会議のことに他ならぬ。崩れるのが悪いとはどこにも言っておらんではないか。崩れる、と、単に、事実を述べているのだ。要するに、崩れちまうのが正しいってことさ。神託は絶対だ。我等の為せしことは、天におわします偉大(いだい)なるミトラ神のはっきりと意志したことなのだ」
「き……詭弁(きべん)だ！」
噴煙(ふんえん)を上げるオーブの幻影(げんえい)を、シフィルは髪(かみ)を振(ふ)り乱して打ち払った。
「そうではない……そのことを言っているのではないのだ！　世界は、世界の礎とは……ああ―」
「いいから、ほら、早く手を繋(つな)いでったら！」
ペルラが装飾品(そうしょくひん)のために重たい手を、焦(い)れったそうにシフィルの手に絡(から)めようとしている。その手の先から、薔薇(ばら)色の火花がぱちぱちと細かな触手(しょくしゅ)を伸(の)ばしている。見れば、ダトニオイデスが、あわてふためきながらグアモンの手に飛びついている。
(環(わ)か……！)
シフィルはサッと緊張(きんちょう)した。彼が長の地位についてより、このような事態が来るのは初めてのことであった。ミトラの拇指(おやゆび)を急ぎ招くため、森の長老が『力の環(わ)』の実行を決断して

呼びかけたのだ。
「よいか？　では、繋ぐぞ……！」
長老の声に、みな、改めてその両手を隣り合うものの手にしっかりと結び合わせた。高き血を引きしものたちは、今寄り添い集まってひとつに繋がった……！
五人はたちまち、神秘の力が発生するのを感じた。時は止まり、場は捩れ、彼等はすでに水の種族の館ではなく、天と地の境目のどこと特定できぬまばゆい雲の間に、緑・赤・黒・黄・青の五色の輝点を持つ光の環となって浮かんでいた。肉体を越え、思想を越え、それぞれの個人の能力や特徴も越えて、彼等はひとつの聖なる機関となって働く。それぞれの自我は、光の環のごく微細な一部として残っていたが、光の全体の大きな波動に飲みこまれ翻弄され、今にも消え去りそうに儚かった。それは五つに大別することで安全な形を取っているイデーンの全能力を、いま一度混沌と熔け合わせ、臨界点近くまで引きだすための、非常に微妙な、言ってみれば危険な方法だった。
「ラルバタス……!!」
長老が率先して、声なき呼び声を発した。残りの四人も、知らず知らずのうちに同じように呼んだ。意味はないと知りながらもついつい唇を動かし喉を震わせようと必死に努めている自分を感じたが、肉体は既にひどく遠くにあったので、それはみなに、夢の中でもがいているような焦れったさを催した。

時を置かず、巫女が来た。湖の巫女は淡紫色の、三日月となって、環の外側に生じ、輪の同心円上の軌道を巡りながら、それ自体も緩やかに回転した。
「サラマクセンシス……!!」
神官が来た。岬の神官は銀色の太陽となって、輪の中心点を押さえ、十重二十重の光芒を放ちながら燦々と脈打った。
「我等尊き血を引きしもの」
長老の意志がみなを率いて魂のことばを紡ぎだす。
「五行の象徴を預け任されしもの。陰陽なるミトラの両拇指に、金イデーンの精霊の血命を賭けて問う!」
「問われよ!」
「問われよ!!」
太陽と月が、競い合うように激しく瞬き輝いた。
(ああ、何をどう訊いたらいいんだ?)
矮小なるシフィルの自我がちりちりと焦れた。この状態では、こころに浮かぶことが残りの誰に読まれても不思議はないことを知ってはいたが、どうしようもなかった。
(もう、みんなに話してしまってもいいころなんじゃないだろうか? いつまでも、ぼくひとりで抱えているにはあまりにも大きすぎる……オーブが、オーブが、噴火するかもしれな

いってことは！）

「礎とは」

環が尋（なず）ねた。

「世界の礎とは何か。問う！」

「……ことば」

「理（ことわり）」

「ミトラの恩寵（おんちょう）」

答えは、環の内を、痛みを伴（ともな）う木霊（こだま）となって駆け抜けた。

「大地」

「素（そ）」

「炎」

「樹木」

「素」

「水」

「素・素・素」

「ことばですって……？」

誰かの自我が狂（くる）ったように笑いだすのがわかった。



「恩寵ですって？　さっぱりわからない！」

「では、礎が崩れると、どうなるのだ？　問う！」

「崩」

「壊」

「崩壊」

太陽と月は、忙しなく点滅を繰り返した。

「……イデーン＝無……!!」

「う……わぁっ！」

「ああっ！」

彼等は見た。いや、その魂の全体で、形なき肉体のすべてではっきりと感じた。すべてが揺れ動き、すべてが滅び、すべてが失われるのを……魔峰オーブが爆発し、パンガシアノドン・ギガスが沸騰し、イデーンじゅうが崩れ、沈んでゆくのを……!!

6

サラマクセンシスの塔の屋上に、しなやかな尾を持った小さな影が腹を抱えるようにして蹲り、啜り泣いていた。はぁはぁと荒く息をつき、全身びっしょりと汗に濡れて、熱病のよ

うに震えていた。

「ああ……ああ、ああ……何てことだろう！……」

やがて上げられた額には、銀色の刻印が刻まれていた。その頭部には、猫属の徴を示す大きくとがった耳があった。

これが、太陽の神官の姿なのであった。彼は泣きじゃくっていた。このような重要な地位にあるとはいえ、彼は、まだ幼いこどもだったのだ。

「いっぱい、いっぱい死んじゃう。みんな怖がって逃げるけど、どうしようもないんだ。どこにも行くとこはない。イデーンは、全部なくなってしまうから。助けてあげたいけど、ぼくらには、どうすることもできないんだぁっ!!」

思いがあふれて、また熱い涙となった。広がる海の彼方に、誰もいない辺境に、彼の悲痛な声が轟いた。

「ああ、神託なんて！　誰も聞いてくれなきゃいいのに。どうせ逃れられない運命を前もって知ったからって、何にもならないじゃないかぁっ!!」

その時、彼の頬を、何かの気配が撫でていった。

（違うわ！）

「……あ……」

くすぐるように、慰めるように、彼の顔の周囲を飛んでいるのは、幾千という幻の蝶だっ

た。蝶はみな美しい紫色の羽根を持っていて、ちらちらと光る粉を撒き散らし、うっとりするようなよい香りをたてた。

(できることは、あるわ!)

「……月? 月だね?」

少年は思わず尾を振りながら叫んだ。

「左の拇指だね!」

(そう、わたしよ)

蝶は宙に集まって、遠い湖の神殿にいる女の姿を描きだしたが、また離れた。

(元気を出して太陽! あなたの助けがいる。勇気と、行動がいる。力を合わせて、救える限りのひとびとを救いましょう)

「うん……」

涙を拭って、少年は立ち上がった。

「わかった。がんばるよ、月! やってみる」

少年はひとり灯台の端まで行き、海風に三角の耳を靡かせた。遠い空から届く光に額の太陽の徽がちかりと瞬くと、少年はたくましく微笑んだ。

「心配かけてごめん。ぼくは、もうだいじょうぶ」

(お願いね……!)

少年の額の太陽に接吻するかのように吸いこまれて、蝶たちは消えた。少年はいつまでもいつまでも、海を見つめて立っていた……。

第四章　追放されし者

1

グァモン・セミアクィルスが会議のためにランデールに発ってからというもの、カリクティス家の煉瓦城は、時ならぬ活気と興奮に満ちあふれた。あたかも乾いた草原に放たれた火のように、また鞍を外された妖馬のように、城じゅうがのびのびと華やぎにぎやいだのであった。

　これは彼がみなに嫌われ疎まれていた、ということを意味しているのではない。確かに、姉である先の女当主、慈悲・才覚・美貌のどれにおいてもその名がイデーン全土につとに鳴り響いたルビスの母エスメセス・アピスト・カリクティスの時代に比ぶれば、彼は小物であり平凡な長であった。彼に対する一族の期待も関心も、姉に対するほどに高かったとはいえぬ。みな、エスメセスの娘であるルビスの登場をこそ、こころ楽しく待ち侘びており、グァ

モンのことは、所詮中途繋ぎのただの摂政役のように思い做している節はあった。

だが、その限定された役割を、彼はよく務めた。実直に勤勉に、単調な実務も困難な裁定も、愚痴ひとつ零さずに辛抱強くこなしたのである。頭を低くしては偉大なる姉を忘れ得ぬひとびとの助力を仰ぎ、腰を折っては先の長はそうは言わなかったとごねる年寄りの愚にもつかぬ意見によく耳を傾け、退くべき時にはけして出すぎることはなく、主張する時にもあくまで遠回しに他人を介してみなの中より提案があったかたちを取る、緩く束ねて懐柔するその独特の手腕は、地味であり時として陰鬱でこそあったが、けして侮れるものではなかった。グァモン・セミアクィルスは誰の目から見ても、非難に価するような長ではなかったのである。

されど、当主たるものは、もともと煙たい存在でこそあるべきである。そこに居るだけで、他のひとびとは多少とも緊張ししゃちほこ張り窮屈な思いをせずにはいられぬ。が、今、カリクティスの城は尋常の時ではない。新月の夜に控えた婚礼の準備に、時と人手はいくらあっても足りぬほど。当夜のなにくれを任されたものたちは……ことの性質上そのほとんどが女たちであったのだが……月がその姿を細らせるに従って、みなじりじりといらだちと焦りを感じていたのである。

よい頃合に訪れたグァモン不在の機会は、彼女等に好機を与えた。日常のよしなし事をとりあえず棚上げにし、作法やら品やらといった体裁はいいが実務の妨げとなるものを大っぴ

らにないがしろにし、ばたばたと慌ただしくスカートの裾をからげて、怒鳴りあいながら心ゆくまでてきぱき働き動き回ることのできる気安い雰囲気をもたらしたのである。あるいは婚礼は単なる口実にすぎなかったのかもしれない。奥床しく慎ましい名家の婦人たちは、頭に血を上らせ金切り声をあげても誰にも責められることのない解放の時に、そうそう恵まれることはなかったのであるから。

女たちは親族の誰彼を高飛車な口調で呼び寄せては、城じゅうの整頓と飾りつけに、宴の料理の下拵えに、炎十字の家紋を刺繍した三角旗や式典に出席するものたちの衣裳の繕いに、連日連夜上を下への大騒ぎを繰り広げた。みな必要以上に我が役目に熱中し、万一わずかな暇でもあろうものなら、自分がどんなに重要で困難な役割を果たしているかを他人に聞かせたがった。男たちはといえば、このような時には身の置きどころすらもない。戸惑いながら立ち尽くしては、通りすがりのものにちょうど良い具合だと言わんばかりにガミガミ命じられ顎で使われ、不器用ながら健気に律義にふるまうのがせいいっぱいであった。ものの役にも立たぬとなれば、いとも無惨に邪魔者扱いにされ、おとなしく隅に控えてこっそり酒でもあおっていなければならぬ。自分の下着がどこにどう仕舞ってあるのか、生まれて初めて知ったものも多かった。それでも文句を言うものはなかった。世紀の婚礼騒ぎに多少の犠牲がなんであろう？　カリクティス家に連なるひとびとは、みな少しばかり芝居がかって浮かれていた。

高き血の五大家の当主の血統にあるものの婚礼は、ただそれだけでも一族あげての一大事である。しかも今回、その夜の主人公は、僅か半年足らずを経れば長の名を継ぐべき、うら若く美しい花嫁なのだ！　妙なけちのついてしまった収穫祭の夜を補うために訪れてくれるかのごときこの慶びの日に、炎の精霊等は、みな生涯最大の感動を期待せずにはいられなかった。

「招待状の返事は、誰が管理しているの？」
長い回廊を急ぎ足に歩きながら、グアモン・セミアクィルスの妻アミアカルバは、傍らにちょこまかとつきまとうマルランドに鋭く尋ねた。
「火蠍の主の妻、レピドレシンです。もう二・三通で、みな揃うということです」
「では、席順の修正案を急ぎ持って来るように伝えて頂戴。それで……冷し肉は足りそう？　詰め物にする果実は？」
「はい」
マルランドはせかせか足を動かしながら指を舐め、手にした帳面を素早く繰って、ようやく答えを見つけだした。
「ウバウオのポベリニィが大地のかたがたの許に出向き、大角鹿を一頭譲り受けて来るころです。また、リムノフェラが森のみなさんの協力を得て木の実や果物を集めています。充分

かと存じます」

「そう」

アミアカルバは遥か前方を見つめたままに微笑んだ。

「ご苦労。みなに、感謝してると伝えておいてね。誰もあまり無理をしないように、おまえよく見張っておいてちょうだい」

「はい。……でも、奥さま」

マルランドは太り過ぎのために少しばかり早く歩くとすぐに息が切れてしまう性分だった。身軽なからだで滑るように進む雪蛍の精に遅れぬよう歩きつづけるのは彼女にとっては難儀の極み、全身に汗をかかなくてはならない。せいいっぱい張り上げたその声は、悲鳴に近かった。

「あなたさまこそ、いま少し、お休みになりませんと……！」

「そうも言ってられないわ」

「ではせめて何か、滋養のあるものを召し上がってくださいませ。そのままでは、いまにお倒れになってしまいます」

「だいじょうぶ、ちゃんと食事しています」

「とおっしゃっても、昨日も立ったままパンケーキをひとつふたつ摘まれただけじゃありませんか。今日は、何を、どこで、どのように召し上がったとおっしゃるのですか、え、奥

さま!?、奥さま……っ!!」
マルランドが足をもつれさせたので、とうとうアミアカルバも立ち止まった。
「……マルランド」
「はい?」
マルランドは荒い息を殺してきゅっと口を窄め、ぷっくりした頬を強調した油断ならない顔つきで当主の妻を見た。どんなうまいことを言われても騙されはしないぞ、と言わんばかりであった。
アミアカルバは肩を落とした。
「あのねえ。わたくしのことはいいから、ルビスさまを……それに、カラ・セミアクィルスの面倒を見てやってちょうだいな。ああ、そうだわ! カラの衣裳はどう? 正式の席のための立派なのがあったでしょう、でも、あれ、古いのよね。虫は食ってない? 丈が足りなくはなっていなくって?」
「はい。お夜食の後に、奥さまとカラさまの試着の用意があります。針の得意なものたちも数名控えさせてあります。今宵よりかかればご当日には、どんな虫食いだってうまく誤魔化せますとも」
どうだ、とばかりにマルランドは顎を上げた。
「でも、お食事の後です。必ず、食堂で、座って、召し上がっていただきますよ! 奥さま

のお腹が普段以上にぺっちゃんこでは、試着の意味がありませんからね」
「……わかったわ。ちゃんと行くわ」
アミアカルバは苦笑しながら片手を振ってこの件にけりのついたことを示すと、また勢いよく歩きだした。あわてて小走りに追いかけながら、マルランドは潜めた声で言った。
「ねぇ奥さま、ルビスさまですけれど」
「ええ？」
「まだ頑固に閉じ籠ってらっしゃるんですよ。それは、まあ、いいんですけれど……」
「どうかしたの？」
「……鳥を、作っていらっしゃるのです」
「鳥？」
アミアカルバはいやな感じに顔色を変えたが、ちょうど擦れ違った大荷物を抱えたものたちを通してやるために脇に避けるのに忙しかったため、マルランドには気づかれることはなかった。
「ええ。鳥なんでございますよ。余り布と、庭木の枝かなにかで……小さいのから大きいのまで、何羽も何羽もお作りになって、お部屋の中で飛ばしてらっしゃるのです。時には、窓からお投げにもなるようです。お食事を持ってまいりましたら、わたくしを窓辺に立たせて、ほらあの子はあんな遠くまで行ったのよ、おまえも飛んでみたらどう、なんて。そりゃあも

う尋常とも思われぬぎらぎらと瞳の光るようなお顔でおっしゃって、わたくしが恐ろしくてどきまぎしてるのをご覧になると、たちまち大笑いなさったりして……」

　アミアカルバはそっと心臓を押さえた。ルビスが、作り物の鳥ではなく、自分のからだをあの高い部屋の窓から岩肌の地面に向けて無雑作に投げるところが、目に浮かんでしまったのである。

「どうもルビスさまは少し様子がおかしくなっておられますからね。目が離せませんよ、奥さま！　一応、うちの姪っ子のツクナレとニアサエを控えさせて、なにくれと気晴らしのお相手をするよう言いつけてはありますから、何かあったら、すぐわかるかとは思いますけれども」

「やめて、マルランド。何かなんて言わないで頂戴」

　無理に笑いながら、アミアカルバはマルランドの腕を掴んだ。

「……きっと……ええ、きっと、たいしたことじゃないわ。あの子も何かと落ち着かないのよ。何かしていないといられないんだわ。無理はないわ」

「そうでしょうか」

「ねぇ、ひょっとすると、その鳥は、旦那さまへのプレゼントのつもりなのじゃないかしら。クリプトカリオンは、しょっちゅうなにくれと物を持って来てくれるでしょう。負けず嫌いなルビスにしてみれば、貰いっぱなしが苦になるとか。うんとよく飛ぶ鳥ならば、一番遠く

まで飛ばせたような鳥ならば、稲妻の主への贈り物としては、気が利いていると思わない？」
「……そうでしょうかしら……？」
マルランドは丸い顔を疑惑でいっぱいにして首をひねったが、ちょうど廊下はその終点に来ていた。当主の妻が小さな手を伸ばすよりも先に、マルランドがサッと前に立って、大広間の扉を大きく開け放った。
「……まあ、奥さま。素晴らしいですわ……！」
大広間は、会議の際には五大家の当主等が集う場として使われる、城で最も大きく立派な部屋である。ありったけのテーブルを並べて婚礼の宴の支度に使われているその部屋の、こちら側の片隅を仕切って、今、ルビスのための真紅の花嫁衣裳が完成しつつあった。ビーズや羽根を縫いとめていた針の係の娘たちがさっと立ち上がって会釈する中を、アミアカルバはうっとりと進みでた。
「……ほんとう。美しいわね……」
「お気をつけくださいませ、まだあちこちに針が」
娘のひとりが言ったが、アミアカルバは構わず衣裳に近づき、そのつややかな表面に指を滑らせた。
（なんて贅沢な……なんて立派な衣裳だろう！）
（これが娘のカラのものならば）

母の胸が曇ったとたん、指先がちくりと痛んだ。
「あ」
「奥さま！」
「ごめんなさい。汚してなければいいけど」
当主の妻は赤らんだ頬を不器用に微笑ませ、血のしたたる指をそっと舐めながら、からだを引いた。
「このような具合でよろしゅうございましょうか」
年長らしい娘が代表して尋ねた。
「もう少しビーズを増やすこともできます。今はこのようになっておりますが、パニエをお着けになった上でお召しになれば、もっとずっとスカートが広がってみえるかと思いますが」
「お髪には、小さなティアラをつけていただく予定となっておりますです」
マルランドが言った。
「ルビスさまのみごとなお髪ならば、余計な飾りはいらないかと」
「ええ、それでいいと思うわ」
アミアカルバはうなずいた。
「このままで充分よ。とても素敵だわ。ありがとう、みんな。あまり疲れないようにね」
「はい」

「はい、奥さま、だいじょうぶです」
素直にまた針仕事に戻る娘たちの会釈に答えながら、アミアカルバは痛む指をぎゅっと握りこんだ。そうして、次なるつとめに出かけようと、開いたままの扉に戻りかけた、その時である。
「ああ、叔母君、そちらにおいででしたか」
廊下の彼方から声がした。
「お探ししましたよ」
「まぁ、だめよ、クリプトカリオン！」
アミアカルバは急ぎ表に出て扉を閉め、背中で押さえた。マルランドが何か叫びながら扉の向こうでがちゃがちゃと取っ手を鳴らしたが、開けるわけにはいかない。婿になるものが式典の前に花嫁衣裳を見てしまうのは、不吉だった。そんなことになれば、この忙しいのに、衣裳をまるごと作りかえなくてはならないのだ。
(でも、そうすれば、あれはカラが貰えるかも)
「何を赤くなっておいでなのです」
五芒星の徽を持つ男はクスクス笑いながらすぐそばまでやって来ると、アミアカルバの手を取り、儀礼的に口をつけた。近ごろではまともな口のききかたにもずいぶん慣れてきたようだ、とアミアカルバは思った。マルランドも、彼の声を聞きつけて事情を察したのか、お

となしくなった。
「ごきげんよう、クリプトカリオン。今日はルビスに逢えて?」
「いいえ」
稲妻の主はことさらに渋い顔を作って、肩をすくめた。
「我が花嫁は、炎の一族ではなく、凍てる大海パンガシアノドン・ギガスの御当主となられるべき運命でいらっしゃるのじゃありませんかねぇ? ぼくは辛くて辛くて痩せてしまいましたよ。これでも顔に似合わず傷つきやすい性分なんです」
「ほほほ、そちらのご準備はお進み?」
「ご同様のてんやわんやです。なのにぼくには何にもさせてくれない。しちゃいけないって言うんです。まるで邪魔者扱いです。おかげで、花嫁のつれなさを毎日毎日律儀にも確認するために、こちらに出向いて、また邪魔者にならずにいられないって寸法なんですよ」
「邪魔になんかしなくてよ、クリプト」
アミアカルバは若者の腕に手をからめた。クリプトカリオンは、彼女の夫とちょうど同じほどに長身だったので、話相手を見上げるようになるその感じは彼女に思いがけず懐かしい落ち着きをもたらした。
「いっしょにお茶にしましょうよ。いいえ、お食事もどうぞ」
「それは少し申し訳ない」

「いいえ。お願いするわ。わたくしもどうも邪魔者らしいのよ。マルランドなんてわたくしの顔を見るたびに躍起になって食堂に追い立てたがるの。こんなおばさんの相手なんてお気の毒だけど、つきあってくださいな」

「光栄です」

クリプトカリオンは恭しく言い、華奢な雪蛍の精を脅かさぬようゆったりとした付き添いぶりで歩きだした。

「しかし、我が花嫁が叔母君ほどうちとけてくださるのはいつの日か」

「お式の翌朝でしょうね」

「……叔母君……？」

「初夜を済ませば、気がせいせいするわ。たいしたことじゃないってわかるもの」

「叔母君……」

クリプトカリオンは苦笑して、自分の腕に絡んだ当主の妻の小さな手をそっと叩いた。

「お疲れのようだ」

「あら、そう？　どうして？」

あどけなく見上げるアミアカルバの瞳に宿り輝く幾千の星に、クリプトカリオンは密かにため息をついた……。

2

（また、暮れていく）

ルビスの居室は館の最上階の片端にあった。夜食の時間を過ぎても収まらない城じゅうの騒ぎも、さすがにこの高みにまでは届かなかった。

窓枠に腰をかけて見はるかす茫漠たる荒れ地の遅い日暮れは、彼女に湖への辛いひとり歩きを思いださせた。が、それは、もう幾年も前のことのように朧に遠かった。巫女の魔術で幻の蝶の大群と共に、一瞬のうちに城に帰してもらったことも、湖の神殿のさまざまな様子も、神託も、衝撃的だったその意味さえも……実際にはつい数日前にあったできごとばかりであるにもかかわらず、ルビスにはもうぼんやりとしか思い描くことができなかった。それらはみな、甘やかで不思議で、どこかしらひどく作り事めいていた。

（もしかすると）

と、ルビスは考えた。

（みんな、ただの夢だったのかもしれない。わたしはほんとうは、ここから一歩も動いてなんかいなかったのかもしれないわ。知らぬうちにまどろんで、都合のいい御伽噺のような場面ばかりを胸に描いて、それをほんとうにあったことだと思いこんでいるだけなのかも……）

膝の上に置いて弄んでいた手作りの鳥の模型を、ルビスは急に乱暴に外に投げ捨てた。

鳥は、くるくると錐揉み状に回りながらみじめに落ち、そのまま岩にでも当たって砕けるかと思われた。が、不意に吹いて来た風にうまくすくいあげられるようにして、偶然にも正しい滑空姿勢を得たのである。

残虐なる笑いに口許を醜く歪めていたルビスは、これを見て思わず立ち上がり、窓から身を乗りだした。夕映えに照らされた作り物の羽根は燃え立つようにまぶしく輝き、まるでほんものの翼のように、何かの魔法で突然に生命の恵みを受け取ったもののように、生き生きと自由に飛翔するのであった。

「……ああ……飛んでく。あんなにじょうずに飛んでいくわ……」

飛んで飛んで、とうとう丘の向こう側に鳥が見えなくなってしまうと、ルビスはがくりと頭を落とした。

窓の外、真下には、岩だらけの地表があった。どんなに身の軽いものでもここから飛び降りたならば生命に関わるだろう。窓枠の出っ張りを除けば、煉瓦の壁はほぼ垂直に切り立っている。古くなって欠け落ちたりひびが入ったりした漆喰のところどころに、どこから種が飛んで来たのかちょぼちょぼと情けない草がまばらに生えている。

見るともなくそんな草を見つめているうちに、葉の影の一部が風もないのにかすかに動いていることに、ルビスは気づいた。よく見れば名も知らぬ小さな甲虫が葉の裏で蠢いていた



のだった。
　虫は長い時間をかけてもぞもぞと移動し、葉の表にたどりついた。それは小さく、黒く、飾り気のない虫だった。このような寒い時期まで生き残っているべきものではなかったのかもしれない。虫の動作は緩慢だった。ひどく弱っているように見えた。
「……おいで……こっちにおいで」
　ルビスはそおっと腕を伸ばした。虫はぴたりと動かなくなった。
「いじめないわ。ごはんあげるから。おいで。おいで……」
　やっとそば近く届いたルビスの指に、虫は戸惑い、触覚の先でそっと探りを入れた。ルビスはあやすように、にっこりした。
「そうよ。おいで」
「……きゃあああっ!!」
　突然背後で悲鳴が上がった。
　ルビスは驚いて窓枠についていた手を滑らせ、虫は飛び立った。室内がいやに静かなのを不審に思ったツクナレとニアサエは、そうっと開けた扉から、ルビスが窓から身を乗りだし、正に飛び降りようとしているところを見つけたものと決めこんだのだった。姉妹はたちまち手にした本や人形を放りだし、叔母そっくりの丸いからだですっとんで来た。
「ルビスさまっ!!」

「いけませんっ、いけませぇんっ!!」
「きゃあ!」
姉妹はもちろんルビスを抱き止めようとしたのだが、あわてたために勢いあまって、かえって窓の外に余計に押しだす恰好になった。靴が飛び、ルビスの踵がニアサエの顎を打った。脇腹のくすぐったいところに摑みかかるツクナレの手から無意識に逃げもがくからだはますます支えとてない宙に泳ぎだし、他のふたりをも引きずってさらに重心が外にずれた。まぶしい夕陽が容赦なく射る瞳をやっとの思いでこじあけてみると、遥か下にあるはずの地表が、岩が、すぐそこまで迫って見えた。ルビスはめまいを起こしそうになったが、それでも必死で叫んだ。
「放して。違うったら、お願い放して!」
「いけませぇんっ!!」
ツクナレの引きがようやく決まった。どうとばかりに折り重なって床に転がり落ちた三人は、はあはあ荒い息をついた。呼吸が静まり胸いっぱいに温かい安堵が広がるにつれ、ルビスの瞳はぐんぐん吊り上がり、怒りのあまりかっかと赤く燃えだした。
「……バカっ!!」
怒鳴ると、ルビスは立ち上がって、目をぱちくりさせている生命の恩人たちを蹴飛ばし小突き回した。

「出てって！　早く出てってよっ!!」

「で、でも、ルビスさま」

「痛い、痛いですったら」

姉妹は這いつくばって頭を抱え、床を転げて逃げ回った。

「出てって。ひとりにしてって言ってあるでしょっ!!」

「でも」

「わたしたちはただ」

「退屈なさっておられるかと」

「どうしても出てかないなら……」

薔薇色の髪を燃え立たせ、紅蓮の瞳でふたりを冷たく見下ろしながら、ルビスは低くつぶやいた。

「ほんとに飛び降りてやるから」

この数日のうちにルビスの気性を思い知っていたふたりはたちまち震え上がり、誘い合ってそそくさと出口に急いだ。彼女等の持って来た人形や本や生まれたてらしい小さな翼豹までをも乱暴に廊下に投げ捨て、バタンと音高く閉め切った扉に背をもたせると、ルビスはほうっと肩を落とした。

そのまま床までくたくたと崩れこむ。ふくれ上がっていた髪も今は力なく垂れ、瞳は力な

く潤んだ。
膝を抱え、頭を伏せて、ルビスは蹲った。
（また日が暮れる。一日が終わるんだ。
なのに、なのに。
今日もやっぱり何ひとつ起こらなかったのね……）
ルビスは声をたてなかった。身動きひとつしなかった。茜に染まった床の上で、ただひとり、いつまでもじっと小さくなっていた……。
と。
床に長い影が落ちた。静かな気配に、ルビスは血の気の失せた顔をあげた。
「……だれ？」
瞳を凝らしても、はっきり見えなかった。誰かが窓辺に立っている。沈みゆく太陽に燃え立つ空を背にして、影絵のように立っている。
「こんばんわ、花嫁さん」
やさしい声が、そう言った。
「……あ……」
「落とし物ですよ」
「ディアルト!!」

両手を広げて駆け寄るルビスと、男の手の中から飛んだ作り物の鳥が擦れ違った。ディアルトは少しばかり面食らいながらも、飛びつくルビスのからだをちゃんと受け止めた。
「ディアルト、ディアルト、おお、ディアルト！」
首に腕を投げかけて激しくむしゃぶりついたかと思うと、ルビスは急にぱっと飛び退いてしゃくりあげ、ぎらぎらと光る瞳で彼を睨みつけた。
「ひどいひと！　ひどいひとよ、あんたはっ!!」
「おやおや」
ディアルトは笑った。
「ずいぶんいきなりだなぁ。俺がきみに、何かしたかい？」
「バカ!!」
（何もしてくれなかったから、ひどいんじゃないの！）
ルビスはディアルトの胸を打ち、そのままひしと抱きついた。
「あんたなんかあんたなんか、なにさ。大っ嫌いなんだからっ！」
「言うこととやってることが、少しずれてるよルビス」
「ほっといて！」
ルビスはディアルトの胸にしがみついたままできる限り顔を背け、いっぱいに見開いた瞳を宙に彷徨わせた。

泣き顔は見られたくなかった。きっと、目も鼻も真っ赤になっているに違いないのだから。見て欲しかった。他の誰にも見せたことのない自分だったから。

まとまらない思いに危うく揺れるまなざしが、ふと床に落ち、鳥に止まった。瞬きしてもう一度見直してみたが、それは確かにさきほど自分が窓から投げ捨てたはずの鳥である。あっと言ってルビスはディアルトを見上げた。

「……拾ってくれたの？」

あどけなく輝くその笑顔に、彼はつられたようににっこりとうなずいた。

「そう言ったじゃないか」

「ね、憶えていた？　すぐわかった？　わたしからの合図だって、ちゃんと気がついたの？」

「合図？」

「とぼけないで。迎えに来てくれたんでしょう？　ああ、きっと来てくれるって思ってた。信じてたわ、わたし！」

さっき泣いたばかりの顔を感動と興奮につやつやとさせながら、ルビスはディアルトをうっとりと見上げてみた。今度は、彼のほうから何か言ってくれるに違いない、しっかりと抱きしめてくれるはずだと思ったのだ。

だが、相手は、いつまでもぼんやりと腑に落ちない表情をしている。ルビスは眉を顰めた。

「なによ？」

「いや、俺はただ、ちょっとばかり挨拶に来ただけのつもりだったものだから」

「挨拶？」

「そうだよ。婿さんができちまったら、もう、こんなふうには逢えないだろうからね」

「……ディアルト」

（ああ、なんて焦れったいひとなんだろう！）

ふくれっ面に、悔し涙が滲んだ。

（ほんとうはわたしを失いたくなんかないくせに、どうして正直にそう言えないのよ……意地っ張り！）

頭の中を湖の巫女の紫色の姿が掠めていく。神託の一言一句が蘇る。

だが、それを得々と告げることは憚られた。既に決定していることとして、偉大なるミトラ神によって保証されてしまったこととして、喜ばしげにまことしやかに語りたくはなかった。

互いのこころが求め合ってこそ、結ばれる喜びがひとしおであるはず。逆らうことのできぬ何者かの手で無理やりにでも娶らされて成就するなど邪道至極。苦しみもがき傷ついても、真実の愛のためであれば、耐えられぬことなどあらぬはず。なればこそ、あのような思いを抱いて荒れ野を渡り、恐ろしい神託にひとり直面するを選んだ自分ではなかったか？　ルビスの胸は千々に乱れた。せめて、最後の一歩は、彼のほうから踏みだして欲しい、と、思わ

ずにはいられなかった。
勝気に傲慢に怖いものなしにふるまっていても、実はルビスの魂には、貞淑にして慎重なる母の教えが底の底まで染みついている。当主の地位にあってさえ、母は、よほど切羽詰まった時以外には、絶対的なことばをけして口にすることはなかった。特に父に対しては、完全に謙譲と敬虔を守り、いつも三歩後からついてゆくような妻であったのである。
女の唇は権威ある内容をしたり顔で語るためにあるのではない。男というものは、自分より賢い女、彊い女、勇気ある女をけしてほんとうには許さないものだ。女の唇は、ただ愛らしく赤く瑞々しくあれば良い。相手を安心させるような他愛ないお喋りを煩わしくない程度に紡ぎだし、慎ましく食べ、淑やかに飲み、不意の口づけに戸惑いながら従順に応じるためにだけあれば良い……少なくとも、男の前ではそのようにふるまっておくのが得策であり、永遠に愛される女となるための大切な条件である、と、かつて母は何度も何度も教えてくれたものである。疑問を持たなかったわけではないのだが、どこかでそれを信じてしまっているルビスであった。
（愛してるって言って……！　あなたから言って）
必死の思いで、ルビスは運命の恋人を見上げてみた。
だが、ディアルトは途方に暮れたような顔をして立っているばかりだ。その夜のような瞳の向こうでいったい何を考えているのやら、ルビスには知るよしもない。

躍起になって空回りしている自分が、急に恥ずかしくなった。平然と知らぬ顔をしている男が憎らしくなった。いたたまれなさに、ルビスはあえて背を向け、鳥を拾いにいった。

それは小さく、みすぼらしく、実に不器用な作りだった。かつてこどもだったディアルトが作って飛ばして見せてくれた凧に、少しも似てなどいなかった。そんなものに必死の思いと時間をこめた自分がばからしく、少女めいて愚鈍であるように思えて、ルビスは我知らず頬を赤らめた。

「婚約のことは、ちゃんと知っているのね」

思いもかけぬ冷たい声が、真紅の唇から漏れてしまう。

「ああ、聞いた」

ディアルトはゆったりと壁に凭れると眩しそうにルビスを見た。が、ルビスは振り向かなかったので、その視線に含まれたせつない色には気がつかなかった。ディアルトは、口では、余裕たっぷりに言うのである。

「きみはいまや、ランデールじゅうの噂の種だよ。他種族の娘たちまで、ルビスさまに肖ろうってんで次々に髪を紅に染めちまって大騒ぎだ。親たちは嘆くし、天咲花の精は大忙しなのさ。いやはや、かくのごとき天下の憧れ、おとめの偶像と、かくも親しくお目にかかれるなんて、我ながらなんという幸福者だろう。まことに、光栄至極に存じますよ」

「特に反対しているわけでもないみたいね」

「反対？　どうして」
ディアルトは声を張り上げた。
「おめでたいことじゃあないか。……ああ、そうか。きみは花婿の華やかすぎる過去を気にしているわけか。確かに、彼は相当にモテたみたいだからなぁ。きみを恨んで嫌がらせのひとつもせずにいられない娘さんも、多いかもしれない。でも、まあ、どっしり構えていればいいさ。そんなことで挫けるきみでもあるまいよ」
わざとらしいまでに明るい言い方の嘘を、無理を、強がりを、ルビスは感じずにはいられなかった。
（なんてばかなんでしょう。神託であれば、受け入れるべきだと思ってるのね。でも、ああ。その神託は誤って伝わっているのよ！）
ぎゅっと握りしめた手の中で、作り物の鳥の作り物の骨がぽきりと折れた。
「ねえ、ディアルト。あなたは少し呑気すぎなくて？　もし、わたしがひとを呼んだらどうするの。あなたは清い花嫁の部屋に不当にも侵入した汚らわしい他所者だわ。うちの一族のものたちは、そのような無礼をけして許さないわ。きっと、ひどい目に合うのよ」
「だろうね。もし、きみがひとを呼んだらね」
振り向いたルビスに、ディアルトはかすかに笑って両手を広げて見せた。捨て鉢なのか、余裕たっぷりなのか、どちらともわからぬ仕種であった。

（わたしが、そんなことしないって思ってるの？　滅多なことでは負けたりしないって思ってるの？　うまく逃げてみせるとでも？

それとも万一わたしの癇癪のせいでなぶりものになったって、それはしかたがないってこと……？）

「呼んでやる。すぐに呼んでやるから！」

こころにもないことばがルビスの唇をまろびでた。

「あんたはばかよ。おおばかよ。うちの連中はうんと強いのよ。大勢で押しかけて来たら、あんたなんかぺっしゃんこなんだから。絶対、絶対敵いっこないんだから、さっさと逃げなさいよっ!!」

「おやおや」

「いったいどうやって逃げる気？　……ああ。そうだわ。ディアルト、あなた、いったいどうやってここに来たのよ？　あんな高い窓から」

「おお、わが姫」

胸に手を当て、歌うようにディアルトは答えた。

「もちろん、そなたを思う心を翼に変えてでございます」

「ふざけないでっ！」

「ごめん。ほんとうは、ラーミアに乗って来たんだ」

「あ、そう。それは凄いわね」
ルビスはそっけなく肩をすくめたが、次の瞬間、目を丸くした。
「……ラ……ラーミアですって……!?」
ディアルトは白い歯を見せてうなずいた。
「そうなんだ。ラーミアなんだよ」
「嘘……どこ、どこにいるの？」
「乗ってみたい？」
「もちろんよ!!」

3

食事を終えて帰ろうとしたクリプトカリオンを、当主の妻と娘は中庭の竜の繋ぎ場まで見送りに出た。新月の晩花婿になるべき男はこの時まですこぶる如才なく丁重に快活に愉快にふるまっていたため、アミアカルバはたいそう上機嫌だった。ひとりはしゃいで喋りつづけ、いつまでも彼を引き止めた。やっとこうして出て来ても、廊下の端の重たい扉の鍵が迂闊にも閉められたままであるのを見つけると、率先して取りに戻った。そんなことででも彼の帰りが少しでも先に伸びるのが嬉しいかのように見えないこともなかった。

母がそばを外した機会をカラ・セミアクイルスは逃さなかった。雪蛍の精のか細い姿が見えなくなるやいなや、素早く稲妻の主の腕を引いて、噛みつくように言う。

「ね、どうするの。どうしてる、アリナは?」

「……どうって……」

クリプトカリオンは唇を歪め、カラのすました鼻の頭を指で弾いた。

「どーしようもねぇだろうが。なにせミトラさまの御神託だぜ?」

遊び仲間たちの頭目役が、やっと長年見慣れた男らしい口のききかたをしてくれたので、カラは思わずホッとした。が、とがらせた唇は意地でも笑わせなかった。

「恋人だろ。いいのかよ。アリナ、ぐれるよ」

「バカ言っちゃいけねぇ。あいつがあれ以上どう悪くなるって」

「なんだよなんだよ」

カラはおとなぶった流し目をした。それは、彼女がこの世で一番いい女だと思っている狐火の精の仕種を真似したつもりだったのだが、きつい化粧もない今は、まるで似合っていなかった。

「さっぱりわかっちゃないね。アリナ悪くなんかないよ。はすっぱなふりしてるだけ」

「ほお?」

「だってさ、そのほうがあんた、好みだろ? あのひと、あんたにぞっこんなんだよ。ねぇ

ほんとだよ、クリプト、わかってるんだろ？」
「ちっ。ガキが知ったような口きくんじゃあない」
言いながらクリプトカリオンは、母の手で淑やかな編みこみにされたカラの頭を押さえこんで、乱暴に撫でた。
「余計な心配してねぇで、ちゃんとかあちゃんに孝行しろよ」
「やめて、ぐちゃぐちゃになっちゃう」
「なぁ、カラ。マジな話おまえ、化粧なんかしてないほうがよっぽど美人だぞ？　たまに素顔で出かけてみろよ。きっとモテるぜぇ」
カラはドキリと一瞬動作を止めたが、すぐに稲妻の主の腕に歯を立てた。
「……痛ててて！」
「アリナを不幸にしたら許さない」
「おいおい、カラ」
「ルビスなんか似合わない。ルビスに尻尾振るあんたなんか、あんたじゃない。全然カッコ良くなんかないよぉっ！」
「おーい」
バタバタと走って行くカラは、角でその母と擦れ違った。クリプトカリオンはあわてて姿勢を正した。

「まあ、いったいどうしたの、うちの娘は」
「なにやら、突然用事を思いだされたようです」
アミアカルバは怪訝そうに顔をしかめ、肩をすくめたが、何も言わずにかちりと鍵を開けた。勧められるまま、先に立って外に出たクリプトカリオンはふと気配を感じて空を見上げた。
「うっ!」
「……どうしたの?」
続いたアミアカルバの喉が、ひゅっと鳴った。
ふたりとも実物を見たのは初めてであったが、見間違いようもなかった。魔峰オーブ山麓にのみ住まうという伝説の不死鳥が今、館の窓から、その巨大な翼を広げて夜空に飛び立ったのだ……!

「あの丘、ナスタチウム?」
「そうだよ」
「うわあ、ずいぶん低いのねえ。じゃ、あれ、あっちの光ってるのロリカリア? シフィルのうちのあるとこ?」
「当たり当たり。土地勘がいいじゃないか」

（この間いっぱい歩いたからよ。毎日窓から外ばかり眺めていたからよ）
ルビスの頭の中をちらりと憎まれ口が走り抜けた。だが、空はあまりにも気持ちがよく、ディアルトはやさしく、ふくれっ面はほんのひと呼吸分も保つことができなかった。
「他には、他には？」
彼女は尋ねた。
「そうだな。見えるかな、あの緑の間に、こう横に走ってる長いやつ。あれが、天下のネリル河だよ」
「うん、うん、わかるわ。すごーい、長いのねぇ」
「おっと、あんまりきょろきょろしてるな、落ちるぞ」
「平気よ！……ああ、待って。いいものがあるわ」
衣の腰に結わえていた赤い飾り帯をするすると解くと、ルビスはそれで、自分とディアルトのからだを重ねたまま、しっかりと結びつけた。
「これで離れないわ。落ちる時はいっしょよ！」
真っ赤な髪を気持ちよさそうに風に靡かせながら、ルビスはこどものように笑い声をあげた。背後から彼女のよく弾むからだを抱いて支えたディアルトは、困ったもんだと頭を振ったが、ルビスの髪を通り抜けてきた風の香りに思わず眼を細め、その腕にそっとやさしく力をこめた。

怪鳥はふたりを乗せて、いとも軽々と大空を舞った。胸いっぱいに吸いこむ空気の新鮮さ、上昇し下降し旋回する時のふわりとからだのなくなるような感触。誰も追いつけないほど速く、星々にすぐ手の届きそうなほど高く、脅かす何者からも遠く、誰よりも大切に思う男とただふたりきり自由気ままに空を駆けている……ルビスには何もかもが信じられないほど幸福だった。万一落ちればとんでもないことになるのはわかっていたが、少しも怖くはなかった。

ディアルトがいる。ディアルトがこんなにそばにいて、抱きしめてくれている。彼は珍しい尊い鳥をこんなにも巧みに操っている。これ以上安心できることがあろうか？

館も丘も遠い山々さえも今はひどく小さく、玩具のようだ。見慣れた景色が、見飽きた世界が、見知らぬ姿を見せてくれる。あるいは自分のほうが、変わってしまったのかもしれない、とルビスは思った。

（もうもとに戻れないほど、変わってしまったのかも）

（だって飛んでる……わたし、飛んでるもの！）

（待ってたのは、これなんだわ）

「ね。いつか、言ったね」

夜風に冷たくなった手で、腰に回されたディアルトの手を握りしめながら、ルビスは肩ごしに振り仰いでその瞳を見つめた。

「あたしも、いつかきっと空を飛べるって、あなた、言ってくれたわね」
「そんなこともあったかな」
ディアルトは照れ臭そうに顔をしかめた。
「よく憶えてるんだな、昔のことを」
「当たり前よ！　こんな大切なこと、忘れるわけないじゃないの」
「そうか」
困ったように顔を背けるディアルトの瞳を、放さぬよう、しっかりと見つめながら、ルビスは急に声を低くして、喉にひっかかるような声でつぶやいた。
「うんと、待ったわ」
「ごめん」
「待ったのよ。わたし」
「……うん……」
伏せられたルビスのまつげの先に、誘われるようにディアルトは顔を寄せた。唇は閉じたまぶたに、そっと触れる。
ルビスが不服そうに身動きするのを見ると、彼は小さく笑った。それから、ディアルトは、もったいぶって彼女の鼻に接吻した。そして頬に。顎に。
唇に……。

「ルビスさまがおられません!」
「まさか」
ツクナレとニアサエを従えたマルランドは、一歩進みでて、真っ青になったアミアカルバにそれを差しだした。
「お部屋の床に……これが」
「羽根?」
「ラーミアの羽根だ」
クリプトカリオンは拳を握りしめた。
「おのれ……何者だ!?」

(ああ……!)
口づけを感じると、ルビスのからだは押さえようもなく震えはじめた。熱い幸福と誇りがつま先から頭までを駆け抜ける。長い長いことひとりさりで祈っていたことがらのすべてが、今はじまり、正しい場所に納まるのだと思った。ルビスは自分がどんな顔をしているのか心配でたまらなかった。
(さっと、見つめられてる。わたしはちゃんと、きれいに見えるだろうか?)

(彼のほうから言ってくれればいいのに。きれいだと、愛してると、もう放さないと……どうして言ってくれないの?)

早鐘の心臓に脅かされるようにひしとしがみついたルビスを、だが恋人は、こともあろうにそっと押しやり、あの赤い帯を解きはじめたのだ。

「じゃあ、そろそろ送って行こうか」

ルビスは信じられぬ思いに瞳を大きくして、鋭く恋人の顔を探った。黒い瞳にはやさしさがあった。口許にはからかうような微笑みがあった。だが、表情の全体は、冷たく澄んで静かだった。それはあまりにもいつもの彼と同じでありすぎた。

こんなはずじゃない、とルビスは思った。この次に来るべきは狂おしい永遠の愛の誓いであり、手に手を取ってどこまでも行こうという無鉄砲な提案なはずだった。そうしたら自分は、おずおずと従ったのに。

(いったい何が間違ったのだろう? わたしはこの大切な時に、なにか彼を失望させるようなことをしたのだろうか)

「い……や……!」

ルビスは激しくもがき、そのあまり鳥から落ちそうになって、ディアルトを慌てさせた。

「放して! 放してよ!!」

「ルビス……ルビス、落ち着いて! 危ないよ!」

「帰すなんて、帰すなんて」

絶望と恐怖のあまり、ルビスの瞳は、ディアルトがこれまで見たこともないほど危険な光を宿し、ぎらぎらと燃えあがった。

「いやよ！　あんまりだわ。戻されるくらいなら、あたし、ここで死ぬわ！」

「ばかを言うんじゃない」

「帰らない。わたしは帰らない。いっしょに連れてってよ！」

「ルビス」

ディアルトはあやすように言った。

「驚いたよ。あんな立派な婚約者ができたっていうのに、まだこの哀れな孤児にそんなにご執心なのかい？　俺にはどうも信じられないな。たとえ一時の気紛れとしても、正直、とても嬉しいとは思うけれども……でも、いいかい、ぼくはコリドラス家にいるんじゃない。川辺の民のところにいるんだよ。そうして、これからまた、山に帰るんだ。とっても大切な役目があって」

ディアルトは口をつぐんだ。この時初めて、ただならぬほど悲痛なルビスの表情に気づいたのだった。

「……ごめん。……逢いになんか来るべきじゃなかったんだ」

（なんて他人行儀な言い方！）

無理に微笑んだルビスの頬に涙がこぼれた。彼女は静かに、言った。
「連れてって。お願い」
ディアルトは暫く黙って瞳を揺らしていたが、やがて、みごとに彫られた仮面のような笑い顔がその表情を覆い隠した。彼は、そっとルビスの頬に手をかけ、壊れやすいものを扱うように大切そうに、だがあくまで慇懃に、愛撫をした。
「だめだよ、ルビス。そんなふうに見つめられると、理性がどっかに行ってしまう。はじめて逢った時から、ぼくはその瞳に弱かった」
「あなたはわたしを愛しているんだわ！」
ルビスは唸った。
「愛しているはずよ。絶対よ！」
「そうだ。ぼくはきみを愛している」
ディアルトは自分のことばを確かに請け負うとでもいうかのように、ゆっくりとうなずいた。
「ぞっこんだ。夢中だ。めろめろだとも。……でも、お遊びは終わりだ。きみは家に戻るんだ。いいね。聞き分けてくれるね？」
（こんなはずはない……こんなことになるはずはない）
どきどきと胸を轟かせながら、ルビスはディアルトの瞳を窺った。そのうちに、彼の表情

や声や手の動きかたに似たものを、どこかで以前に見たことがあるような気がしだしたので、彼女は一心にそれを考えてみた。ようやく思い当たったのは、叔父グァモンのことである。叔父は馴れにくい小竜を手懐けようとする時、ちょうどこんな顔をしてみせる。そうして、乳離れして間もない臆病で剣呑な竜たちにさえも、最後にはちゃんと喉を鳴らさせてしまうのだ。

悲しみと怒りと屈辱が、ルビスの胸で爆発した。

「嘘つき！」

首を振って、ディアルトの手を振り解く。

「卑怯者！　いい加減なことを言って誤魔化すのはやめて。あなたはいつだって嘘ばっかりよ。いつだって冗談まじりで……愛してるなんて言って……あたしがばかみたいになるのを見て、笑いものにしてるんだわ！　あなたはあたしのことなんか、ちっとも見てない。あたしのことなんか、ほんとには好きじゃないんだわ」

「好きだよ」

ディアルトは言った。

「はじめて逢った時から恋に落ちた。だから、ぼくはきみにただの一度も嘘なんかついたことはない。ほんとだよ」

「だったら!!」

ルビスは叫んだ。
「だったらさらって。連れて行って。わたしをけして放さないで！　そんなこと無理だってあなたは思ってるかもしれないけど、無理じゃないわ。昔ちゃんとやってのけたひとたちがあるわ。それは他でもない、あなたのお父さんとお母さんじゃないの！　そのひとたちが、あのヴェリダヌスを越えてまで愛を貫き通したから、だからあなたがこの世に生まれてきたのよ。誰かがやったんだもの、わたしたちにだってできないはずはないわ。愛してもいない他の誰かのこどもを生まされることを思えば、わたし、何ひとつ怖くなんかないわ！」
ディアルトは何か言いたそうに口をあけたが、ルビスは止まらなかった。
「嫌だなんて言ったら、今すぐここから飛び降りてやる。ううん、あんたを地上まで蹴落としてやるから！　……だいたいね、あなたはわたしを何だと思っているのよ？　わたしは人形じゃないわ。こどもじゃないわ。花嫁よ。どんどんこどもを生んで、長の血を続かせることを嫌になるくらいはっきり期待されている、純潔にして敬虔なる処女なのよ！　そんなわたしを、夜遊びに連れだしたりして、き、キスなんかして、傷モノにしておいて。ただで済むとなんか思わないでよね！」
「傷モノって……」
「そうよ。わたし、わたし、初めてだもの。あんたよ。あんたがしたのよ。あんたのせいよ！　さあ、どうするの、ディアルト・バコバ・コリドラス。これ以上寝恍けたことを言っ

てお茶を濁したら、その黒い頭をちりちりに焦がして、ダトニオイデスみたいな巻毛にしてやるから。さっさと決心しなさいよね、このトンチキ！」
「とん……」
ディアルトはくつくつと笑いだし、しまいに腹を抱えて震えたので、鳥が揺れた。あわててしがみつくルビスを、ディアルトが助け、折れよとばかりに抱きしめた。
「わかった、わかったよルビス。いっしょに行こう」
「ほんと!?」
「うん。でも、どうも信じられない。どうして天下のカリクティス家の跡継ぎであるきみが、ぼくなんかにそんな。ねえ、きみはほんとうに正気なのかい？　誰かの悪い呪文にかけられて、こころにもないことを言ってるんじゃないだろうね」
「くだらないこと言うと殴るわよ！」
ルビスは拳骨を固め、息を吹きかけた。
「気が咎めるなら、たいした男になってみせて頂戴。このルビス・アピストが家を捨てるだけの男に、なってみせてくれればそれでいいのよ！」
「やれやれ」
「……ああ！」
頭をかくディアルトの首ったまに、ルビスは飛びかかるように抱きついた。

「嘘。嘘よ。ごめんなさい。ううん、本気よ。だって、あなたがあんまり意地悪なんだもの！　だってだって。愛してるんだもの！」
「可愛いよ」
ディアルトは苦笑して、暴れるルビスを改めてその腕に閉じこめた。
「戻れなくなるよ」
「覚悟の上よ」
「山は寒いよ」
「抱いていて」
「……ああ……全く、きみには全然敵わないよ！」
もう一度小鳥のように接吻を交わそうとした、その刹那。
光の剣がぴかりと飛んで、ディアルトの髪が何本か宙に舞った！
「なんだ？」
「きゃあっ」
「うわあっ!!」
轟音と共に空を裂く閃光。たちまちもくもくと沸き上がる黒雲。渦を巻く風にラーミアも思わず姿勢を崩した。凄まじい勢いで降りはじめた雨に、星も押し流されて消えてしまう。
ディアルトはルビスをしっかりと捕まえたまま、眉を顰めた。

「稲妻？　こんな季節にか？」
「……クリプトカリオン……？」
つぶやくルビスの視線を追って、ディアルトも振り向いた。七砂降りの彼方、紅蓮に燃える大蛇の姿をしたものが夜空高くに踊りあがり、睥睨するようにあたりを窺ったかと思うと、こちらを認めて、不吉な雷鳴を轟かせながら雷を吐いたのだ！
素早く避けた彼等の背後で、雷に打たれた岩山が砕けて散った。
「やっぱり！　あれはクリプトだわ。雷を放つ時、クリプトのからだじゅうからああいう変化の姿をした光が、一種の分身が、たちのぼるのよ！」
「なんでそう嬉しそうなんだ」
「そう？」
「……。いかん。しっかり捕まってて！」
大蛇に投げつけられた次の稲妻を避けながら機敏にラーミアを反転させると、ディアルトは気合いの籠った声をかけて、ぐんぐんと高度を下げた。鳥はほんの一瞬だけ迷い抗ったが、諦めたように彼に従った。たちまち切り立った岩山の間に滑りこみ、影を伝うようにして闇に溶ける。急激な動きと、今にもぶつかりそうに次々に迫って来る岩壁にルビスは背筋がざわめき吐き気を催したが、奥歯を食い縛って言った。
「どうして逃げるのよ!?」

（男らしく戦って、ちゃんと勝ってくれればいいのに）
「逃げ切れると思うからだ！」
濡れそぼつ髪をかき分けながら、ディアルトは決然と叫んだ。
「まだ俺ははっきりと正体を見られてはいない。こんなことで火の一族の憎しみを買うわけにはいかないんだ」
「なんだか……なんだか、卑怯みたい」
「じゃあきみは、俺にあいつを殺せって言うのか？」
その声の冷たさに、ルビスは思わず息をのんだ。
「殺せなんて。ただ、わたしは」
背後で重たいものが砕け散る音がした。小回りのきかない大蛇が岩山の狭い隙間に入りこもうとして激突したのだ。
（痛そう）
ルビスは思わず手を握りしめた。
「いいか、ルビス」
ディアルトは真剣な顔つきで鳥を制御しながら、早口に言った。
「戦いってやつは、いったんはじまってしまったら、そうそう手綱の取れるものじゃない。うんと力の差があればともかく、稲妻の主が相手じゃあ俺には加減なんてできない。ここで

真っ向からぶつかったら間違いなくどっちかが死ぬ。そうしたら、次に来るのは復讐だ。火と土の一族同士の大戦争だ。あるいは、山のこっち側と向こう側の戦いになるかもしれない。他の種族も巻きこまれないとはいえない。そんなことになってもいいっていうのか!?」

「わかった、わかったわよ」

すくめた首に、雨が冷たかった。ルビスがそっと横目がちに窺うと、クリプトカリオンの分身である大蛇は燃える全身をのた打たせて、岩山を砕き、通路を作り、たちまち背後に迫る勢いである。突然、大蛇の姿になっても消えぬ五芒星の徽が輝きを増しふくれあがり拡大したかと思うと、星環の稲妻となって闇に散開した！　電雷は触れるものをみな焼き払いながら駆け抜ける。直撃こそ免れたが、行く手の岩壁が崩れ落ち、ばらばらとラーミアの翼を打った。

「きゃあああっ、また来る！」

「抜けるかあっ」

一直線に飛んで来る星環の中心を、ラーミアは翼をすぼめて矢のように潜り抜けた。その瞬間、凄まじい衝撃が走った。ディアルトが咄嗟に背の上に伏せてくれなければ、からだじゅうが焼け焦げてしまったかもしれない。おかげで体勢を立て直す暇もなく次の岩場に突っこんだが、ディアルトはなんとも巧みに鳥を繰って、たちまち相手を引き離した。

だが、ルビスは面白くなかった。

（そんなにムキになって逃げなくったっていいのに）

殴り合いが見たいわけではなかった。自分のために流される血を考えたわけではなかった。だが、婚約者と名のつくものが追っ手となった以上、ルビスはただ、自分の恋人にはおめおめ後ろを見せて欲しくなかったのだ。正々堂々と勝負をして、きれいに決着をつけてもらえたら、みな納得をするだろう。一見神託に逆らっているふたりである、せめて勇気と誠意ある行動を取っていてくれたならば、後々、ディアルトこそルビスが選ぶに相応しい男であると、誰もがわかってくれるに違いない、と考えてしまったのだった。

（火と土が対立する？　わたしのために？　イデーンの秩序が崩れる？

まさか。

それは……それはひどい話だけど、恐ろしい話だけれど、でも……万一そんなことになったら。

それって、すごいじゃない。女冥利に尽きちゃうじゃないの！）

ルビスの胸は、抑えようのない興奮に熱くたぎるのだった。

（くそ、速い……！）

ついさきほどまでルビスが幽閉されていた塔の屋根に仁王立ちになって、クリプトカリオンは歯噛みをした。分身である真紅の大蛇はまたしても星環の稲妻を放ったが、怪鳥が狭隘

な隙間にするりと入りこむほうが数段早く、雷撃は虚しくあたりを破壊するのみである。彼は気合いをこめて大蛇の姿を為すものを変形させ、敵の行方に向けた。が、虹色の鳥ははや、悠々と翼を羽ばたきながら、彼の稲妻の届く範囲を抜けださんとしている。
花嫁も乗っているものと思われる鳥に、直に攻撃を加える気にはなれなかった。脅かしてすくませて思いとどまらせようと、なまじ手加減をしたが仇となった。いかに貴重な不死鳥といえども、雷をまともに喰らっては、まずは飛びつづけられまい。可能ならば片翼なりとも焼きはらって、失速し墜落するところを彼女だけ助けに行けばよかったのだと考えた時には、既に機会を逸していた。ラーミアはみるみる遠ざかっていく。
（あの方角は……ヴェリダヌスを越える気か……？　では、まさか、まさか……ルビスを奪ったのは……）
「クリプトカリオーン！」
突然の声に、五芒星の主は、はっと振り向いた。愛用の火炎竜に跨り夜空高く駆け登って来るは、なんと当主グアモン・セミアクィルス。
「叔父上！」
「止せ。そのへんにしておけ」
クリプトカリオンのからだの回りにいらだたしげな放電が光った。
「なぜに邪魔立てなさいます」

「なぜでも。今はよいから、戻れ！」

「いいえ、いかな叔父上のおおせと言えど聞けませぬ。追わなければ、あれらはこのままどこかに行ってしまいます。わが妻を奪われたこの屈辱のままどうして引き下がれますものか。ああ、その竜をお貸しくださいませんか、急ぎ追いかければなお勝機が」

「ならぬ。追わなくて良い」

　クリプトカリオンは刮目した。思わず、当主の乗ったものに摑みかかってそれを奪おうとしたが、グアモンのほうがまだ早かった。竜の背から飛び降りると、彼はクリプトカリオンの腕を後ろに捩りあげ、信じられぬほどの怪力で押さえつけながら静かな声で言う。

「そなたの憤慨はもっともだが、今は引け。それどころではないのだ」

「それどころではないと？」

　クリプトカリオン自身はしっかりと捕らえられてあがく術もなかったが、分身である大蛇はまだ自由だった。今はその真紅の顎を当主であるグアモンに向けて、しゅうしゅうと熱い息を放つ。グアモンの背は真っ赤に灼熱したが、それでも彼は手を離さなかった。

「いったいどうしたというのです、今我等が婚礼以上に重大ななにごとが、いったいこのイデーンのどこにあるというのです。ええ、お通しください。ああ、もはや見えなくなります……ええい、お通しくださいというに！」

　いらだつ大蛇の体表にばちばちと闇にも明るく稲妻が走った。グアモンはかすかに眉を顰

めたが、少しも力を緩めなかった。

「自惚れるな、クリプトカリオン。そなたの婚礼などものの数でなくなるようなことが、上に起こった」

「なんですって!?」

「まずは、下に戻れ。それから話そう。よいな!」

「叔父上!」

(……さては会議で、何かあったな)

待っていた竜の背に機敏に飛び移りたちまち引き返して、グアモンと、今はもう見えなくなったラーミアの消えた方角とを見比べながら、クリプトカリオンは迷った。大蛇はしばらくとぐろを巻いて盛んに火花を散らしたが、結局幻のように消えてしまった。彼は、叔父である当主に従うを選んだのだ。

そのころ、ルビスとディアルトを乗せた怪鳥は、早くもヴェリダヌス山脈にかかろうとしていた。『追放されし者』たちとイデーン一般の精霊等をきっぱりと隔ててきたこの山脈を越えたものは、長い年月の間にもけして多くはない。天然の盾とも城壁ともいうべき山々の険しい連なり具合に、ルビスは見蕩れて息をのみ、峯のひとつひとつの名を問い質したがったが、ディアルトは首を振った。

「このへんは空気が薄くて、ラーミアもぼくらもうんと苦しくなる。だから、お喋りはだめだ。暫くおとなしくしてて」
「……うん……でも」
既に日は落ち、夜の獣の爪のような細い月が高々と昇っている。山に近づくにつれ風がますます冷え、雨に濡れたからだがただでさえ凍えているというのに、行く手には赤子の拳ほどもありそうな雪の塊がちらつきだした。ルビスの両手はじんじんと痛いほどに痺れ、足の先の感覚もとうにない。吸いこむ大気の過酷な冷たさにきりきりと胸がきしみ、目の前がはっきりと定まらなくさえなる。炎の魔力を使って自分も彼も暖かくしてやりたいと思うのだが、あまりの寒さに力が出なかった。話をして気を紛らしてでもいなければ、どうにも遣り切れぬ気分であった。
（やはりわたしには、山になんか来るのは無理だったのでは）
暗がりに潜む牙のある獣のように、不安がルビスの柔らかい部分に襲いかかろうとしたその時、こわばる背中にふわりと柔らかい暖かいものがかけられた。思わずびくりと震える彼女に気遣わしげな笑みを見せながら、ディアルトは肩から外した自分のたっぷりとした黒いマントを、ルビスの喉許できっちりと重ね合わせてやった。
「さっきの騒ぎで、ちょっと焦げ臭いかもしれないけど」
「でも……これじゃあなたが」

「だいじょうぶ。ぼくは慣れてるから。もう少し伏せて」

押されるままにルビスができる限り前傾すると、ディアルトは彼女のからだじゅうを丁寧にマントで包みこみ、さらに自らのからだでその背を庇った。鳥の背の羽根の先が、マントの布ごしにルビスの頬にちくちくと触る。すっぽりと覆われて、あたりは仄かな暗がりになった。どうせ目を開けていても真っ黒いマントの裏地の他に見えるものなどない。

(あったかいけど、つまんないの)

ルビスは誰にも見えないところで拗ねた顔になって、そっとまぶたを降ろした。閉ざされた空気は自分の吐息でたちまち暖かくなったが、かすかに澱んで頼りなく、たちまち頭がぼんやりしてくる……。

……ルビスは夢を見た。

夢の中でルビスは、一羽の若いラーミアになって、美しい花畑の上を自由自在に飛んでいた。傍らにもう一羽の少し大きな逞しいラーミアがいて、それがディアルトであると彼女ははっきり知っていた。ふたりは互いに互いの周りを辿るようにしながら、どこまでも高く低く、楽しく飛び遊んだ。が。ふと気づくと、ルビスはひとりなのだ。彼がいない。どこかにいなくなってしまった。見回せば、もう一羽のラーミアは、何故か突然その翼を動かすことができなくなったらしい。あわてて追いかけるが、ルビスの身もまた蜜の中を動かすように重く、自由にならぬ。やがて、彼はもとのディアルトの姿になって、どこまでもどこまでも

落ちてゆく。どんなに追いつこうともがいても、せいいっぱい腕を伸ばしても、もうけして届きはしないのだ……。

「ディアルトォォォ!!」

自分の叫び声に飛び起き目を開いた時、あたりは猛吹雪だった。ルビスはあわてて、マントを被り直した。幾千万という白い結晶の中を、ラーミアはゆっくりと翼を動かしながら、泰然と飛んで行くのだった。

「……気がついた?」

頭の上のほうから、ディアルトの声がした。離れ離れになったのが夢の中だけであったと知って、ルビスは思わずほっと胸を撫で降ろした。

「ここは?」

「もうオーブのそばだよ。ああ、ちょうど雲が切れてる。見てみる?」

「うん」

「いいかい。雪でよくわからないかもしれないけど。ほら、あれ。あの大きいのが魔峰オーブだ」

凍えるまつげを手で払って、ルビスはせいいっぱいに瞳を凝らした。

山は、そこにあった。

あまりにも大きく、あまりにも高く、あまりにも真っ白だったので、はじめルビスにはそ

れをそれと見ることができなかった。降り頻る雪の舞いに眩惑されて、目の焦点が狂い、あたりはただ一面の白にしか見えなかったのだ。が、探しているものの規模を思い返して改めて遠くを見つめ直した時、山はあった。それは壁のように、世界の行き止まりのように、ほとんど垂直に立ちはだかっているただ一面の白いものであった。

「……あれがオーブ……」

「うん。でかいだろう。ここからじゃよくわからないね」

「そうね」

「さぁ、これから少し昇るよ。深くゆっくり息をしてね」

「あ、待っ」

言いかけたが、再びマントを被せられてルビスは沈黙せざるを得なかった。またしても、前は闇、愛する男に守られているという温かい闇ではあるものの、何ひとつ自分では見ることができぬ暗がりである。

(返そうと思ったのに)

(ディアルトは寒くないのかしら)

その実、自分はこの分厚い防寒具を奪われたら、一呼吸分とても我慢してはいられないだろう、とルビスは思った。冷えのためにかえって熱く燃えだした指先を吐息でなだめながら、一刻も早くこの寒さから逃れられるようにと彼女は祈った。自分が急に我が儘を言ってこん

なところまでついて来て、大切なマントを奪ってしまったおかげで、ディアルトが病気になりはしないか、凍えて死んでしまうのではないかと、頭の中は悪いほうに悪いほうに向かう。能うならば、己が腕に抱きしめて温めてやりたい。少し眠ったせいか、寒さに慣れたせいか、今は気分も落ち着いている。炎の一族の次期当主たるべきもの、全身全霊の死力を尽くせば周囲の温度を上げるくらいわけもないのだ。だが、ルビスはやはり、そうしなかった。それほどの体力を使ってしまってだいじょうぶなのかどうか不安だったせいもあるが、つまりはそうしたくなかったのだ。ディアルトがせっかく甘やかし思い遣ってくれている我が身を、弱いもの儚いものに思いなして庇ってくれているのに、あえて強がりたくはない。黙っておとなしくされるままに従っているほうが良いような気がしたのである。

じっと動かずにいると、からだの下に巨大な鳥の悠々たる躍動が感じられた。このような極寒の土地でも、悪天候の中でも、あの稲妻を浴びせられた後であっても、ラーミアはその力強い羽ばたきを乱されることはないらしい。逞しく、頼もしい、素晴らしい鳥だ……改めてルビスはそう思った。その鳥を意のままに繰るディアルトもまた類稀なる男なのだ。何といっても自分が見込んで、運命を賭けようという相手なのだから。そんなふうに考えると、少しばかり気が楽になった。

ルビスは待った。何か変化が起こるのを……今よりも少しましになるのを、うつらうつらとまどろみながら、ただじっと待った。

どれほど長いことたったろうか。ふいに、あたりが明るくなった。マントを隔てていても、陽光のまぶしさがそのまま伝わってくる。

ルビスはそっとマントをめくって、顔を出してみた。

ラーミアはいつの間にか雪雲を突き抜けたらしく、空の高みを飛んでいた。抜けるような蒼穹の一角にぽつりとひとつ、昇りたての太陽が浮かんでいる。純白に輝く雲の絨緞の上を、ふたりの乗った鳥の影が滑ってゆく。そして、ルビスの左手に雪冠を抱いて雲よりもなお高く聳える秀麗、あれこそかの魔峰オーブに他なるまい……！

「……ああ……！」

翳した手の隙間から、イデーンに住むものがみなよく知りながらおよそ目にしたことのない偉大なる山の最も高い部分を覗き見て、ルビスは我知らず震えだした。

「あれは……あれは……いつもなの？」

「いや」

ディアルトは頭を振った。黒髪にまとわりついていた雪の溶け残りが、きらめきながら散っていった。

「見ちゃったね」

「……あれって」

「うん」


MUTSUMI

彼は低く言った。

「たぶん、オーブは噴火するんだ」

「……噴火って……こ、壊れちゃうの？」

「そうだ」

「なんで？」

ルビスの声は擦れて、悲鳴になった。

「いつ？　どうして？　どんなふうに？　じゃあ……じゃあ、イデーンは……イデーンは、どうなるのよ!?」

「わからない。とにかく、わかってるのは、怖がってもしかたがないってことだ」

まさぐるルビスの指先を、ディアルトは力づけるように握りしめた。

「冷たいね。先を急ごう」

鳥はゆっくりとその方向を変えた。

今はもう寒さも忘れ、マントを肩に滑り落として振り返るルビスの目に、秀麗なる山の頂が映った。朝日を浴びたオーブは、静かにひとり立ちながら、うっすらと煙を吐いているのであった……。

4

「イデーン滅亡お？」
クリプトカリオンは素っ頓狂な声をあげ、膝を叩いて笑いだした。
「あっはっはっは。いやいや、叔父上も全くおひとが悪い。なにもそんなおおげさな嘘を持ちだすことはないでしょう」
「嘘ではないのだ、クリプト」
グアモンの声は今はひとけのない煉瓦城の大広間に殷々と響き渡る。さしものクリプトカリオンも思わず息をのみ、唇をつぐんだ。
宴のための食事の下拵えは中途半端に放りだされ、あるいは萎び、あるいは冷めて固まってしまっている。脇を向けば、ほぼ完成した花嫁衣裳が布を被せられて放置されていた。それは、まるで首のない女が真紅の衣裳をつけて立っているかのようであった。
その衣裳の裾のあたりに、どこから紛れこんだか赤ん坊の翼豹がにぃにぃ鳴いている。グアモンは唇を歪めてそれを手招きし、抱き上げた。喉を撫でてやってごろごろ言わせながら、静かに言った。
「わたしは見た。魔峰オーブが真っ赤に燃えるそのはらわたを残らず虚空に吹き上げるのを。

丘という丘、森という森が揺れて、大地に深い亀裂が入るのを。パンガシアノドン・ギガスの彼方なるべき大氷原が一斉に溶けだし、幾万もの氷山となって海岸線に打ち寄せ来るのを……わたしだけではない、会議に参加した五大家当主の全員と、ラルバタスの巫女、サラマクセンシスの神官の七人が、そのようなことがらをすべて、しかと体験したのだ。おかげで決裂しかかった会議も再びもとの通りに団結はしたようだが……」

翼豹を取り落とすグァモンに、クリプトカリオンが駆け寄った。

「叔父上！」

「噛みおった」

グァモンはクリプトの手をそっと払った。

「撫でてやったに……ルビスのような奴よの」

翼豹は素早く走り去って、もうどこかに消えてしまっている。

「しかし叔父上、それでは我等は」

「イデーンは滅亡する」

憂い顔を微動だにさせずに、グァモンは繰り返した。

「残念ながら、ルビスとそなたとの話も、もはやこれまでだ。カリクティス家の正統などという世迷いごとにうつつを抜かしている場合ではない」

「世迷いごとですって？　しかし神託は」

「それだがな」
ひとたびはクリプトカリオンの台詞を途切らせるために挙げた手を、すぐにだるそうに降ろし、脂肪の浮いた顔に当てていらいらと撫でながら、グァモンは言った。
「帰る道々、考えてみたのだ。神託が過つはずがない。過ったのは、わしらの判断ではなかったか、とな。いや、聞け、クリプト。わしらはかの神託の示したるものを、ルビスを娶らすべき男を、まことはっきりそなたであると信じた。そのように思いこんだのだ。しかしな、わしらの目には曇りがあった。それを外して考え直せば、他の解釈もまた成り立とうぞ」
「曇りですって？　何のことです」
「おうさ」
グァモンは肩をすくめた。
「我が一族の中にのみ夫を探したということだよ。な、クリプト、そなたには秘めておいたが、いまひとつの神託があったのだ。それをわたしは、全く別の意味に考えたのだが……ふん、我ながら、まことに浅はかの極みよ。よいか。それが、ルビスのことを示していると考えればなにもかも符丁が合うのだ。それはこうだ。『火と土の共に動く時、世界の礎は崩れ去る』」
「『火と土の……』」
五芒星の徽の瞳が、カッと開いた。

「では、あれはやはりコリドラス家の……！」
「止めることはできなかった。それが定めだったからだ」
「しかし俺は！　そんな……納得いきません！」
衝撃に全身を瘧のように震わせパチパチと火花を散らすクリプトカリオンに、グァモンは愛しむようなまなざしを投げかけた。
「無理もないがな。忍んで耐えよ。今は劣情に溺れておれる場合ではないのだ。そなたのその頼もしい力が、是非とも必要なのじゃ」
「俺の……」
グァモンを見上げたクリプトカリオンの顔の上で、五芒星の徽がぎらぎらと燃えあがった。
「力が？」
「うぬ。ここにな」
「ここ……とは？」
グァモンの示した床の一点を、クリプトカリオンは狂ったような目で必死で探ったが何もわからなかった。グァモンは首を振った。
「この城じゃ。ここは山に近すぎる」
「ああ」
「わかるな。異変が起こりはじめたならば、我等には逃げる間もないやもしれぬ。一刻も早

く行動するべきなのだ」

グアモンは重たそうに立ち上がり、歩き回った。

「幸い、宴のためにさまざまな蓄えがあろう。急ぎ、支度をしてみなで出かけなくてはならぬ。だがこころ弱いものたちは驚き騒いでまとまらぬであろう。城を捨てるを嫌がって強情を張るものもあろう。暴動にならぬよう、誰もが安全に移動できるよう、うまくことを運ぶには才覚がいる。手を貸してくれるな？」

「ご期待に添えるかどうか」

クリプトカリオンは顔を背けた。

「俺は……俺にはよくわかりませんね。なにしろあんまり急だし……ちくしょう！　だいたいそんな、出かけるったってね。いったい、どこへですか？」

「うぬ」

グアモンは眉間を揉んだ。

「それが問題なのだ」

「叔父上」

「我等に行く場所はあるだろうか……どこに行けばよいと思う、クリプト？」

まろぶように広間を出ると、廊下には女たちが音もなく控えていた。アミアカルバの青ざ

めた顔に、カラ・セミアクィルスのわくわくと瞳を燃やしているような顔に、しかし、クリプトカリオンは愛想笑いを向けることもできなかった。ほんの半日ほど前、この廊下を、当主の妻の手を取って歩いた時の自分の無知が、無邪気が、なんとも憎らしくばかばかしく思えてならなかった。それは、別人だった。ここにいる自分ではなかった。もうじき愛する女を妻としてこの腕に抱き慈しむことができると、呑気にも信じこんでいた、天下一の大馬鹿者であった。

（ルビス……ルビス……俺の花嫁！）

クリプトカリオンの心臓は熱い血潮に滾りたち、短く整えた頭髪は何度も額から擦り上げるので、針のように鋭くとがって逆立った。

（許さん……たとえミトラの定めでも……どんな凶事にぶつかったのだと言っても。この屈辱、この恨みを晴らさずにはおくものか！　誰もが待ち望んでくれた婚礼から我が唯一の花嫁を盗んだ奴等を、黙って放っておくわけになどいかん。

イデーンが滅びるだと？　ふん、滅びるがいい。一発派手にいっちまうがいい。俺もせいぜい加勢してやるぜ！

どうせいつかはくたばる身だ。我が命運尽きる僅か一刻前にでも、この手で憎き大地の男を捕まえて、四肢のひとつひとつをもいでやる。はらわたを掴みだして喰らってやる！

……そう、ルビス、おまえもだ。俺を裏切ることがどんなに恐ろしいことなのか、おまえに

も思い知らせてやる！）
（不義なる男女の屍をこの尻の下に敷いて、オーブが崩れ落ちるその時、旨い酒でもあればこれほど幸運なことはない。見届けてやろうさ、崩壊を！
だが、しばし、ミトラよ、俺が復讐を果たすまで。
せめてそれだけの時をくれ!!）
「ふふふ……よぉし……待っていろ、大地の！」
飾りやら留め金やらをぶちぶちと毟り取ると、洗練された高価な衣裳がたちまちぼろきれのようになった。クリプトカリオンの顔つきは、既にそのような服装のほうが似合うものに変わってしまっている。靴音も高く大股に歩いているのは、もう上品ぶったレグナス家の次男ではない。彼の神託を受ける前の、放蕩のあまり遠ざけられた嫌われものの顔を、彼は完全に取り戻した。いや、今はそのころかすかに匂った甘さすらもない。手負いの獣のような一触即発の禍々しい殺意を秘めて、稲妻の主は、夜明けの荒野にひとり出て行った……。

アミアカルバが入ってゆくと、広間は紫煙に眼が痛いほどであった。夫は椅子の上でがっくりと全身を弛緩させて瞑目している。眠っているのか、あるいは、死んでいるようにも見えた。不吉な胸騒ぎに小走りに駆け寄ろうとしたとたん、当主の妻は、夫の指がゆっくりと口許の煙草を摘み上げ傍らの陶器の上に正確に灰を捨ててまたもとに戻って行くのを見た。

（では、考えごとをしておられるのだわ）

このような時、夫は邪魔をされることを好まない。

その場で小さく会釈をして彼女がそのまま去ろうとすると、ふと、つぶやくような声がした。

「……すまなんだの、アミア」

「何かおっしゃいました？」

アミアカルバは立ち止まり、小さく聞き返した。夫はかすかにこちらを向き、首を傾けて彼女を差し招く。

長すぎる手足を無雑作に伸ばした夫の傍らの床に跪いて、アミアカルバはそのあどけない少女のような顔で、一心に見上げた。夫は彼女の柔らかな髪に骨張った指をからめ、片眼を細くして愛撫した。

「せっかくそなたがこころをこめて準備をしてくれたのに、すべて無駄になってしまった」

「そんな。もったいのうございます」

アミアは身を捩るようにしてうち伏した。

（ほんとうにルビスったら……こんなにまで気にかけられていながら、なんという恩知らずなんでしょう。

ああ、でも、わたしのこころは正直だわ。今はこんなにせいせいしている。晴ればれして

いる。あの憎らしい跡継ぎ娘が、こうしてどこぞに行ってしまうと知っていたならば、もう少しやさしくしてやるのだった。嫁ぐことをそんなに嫌がっているのだと、もし打ち明けていてくれたならば、味方になってやりもしたものを）

動転と密かな喜びのあまり、彼女は夫がこんな夜中に急に戻って来たことの不思議をまだ感じてはいなかった。会議で何が起こったか、イデーンに何が起ころうとしているのか、彼女にはまだ、知るよしもない。

尋常でなく打ち拉がれたらしいグァモンの姿は、彼女の胸を痛ましく圧した。

「ああ、どうか。あなたさまこそ、どうぞそのようにひどくお嘆きなさいますな。娘ごころは理を知りませぬ、げにこのような不可解なことができるのでございます」

「姉は、偉大だった」

と、夫は言った。

「ルビスもあの通り、気性は激しいが、力がある。人望もある。今に、きっと名高い当主になったことだろうにな……ひとの世はままならぬものよ」

「何をおっしゃいますか」

アミアカルバはきりりと顔をあげ、頬にかかっていた彼の冷たい手を取った。

「あなたさまとて、見事な長でいらっしゃいます。あなたさまの御世が続くことが、なによりの証拠ではありませんか」

「いや」
グァモンの唇から長く長く吐きだされる煙がそのため息の代わりであることを妻はよく知っていた。
「森のご老人のように達観するでもなく、ダトニオイデスのように血気に駆られて動くでもない。最も不幸なことは、わたしには、どちらの心持ちもいやにはっきりと見えてしまうということだ。どっちつかずでありながら、負けそうなものがあると、ついついそちらに肩入れをする。平衡を取ろうとしているのだと言えば聞こえはいいが、要するに日和見だ。自分などどこにもない。……わたしは駄目な男だよ。長の名になど、少しも相応しくない」
「旦那さま」
アミアカルバは夫の膝を抱きしめた。
「違います、違いますわ、あなたは素晴らしいかたよ。あなたは炎の一族の長。時は流れ、戻ることはないわ。でも、今は、今この時は、あなたが、あなただけが、唯一の絶対の当主なのよ。わたくしの誇りですわ！」
「…………」
グァモンは唇を歪めて妻を見下ろした。彼は今初めて、妻が自分の態度を誤解しているらしいことに気づいた。が、その苦慮は深く、妻のいかにも妻らしい考えの浅さに、幸福なほどの呑気さ単純さに、いつものように愛らしさを感じるゆとりがなかった。彼は、侮蔑と、

失望と、嫌悪を覚えた。鼻白む思いを抱かずにはいられなかった。

(愚かな。ただ単に我が儘な姪に背かれたとて、このわたしがかくも暗澹たる気持ちになるものか)

夫の瞳が、自分を、まるでただの一度も逢ったことのない他所の女であるかのように、冷酷に慇懃に見つめたので、アミアの胸は不安と困惑のためにどきどきと激しく打ちはじめた。が、彼女は、能う限り明るく言った。

「こう申してはなんですけれども、ルビスはやはり幼すぎました。長の座は、あの娘には重荷だったのよ。それだから、こんな、逃げるようなことをしてしまったのですわ。こうなったことは、あの娘にとっても幸福だったのです。炎の一族にとってもまた、より望ましいことだったに違いありません。ねぇ、遠慮なさることなど少しもないじゃありませんか。これからは、ほんとうの意味で、あなたさまの時代なんですもの！　そうして、ああ、遠い将来はうちのカラが長となるのでしょうか？　ねぇ、あなた、ねぇ、そうですよねぇ？　では、どうかあの娘に言ってきかせてくださいな、もう少し身を慎しむようにと、長になるに相応しい暮らしかたをするようにと」

「……将来、か」

グアモンは薄く笑うと、新しい煙草に火をつけ、深々と吸いこんだ。

「そんなものは後に生まれる連中が考えればいいことだ。わたしは、今を生き長らえること

ができればそれでいい。せめて、真の長なるひとびとの足手まといにならぬよう腐心せねば」

(なんて気の弱い)

アミアカルバは内心腹を立てたが、微笑みは崩さなかった。

「愛してるわ、あなた」

彼女は立って、椅子の後ろから夫の痩せた肩を、胸板を、抱きしめ、撫で擦った。

「ああ。こんな偉大なかたの妻であるなんて、わたくしはなんと幸福者なんでしょう!」

5

まる一昼夜降りつづいた雪は、ようやく顔を見せた山国の太陽の惜しみなく注ぐ明るい日差しにも、いっこうに溶ける気配がなかった。屋根の風車は積雪に折られぬよう既に取りこまれ、洗濯ものはみなどこやらに引っこめられ、三の谷の村はいつになく整然と美しく整って、静かだった。格別に元気なこどもたちと夜動く動物の走り回った足跡ばかりが目立つ水汲み広場から狭い石段を僅かばかり昇ったところに、若き指導者ヤベ・ヤベの頑丈そうな家があった。無骨な煙突からは、豪勢に煙があがっている。

蒸気に曇った窓を皺だらけの手が内側から擦ったかと思うと、そこに、ヒョイとばかりに老人の瞳が覗いた。が、山々には霞がかかっている。オーブが見えぬことを知ると、瞳は失

望とも安堵ともつかぬ色に伏せられて、そっと脇に退いた。暖炉の中で、しゅんしゅんと沸きつづける根菜のスープが、今穿たればかりの覗き窓を早くもまた曇らせてゆく。

老人はそっと、その暖炉脇の最も暖かい席に向かった。

「ランデールには、やはり不穏な噂が広がっていた」

と、ディアルトが言ったところだった。

「もうすぐこの世には終わりが来ると。確かに、何かがおかしくなってはいるようだ。高き血とやらを笠に着ている例の五大家の屋台骨が揺らぎだしているらしい」

古い揺り椅子には、この家で飼い慣らされている尾が鉤の手になった年寄りの翼豹がふてぶてしく寝そべっており、針のような瞳でうさん臭そうに老人を見上げた。

「しっしっ」

老人は手で追おうとしたが、翼豹はナイフめいた牙をまるだしにして、わざとらしく欠伸をして見せる。

「金の精霊たちの跡継ぎは怪物だし、森の長の家系は問題が起こっている。それにルビスは……」

「しっ！」

ディアルトがちょうどことばを切ったところに、老人の声が響いてしまった。みなが振り返る。老人は、すまんすまんと手を振って、椅子の隅にどうにか腰を降ろした。翼豹は迷惑

そうに顔を顰めたが、微動だにしない。

「ルビス・アピストは」

ディアルトは照れ臭そうに言い直した。

「今度、俺が連れて来ちまった娘のことだけど。彼女は次の誕生日には炎の種族カリクティス家の家長になるはずだった。……どうも、俺は親父似らしい」

居並んだ男たちは愛想よくみな低く笑ったが、彼の話の内容については、あまり釈然としていないようだ。カリクティスの名も、このものたちには、何の意味ももたないのだ、とディアルトは思った。

「要するに、伝統ってやつが綻びかかっているってことなんだけど、山向こうの連中にしてみれば、それはオーブが崩れるのと同じくらい大変なことなんだよ。連中も、不安な気分で過ごしているってことはわかって欲しい」

「で、その、なんとか家の奴等がいらついてるから、大地が揺れてるってのかね？」

アガマが赤ら顔を顰めた。

「迷惑なこったな」

「そうじゃないよ。精霊たちにはそこまでの力はない」

と、ディアルトは言った。

「異変そのものは彼等のせいじゃない。もっと大きな……たとえば、天の神々の意志なんじ

やないかと、あっちでも言ってるくらいだ。だとしたら、俺たちは対立してる場合じゃない。水の種族、炎の種族、森の種族、金の種族、それに大地の種族と、山のこっち側に住む俺たちが、みんなで力を合わせれば、この災難も乗り切ることができるかもしれない。天は、俺たちにそれを望んでいるんじゃないかと思う。……五大家の協力を仰ごう！」

ディアルトがことばを切るよりも早く、低いどよめきが広がった。が、誰ひとり確たる発言をするものはない。いつもながらその居間を会場に提供していたヤベ・ヤベは、眉を顰めながら老人の様子をうかがったが、老人は翼豹と睨み合っているばかりである。ヤベ・ヤベは喉の奥で唸りながら、改めてディアルトのほうに身を乗りだした。

「協力、か」

と、彼は言った。

「オーブが爆発しちまった日にゃあ、そりゃあ向こうの連中だって高鼾で眠っちゃあいられめえな。だが、それで俺たち全員がくたばるとしたら、これで世界がやっとほんとうにキレイになったってんで、大喜びで酒盛りでもはじめるだろうさ」

「いや、けしてそんなことは」

ディアルトが言いかけた時。

「俺は嫌だ」

マタ・マタがのそりと言った。

「妖術使いどもに頭を下げるなんざ、金輪際御免だぜ。他所者には俺たちが汗水流して作った道を踏んで欲しくねぇし、うちの大事な娘を見られたくもねぇ。他所者に何か頼みごとなんぞをして、それからってもの、ずっと恩着せがましくでかい面をされるくれぇなら、俺ぁさっさと山ごとぶっ飛んじまったほうがマシだと思うね」

他所者ということばを発する時、彼はことさら意味ありげにディアルトを見た。だが、ディアルトは澄み切った瞳で、ただまっすぐ彼を見つめ返すだけだった。

「俺は嫌だ」

むっつりと顔をしかめながら、もう一度きっぱりと繰り返すと、マタ・マタは黙りこんだ。

「他には」

ヤベ・ヤベが部屋じゅうを見回しても、男たちの多くは気まずそうに顔を伏せるばかりである。ディアルトはもう一度発言しようとしたが、ヤベ・ヤベが、まだ待て、というような合図をしたので、堪え、ゆったりと座り直した。

「あのさあ、ほんとか？」

沈黙に耐えかねたように、ンドゥロが素っ頓狂に言った。

「つまり、あんたの言うようにすれば、向こうの連中が、大勢してやって来るのかよう？　そりゃ……うへへ、あんたには悪いけど、確かに、あんましいい気持ちじゃねぇな。考えただけで、ケツがもぞもぞしてくらぁ」

「連中はすげぇらしいからな。何しろ、好きな時に雨は降らせるわ、種火もないとこで焚き火は作るわ、こーんなでっかい岩だって……」

チズルムは得意そうに言いかけたが、部屋の向こう側に座っているパーチの爆発しそうな視線にぶつかると、あわてて黙りこんだ。

「おい。ひとつ、言っておくがな」

石切り場から助けだされてまだ日の浅いパーチは、頭や腕に布を当てがった痛々しい姿だったが、ぎくしゃくと立ち上がった。

「みんな、気がついたかどうか知らんが、ディアルトははっきりと『俺たち』と言ったんだぞ。『山のこっち側に住む俺たち』と言った。言ったな？　その意味が、おまえたちにわかるか⁉」

みなは黙っていた。パーチは重々しくうなずいた。

「生まれだの育ちだのはともかく、ディアルトは俺たちの仲間だ。もしも、そうじゃないと思ってる奴がいるとしたら……ディアルトを他所者呼ばわりする奴がいるとしたら、この場で今すぐ、名乗りやがれ。俺は……俺は、今はこんなだから殴ることはできねぇが……そいつの先祖の墓に行って、唾をはきかけてやるから！」

「パーチ」

（そんなことを言われると、なおさら困るよ！）

ディアルトはため息まじりに声をかけたが、パーチは興奮に鼻の穴をふくらませて、鋭くみなを見回した。みなが、眼を合わせぬように、あわてて顔を伏せた。

「……なんだ？　誰もいねぇのか？　いねぇな？　……よおし。なら、いいんだ」

「ふしゃしゃしゃしゃしゃ！」

唐突に、賢者と呼ばれる老人の笑い声が、気まずい空気の中に響き渡った。

「おい聞いてくれ、みな。いや、傑作なんじゃ。こやつめがな、どう押しても脅しても動かなんだが、一発わしの香り高きなにを嗅がせてやったらな、ほうれ、たちまち逃げだしおったのじゃよ、ふひょふひょふひょ！」

みれば、確かにいつの間にやら、老人は揺り椅子を奪還している。翼豹は不機嫌そうな顔つきで、とたとたと屋根の梁を昇ってゆくところであった。

(……ひょっとすると、これは何かの譬えなのだろうか)

ディアルトはこめかみを押さえながら考えた。

(お爺は、力任せにぶつかってもけして思い通りにならないだろう山向こうの連中に、俺がどう出ればいいか、遠回しに示唆してくれているのだろうか？)

ともあれ、この一幕のおかげで、場の空気は変わった。男たちの口はようやく呪縛が解けたかのようになめらかになり、みな次々に発言をしだした。

「もともとは我等の先祖だって、向こうに住んでいたんだ。助け合うってことだって、でき

なくはないかもしれない」
「全然行来がないってのも、考えてみれば変な話だ。真冬はともかく、ラーミアで行けば、どーってことはないんだから」
「しかしミトラの採決が」
「そりゃ、大昔の話だろう？」
「いや。どーせ山向こうは、俺たちをいまだに罪人扱いしてるんだ。蟲けらみたいなもんだと思ってるのさ」
「そうだ。そんな奴らに何もしてもらいたくなんかないよ」
「他所者にここも乗っ取られちまったら、儂等、いったいどこ行きゃいいんだぇ？」
「待ってくれ。乗っ取るだなんて」
ディアルトは穏やかに笑った。
「さっきも言いかけたけど、そんなことにはならないよ。だいじょうぶ」
「なぜだ、ディアルト」
白髪混じりの頭をかきながら、普段は寡黙なパイクが渋い声を出した。
「なぜ、そう言える？　そう信じる？　俺はおまえの親父を知っている。ラーミアとの付き合い方を教えてやろうと言っても、おまえの親父はいつも、ちょうど今のおまえみたいな顔をして笑って、いらんと言った。あの山々を越えて行くことができても何もならんと、どう

せ一度とあっちに戻る気はないと、あっちは地獄だから、となおまえの親父は、確かに俺にそう言った。それに……」
ディアルトが眉を曇らせているのに気づくと、パイクは困ったように言い澱んだが、結局は重たく続けた。
「おまえ自身のこともある。実の爺さんだの従兄だのに、おまえが何をされたか。俺たちはそう良く知ってるわけじゃねぇがさ。少なくとも、この谷には、長いこと旅をして戻って来た家族を放りだすような碌でなしはひとりだっていやしないぜ? なあ、みんな」
男たちは次々にうなずいた。
「そうだ。俺たちはそんなひどいことはしない」
「実際、家族じゃなくったって。友達だって大切にするし」
「遠くから来たあんたのお父っつぁんだって、ちゃんと仲間にいれた」
「……みんな。……それに、パイク」
手を振って、ディアルトは遮った。
「確かに、コリドラス家の連中は鼻持ちならない碌でなし揃いだ。だが、ばかじゃない。奴らにもたっぷり土地はあるんだぜ? たとえ行来をはじめたとしたって、こんな暮らしにくいところにわざわざ来て住もうなんて思う奴は、そうはいないよ。来たら、おいてやればいいじゃないか。俺のことだって、おいてくれたように。やってける奴ならやってくし、やっ

てけない奴は帰るだろう。そうしてみんなだって、もしも望むなら、あっち側に住んでみたっていいんだぜ？　たとえば、うんとひどい季節にだけ、行って来るってことだってできるじゃないか。乗っ取るとかなんとか、大袈裟に考えることはないんだ」
「ほんとか？」
「……行ってみたいような気もするけどさ」
「冬は大変だからなぁ」
男たちは顔を見合わせた。
ここぞとばかりに、ディアルトは言った。
「ともかく、俺たちはこの谷を守らなきゃならない。だから。これは、まだ、今思いついたばかりなんだけど」
静まり返った部屋の中を見回して、ディアルトは掠れる声を意識して高めた。
「奴らに、ラーミアを貸してみないか？」
「……あ……痛！」
生まれてこのかた針など持ったことのないルビスには、繕いものは難しかった。ましてこの谷のひとびとの着るような防寒性の高い革の服は、縫いにくいことこの上もない。力任せに突いてしまった指には、みるみる血が滲んでくる。ふくれっ面で咥えていると、傍らのガ

ーが苦笑しながら、ぼろを裂いて差しだしてくれた。

「そいつで押さえておきな。血が止まったら、薬を塗ればいい」

「ありがとう」

みすぼらしい布片は洗ってはあるようだったが染みだらけで不潔そうに見えて、ほんとうはあまり嬉しくはなかったが、ルビスは素直にそれで指を包んだ。

機小屋には、幼いこどもたちから老人までが集まって、せっせとホリゾンタリスを作っている。窓の外は雪だ。恋人は谷に辿りつくなり彼女をここに押しこめ、傍らの逞しいからだつきの女によろしく頼むと言い置いて、男たちとどこかに行ってしまったのだ。ガーはどこからか寒さ避けの服を見つくろって持って来てくれたが、それはあまりにもぶかぶかで、ルビスの華奢な肩からすぐにも滑り落ちてしまうありさまだった。黙って針箱を渡されても、ルビスには最初意味がわからなかった。自分の着るものを自分で整えることになろうとは、昨夜まではまったく思いも寄らないことだった。

ひとびとはみな見慣れぬ様子をしている。平均して目鼻が小さく肌がガサガサで、服装も髪も瞳も無彩色に近く、あまりにも簡素で無雑作で魅力に乏しかった。真紅の髪と真紅の衣服が、紅蓮に燃える大きな瞳が、ここでは闇夜の焚き火のように人目を引くことをルビスは思い知った。おとなたちはそっと、こどもたちは露骨に口をぽかんと開けて、彼女を見つめたが、誰ひとり声をかけてはくれなかった。口がきけないと思っているのか、少なくとも、


MUTSUMI

ことばが通じないと思っているのかもしれなかった。
指の痛みが止まった。布を広げてみると、どうやら血も止まったらしい。
ルビスがほっと微笑んでいる上に影がさした。見上げれば、ガーが傷の具合を覗きこんでいるのだ。ルビスは黙って指を見せた。ガーはうなずき、その手を取って、薬を塗りこんだ。
「……きれいだね。あんたの手は」
と、ガーは言った。
「そうかしら」
「だってほら。ほんのり薔薇色で、柔らかくって。きれいだねぇ。ほら、あたいのなんかとは大違いだろうが。まぁ、無理もないさね。なんたって、あんた、お姫さんなんだろ?」
どう答えて良いものなのかわからなくて、ルビスが黙っていると。
「……おかちゃま」
いつの間にか、指を咥えたチャカ・チャカがガーの背中の側に立っている。母の上着を摘んで引っぱりながら、じっとルビスを見つめた。
「なんだい、おしっこかい?」
チャカ・チャカはルビスを見たままうなずいた。
「今かあちゃんは忙しいから、ピパ・ピパにいちゃんにでもついてってもらいな」
「やな!」

チャカ・チャカはふくれた。
「にいちゃ、こわはなし、すゆ。ごふじょにいる、おばけはなしすゆ！」
「ばかだね。そんなもんいやしないよ！　さっさと行っといで！　洩らしたら承知しないよ！」
押しやられてチャカ・チャカはべそをかいたが、母は黙って睨みつけた。チャカ・チャカは後退りしながら遠ざかると、急に後ろを向いて駆けだした。大きすぎる靴をカポカポと鳴らしながら、ピパ・ピパを呼びに行った。
ガーは大きく鼻を鳴らすと、ルビスに向き直った。
「末っ子なんだ。甘ったれでね」
「可愛いお嬢ちゃまね」
ルビスはぎこちなく笑った。
「でも」
ルビスの指に新しいぼろを巻きつけながら、不意にガーは妖しく瞳を光らせた。
「あの娘、あんたの敵だよ」
「敵？」
「あの娘は、ディアルトの嫁さんになるんだって言ってたからねぇ」
困惑するルビスを見ると、ガーは急にいやに勢いよく笑いだした。

「ごめんごめん。んーな、気にすることはないよ」

「……ええ……」

「貸しな。こいつはあんたには無理らしい」

ルビスの膝から革衣裳を奪い取ると、ガーはくしゃみでも堪えているかのように顔をしかめ、猛然と縫いだした。

「まったくしょうがない男だよ！　お姫さんなんか連れてくるんだからねぇ！」

ルビスは何も言わなかったが、ガーの真意はわかったような気がした。明るさを装った台詞の中に雑に隠された小さな棘を、恋する娘の本能は嗅ぎつけずにはいられなかったのである。

（このひとはディアルトを愛していた……愛している……？）

（ディアルトは好かれていたのだ。この谷で。この貧しい村で。彼は、ちゃんと愛されていたのだ）

（わたしの知らなかったディアルトをここのひとたちは知っている。長いこと彼は、ここで暮らした。彼のほとんどは、ここにあった。でも彼は、わたしを愛していると言ってくれたわ。ここの誰でもなく、このわたしを選んだのよ……！）

嫉妬と誇りのせめぎあいに、ルビスは指を握りしめた。かつての彼を知っているはずの女が結んでくれた傷当てのぼろぎれを、きつく、きつく、握りしめた……。

晩の食事は賢者と呼ばれる老人の家に招かれた。ほとんど半日ぶりにディアルトの顔を見て、ルビスは言い表すこともできないほどの安堵を覚えた。

山越えの疲れも癒えぬまま、見知らぬひとびとの中にひとり残され、慣れぬ仕事を当てがわれもして、すっかり参っていたのだ。老人は飄々と親しげで、ふたりの情熱をからかい、ディアルトの父母やこども時代の物語をとめどもなく聞かせてくれた。恋人の整えてくれた食事は豊かではなく多少風変わりな味付けだったが、和やかな食卓の語らいに促されて、ルビスはよく食べた。木の実の酒は甘く飲みやすく、そのくせ思いの外に強かった。知らず知らずのうちに度を過ごしたか、気がつくとルビスの目許はぼうっと熱くなっていた。

腹がくちくなり、からだじゅうが温まり、小さな小屋の中に食後の茶のよい香りが漂うころには、彼女のまぶたはどうにも我慢できぬほど重たくなって来た。老人など、食べ終わるやいなや豪気にもその場にごろりと横たわって、たちまち鼾をかきはじめているのだ。

「……これはお爺以外、誰もはっきりとは知らないことなんだけど」

暖炉の薪を動かしながらディアルトが言いだした時、彼女は半分垂れ下がって来たまぶたをあわてて擦らなくてはならなかった。

「俺はこれまでも、たびたび山を越えていた」

「え、なんですって?」

置き換えられた薪のどこかに火がついて、ぼっ、と音を立ててひときわ明るく燃え上がる。火灯りの星を宿しながらも、じっと炎を見つめているディアルトの瞳には消えぬ憂いの色があった。油断するとまどろんでしまいそうなルビスは、掌に爪を突き立てて耳をすました。

「俺の容姿は知られていない。ランデールのひとたちは、うんと田舎のほうから来たって言えば、たいして疑いもなく歓迎してくれる。薬草や茸や、時にはラーミアの尾羽根を持って、俺はでかけた。布とか種とか玻璃細工とか、あそこでなら簡単に手に入るものが、ここには全く乏しいからね。そういったいろんなものを集めて帰って来て……暮らしてたわけだ。はっきりは言っていない。山を越えることは、今でも不吉だと思われているから。こっちのみんなも、薄々は感づいていると思う。でも俺はどうせもともと不吉な男だし。あえてことを荒だてて、欲しいものが手に入らなくなるよりは、黙って知らん顔しておいたほうがいいんだ」

「そうだったの」

すこぶる意外に感じてしかるべき告白であるような気はしたが、さほど驚きは感じなかった。ルビスは、急ぎ何か気の利いたことを言おうとしたが、頭は朦朧として、うまくことばが組み立てられぬ。が、他に知るものの少ない秘密を、あえて打ち明けられることがなんとも嬉しく、誇らしかった。このままでは彼がまた黙りこくってしまいそうだと、彼女は必死で考えを巡らせてみた。そのまま眠りこんでしまいそうになった刹那、どうにかとっかかり

を見つけだし、あわてて先を促した。

「じゃあ、あの祭りの時も？」

「ん？　ああ。そうだよ。祭りの時はいろんな物が動くし、知らない顔を見てもみんな驚かないからね。それで……」

ディアルトは振り向き、ルビスの重たげな瞳を見つけると柔らかに微笑した。

「辛そうだね。もう、寝むかい？」

「ううん、まだ平気。もっと聞かせて」

ルビスは立って行って、ディアルトの隣に座った。炎の照り返しが暖かかった。

（なんだか家にいるみたい）

ルビスは恋人にもたれた。ディアルトは肩に腕を回して、ぎゅっと抱きしめてくれる。

（でも、わたしの家は、ここ。このひとのいるところなんだわ！　このひとがいて、暖かい火さえあったら、なんだって耐えられる。なんだって。

……やれやれ。このどうしようもない眠さ以外ならば、ね）

「あの夜偶然、俺は、耳にしてしまったんだ」

もたれかかるルビスの頭の重みに、心地よさそうに微笑みながら、ディアルトは言った。

「従兄のダトニオイデスが、なにやら企んでいるらしいことを。コリドラスの家で昔見た覚えのある男たちが、滅多なことじゃ割れない岩を運びこもうとしてた。大地の種族が一番強

いのだと、みなに見せつけてやろうって魂胆らしかった。けど、俺の立場じゃあ、名乗りをあげて割ってみせるわけにはいかない。しかたないから、咄嗟にあんなふうにしてみたけど……途中からとんでもないことになっちゃったけど。ほんとはね、俺は待ってたんだ。木・火・土・金・水の精霊たちが、それぞればらばらにではなく、みんなで力を合わせてみようと言いだすのを。ひとりの長や賢者や英雄じゃなく、なんてことないひとたちが、いろんな力のあるひとたちが、小さな力を合わせれば、それが一番強いんだって、みんなが気づいてくれたらいいなあと思ってさ」

「みんなが、力を……？」

「うん」

炎のせいばかりではなく、ディアルトの頬は赤かった。

「甘いかもしれないけど……こどもっぽい感傷かもしれないけど……。俺はこころからそう思うんだよ、ルビス。誰が偉いとか、尊いとか、強いとか。みんなよく口にするけど、そんなこと、誰にも決められることじゃない。みんながかけがえないし、必要なんだ。時と場を得ることさえできれば、誰だって、素晴らしい働きをしてくれるはずだ。ここの連中だって、山向こうのひとたちだって、みな同じだ。普通のひとびとの全体がイデーンなんであって、五大家だけが大切なんじゃない。きみは最も古き血を引くカノクティス家の正統、次の長になるはずのひとだった。みんながきみを、そういうふうに扱っただろう。でも、俺はそうは

できない。こんな言い方をすると、きみは怒るかもしれないけど、俺にとって、きみはただの……」

ルビスの反応を窺おうとして肩に目を落としたディアルトは、彼女がいつの間にかすやすやと眠りこんでしまっていることにようやく気がついた。長いまつげの先が、夢でも見ているかのように小刻みに震える。真紅に濡れた唇を軽くとがらせた少し拗ねたような顔つきのまま眠るルビスは、ひどく幼くあどけなく見えた。ディアルトは、かすかに眼を細めて、その耳許に囁いた。

「……ただの、愛しい女の子だよ」

あたりは静かだった。老人の鼾と、暖炉の中で薪の爆ぜる音ばかりが、鋭く響いた。寄りそうふたりの影は、長く床に伸び、炎の加減に従ってちらちらと揺れた。

盛大な鼾をかきながら、老人はふと、気遣わしげに片眼を開けた。恋人の肩を抱いたままじっと動かないディアルトの背をしばらくの間見つめると、彼はかすかににやりとし、いっそう調子良く鼾をかきながら、またそっと皺だらけの眼を閉じる……。

6

（……ラーミアだ。ラーミアさえいれば乗り切れる……！）

執務室は薄暗く、ダトニオイデスの心はなお闇であった。一寸先すらもさだかには見えぬ苦悶の帳の中で、彼はもう何時間もひとつのことを考えつづけていた。眉間を揉み、額を掻き上げ、こめかみに指を当て、重厚の椅子の肘掛けをいらだたしく叩きながら。

（山が動こうと、水が押し寄せようと、ラーミアがいればだいじょうぶだ。空の高いところを飛んでいればいいのだから。異変がおさまって落ち着いてから、ゆっくり戻ってくれば良い。しかし、あの鳥はどれほど飛びつづけていることができるのだろう？　いったい、何人乗せることができるのだろう？　だいたい、全部で何羽いる？　何羽使えるのだろうか？　だが、ああ、腹のふくれたノーザンバラムンディは、そんな高い空などを飛んでもだいじょうぶなのだろうか？）

卑しい生まれの従弟ディアルトと、さっさと和解し親交しておかなかったことを、ダトニオイデスは今日ほど断腸の思いで悔やんだことはなかった。

かたちばかりなりとも、ディアルトと血族らしい契りさえ結んでおれば、ラーミアを使うことができたはずだ。一族の存続のためには、現在山のこちら側で考えられる限り最高の手段を得、他の誰も期待できぬ絶大なる協力を仰ぐことができたはずだった。

かの怪鳥の重要性を幼いころより骨身に知りながら、自分は何故もっと早く手を打たなかったかと、彼は我が身を掻き毟った。

（爺め……アカントホプスの糞ったれめ。あいつが悪いのだ！　あれに先見の明がなかった

が我が一族の悪運のはじめよ。爺が、もう少し親族を大切にしておれば、あんなに愚鈍でさえなければ、コリドラス家はこのような時にもなお安泰であったのに！）

こうなってみれば、悪名高き叔父の行状も、この時のために用意された救いの一手であったような気がしてならなかった。が、彼等は、その後の対応を間違ってしまったのだ。

（従弟を懐柔することが叶わなかったとしても、せめて、川辺の民らとなんらかの関係を結んでおくべきであった。武力をもって従えるか、経済的交流を重ねるか、ともあれ自分は何としても、かの『追放されし者』たちを得ておくべきであったのだ。最も優秀なラーミア使いどもならば、我がコリドラス家の特別の身内として丁重に受け入れておくことだって考えられたはずだ。なまじ会議にかけて、他の種族の連中の賛同を得ようとなどと、我にもあらぬ気弱い考えを起こしたのがなんとも辱なく腑甲斐ない。ぐずぐず模索する間があれば、思い切って、密かに闇に紛れて、とっとと実行してしまっていればよかったのだ）

（俺は甘かった！）

（改革を望みながら、五大家などくだらぬと思いながら、反逆者と呼ばれることも厭わぬとあくまで我を張っているつもりでありながら、この俺も実は、ミトラより来る古き掟の呪縛から少しも免れてはいなかったのだ……！）

ぎりぎりと噛んだ唇には、血の味がした。拭っても拭っても、全身に滲んでくる脂肪汗は、べっとりと冷たく彼を窒息させた。

木・火・金・水の長たちが全員あのような事態の訪れを見せつけられた今となっては、ひとり先走りをしようと試みるはあまりにも虚しかった。大地の一族の利益のみを言い立てるわけにはいかない。コリドラス家の存続をのみ優先するわけにはいかない。苟も五大家と呼ばれる家系のひとつの名を継ぐものとしてみれば、今イデーンに住まう精霊全員を助ける道をこそ、探さなくてはならない。

（ああ、もどかしい。狂おしい）

（ディアルトよ！　おまえというものを知りながら！　こんなに近い血で繋がりながら！　なぜ俺は、おまえを、遥かヴェエリダヌスの彼方になど、退けてしまったのだ……!!）

苦汁の涙を、ダトニオイデスが喉を鳴らして堪えた、その刹那であった。何の予兆もなく訪れた圧倒的な閃光に、部屋じゅうが真っ白く輝いたのは！

音と振動は僅か後から届いた。何かひどく大きな物に空から踏みつけられでもしたかのような衝撃に館じゅうがきしみ、びりびりと震えた。

（ま、まさか……もうはじまったか？）

ダトニオイデスはあわてて立ち上がるあまり眩暈を起こしながら、なんとか窓辺にまろび寄った。館の片翼のどこかが燃えだしたか、ぶすぶすと黒い煙をあげている。炎に追われて窓から飛び降りるものの肺をふり絞るような叫び声に、次の一撃の轟音が重なった。ダトニオイデスは眼を疑った。長い首をくねらせながら怪しい炎を吐き、悪鬼めいた黒い翼をはた

めかせて飛び回っているのは、ナスタチウムの丘近辺に住まうはずの火炎竜ではないか！ 彼等は炎の一族にある。テネルスの草原を越えてこちら側にまで来ることは、許されていないはずではないか。

「……な、なにごと……⁉」

またしても来る衝撃に、館が傾いで、壁の絵が落ち飾り物の陶器が割れた。波打つ床を這い伝いながら、ダトニオイデスは身重の妻のことを考えた。

（誰か、ノーザンについてやっているだろうか？ あれの寝台は潰れてはおらぬだろうか？ ああ……俺の子は……俺の子は？）

「た、た、大変でございます！」

執務室の扉が無作法にもバタンと開かれ、プレコトムスが短軀なからだを転がすようにして走りこんで来た。

「炎の一族の連中が大挙して参りました！ わが館を……こ、こ、攻撃しておりまするっ！」

「わかっておる」

蒼白な顔の中で、ダトニオイデスの瞳ばかりが、ぎょろりと光った。彼はどうにか立ち上がった。

「だが、なぜだ？ なぜ、このようなことが」

「ダトニオイデース！ ダトニオちゃーん‼」

嫌味ったらしい甘い呼び声に、かすかに覚えがあった。
「泥臭え、真っ黒くろの、コリドラスのぼんくらぁ！　耳があるなら聞こえるだろうが。とっとと顔を見せやがれい！」
急ぎ窓に駆け寄って、ダトニオイデスは見た。火喰い鳥を何羽も連ねた空の艀に仁王立ちになっているのは、その片眼に五芒星の徽を持つ男。
「ク……クリプトカリオン・レグナス！」
「おんやおや、そこにいたのかい笑窪ちゃん」
稲妻の主が言うと、周囲を飛び回る火竜らが可笑しそうにその羽根をばたばたさせた。いつの間に入りこんだか、館のほうぼうに散ったラプラディー、エンドリケリィらの炎の一族の若者たちも、どっと笑い、ひょうひょうと口笛を吹いた。
「なかなか出てきてくれねぇから、俺ぁ、むちむちおっぱいの嫁さんと昼ひなかっからしっぽりやってやがんのかとでも思ったぜ」
「ずいぶん派手派手しいご登場だが、いったい何の用なのかな」
ダトニオイデスは平然を装って、軽やかに言い返した。
「ひょっとすると、これはきみたちのところの糞婚礼のくだらない余興の演習なのかね？　花火の具合が少し剣呑すぎるようだが、それが炎の流儀なのか」
「しらばっくれるんじゃやねぇ！」



クリプトカリオンの投げつけた小さな稲妻が、ダトニオイデスの立っている窓枠を一瞬のうちに吹き飛ばしたが、ダトニオイデスは微動だにしなかった。

「何のことかな？」

「ふん。好きなだけ恍けるがいいさ。むろん、用件は知れたこと。おまえの身内、あの腐ったみなしごを、いったいどこに隠しやがった？　さっさと出せばよし、出さねば、このでっかい豚小屋をそのまま石鍋にしてやるぜ。こんがり焼けたおまえの女房ときたら、きっととびきり美味そうだろうなぁ」

「うひゃひゃ、そいつぁ言える！」

興奮してちょこまかと動き回る火蜥蜴の背で跳ねながら、エンドリケノイが素っ頓狂な声をあげた。

「大将ぉ、おいらにも、脚一本くらいくださいよぉ」

「二の腕なんかもいいな」

こなたの壁に取りつき、二叉の舌をちろちろとのぞかせながら、火蛙の妖精ストリガータがぜいぜいと耳障りな笑い声をたてた。

「おりゃあ、プレコトムスの黒焼きってのが欲しいな。なんとなく、精力つきそうだと思わねえ？」

「あんまり焼けすぎて食えなくならないように、うまいこと炙ってくださいよね、大将」

他のものの口々に言うに、クリプトカリオンは腕組みをしたまま、にやにやと笑いながらうなずいた。

「おうさ、任しておけ」

「はははは……それ、燃えろ燃えろぉ!」

「いい匂いがしてきやがったぜぇ」

「……おのれ……蛮人どもめが!!」

プレコトムスは低く唸り、腰の剣に手をかけたが、ダトニオイデスがそれを制した。

(身内……? 隠しただと?)

その間にダトニオイデスは素早く頭を巡らしていたのである。コリドラス家の人間で行方の知れぬもの、それはディアルトに他ならない。では、カリクティス家はこの期に及んで、彼の忌まわしい従弟を炎・族の内に掌握せんと欲したのか。なぜ?

(ラーミアだ)

(もちろん、ラーミアのためだ)

「……ふふ……そうか……なるほど」

理解したと思うと、ダトニオイデスの瞳に狂気のような輝きが宿った。

(あんたもそれを考えたわけか、グアモン・セミアクィルス……しかし、だからってここまで思い切ったことをやってくれるとは)

「ふふ……いやいや、お見それした。……意外だったよ。わはははは」
「殿」
愉快そうに笑うダトニオイデスに、憤慨に頬を赤くしたプレコトムスは疑わしげな瞳を向けた。
「いや、すまぬ、プレコ。妙な話だが、俺はなんだか嬉しくなっちまった」
にやけながらも謝ると、ダトニオイデスは今一度クリプトカリオンに向き直り、大音声で呼ばわった。
「しかし、稲妻の主よ、見当はずれだぞ。おぬしの探しておる男はここにはおらん。まあ、もしも万一いたとしても、おめおめそなたらの手に引き渡すわけにはいかないな。大事な大事な従弟だからな」
「言ったな、地蟲」
クリプトカリオンは全身を燃やして微笑んだ。
「世にも忌まわしき従弟なりとも、やはり大事か。穢溷なる貴様らにも肉親の情があったとはまこと笑止千万。いかな泥臭い血であろうとも水よりは濃いというわけか」
「そうだな」
ダトニオイデスはくっきりと笑窪の浮かんだ顔で、頭を掻いた。
「実際、不出来な叔父もあったがね。すぐにカッと景気よく燃えあがるがたちまち灰となり

果てて、僅かの風にも吹けば飛ぶ、単純ばかな奴ばかり輩出する、カリクなんとか言うどこかの家の血よりは、まあ、いささかマシかもしれないと自負してはいるな」

「出て来いっ!!」

クリプトカリオンは叫んだ。

「ぬしがそうまで言うならば、あの卑怯者のほうとて、口にするも汚らわしきコリドラス家に甘ったるい義理を感じておろう。なれば、ぬしのその薄気味悪いにやけ面、俺がみごと炭に変えてやったならば、我が敵は頑是無く泣きべそをかきながら山向こうの隠れ家より飛んで戻って来やるやもしれぬ。……来い、来て、俺の稲妻に焼かれるが良い！」

「いかがなさいますかっ!?」

プレコトムスが背後から血を吐くように叫んだ。

「当たり前なことを聞くな」

ダトニオイデスは叱咤するようにつぶやくと、声を張り上げた。

「待っておれ、クリプトカリオン！　今、参る」

「承知。なんぼでも待ってやる。せいぜい万端の準備をするがいい！」

高笑いすると、クリプトカリオンはあがった火の手にぎゃあぎゃあと興奮する火喰い鳥らを巧みに繰り、館の日の出側の屋上に飛び降りて、その場にどっかと座りこんだ。その間に、その手下のものたちは素早くそこここに散ってゆく。

「……ふん、退路を断つつもりか。おまえらに地中を行くこともできる俺たちの邪魔ができる道理があるまいに。……さてと。俺はひとりでだいじょうぶだが」

ダトニオイデスはプレコトムスに言った。

「おまえらも、その気があるなら、行って有象無象の相手をしてやれ。一匹でも多くぶち殺し、やつらに相応しい長虫や牙土竜の餌にしてやるがいい。また、土中より、密かにカリクティス家に刺客を放つのだ。かのぼろ煉瓦を崩壊せしめ、出合うものすべて手当たり次第になぶり殺しにして良いが、ただし、グァモン・セミアクィルスは必ず捕まえて来るのだ。俺が決着をつける！」

「はっ！」

プレコトムスは、きっちり腰を折ってから、駆けだそうとした。

「待て」

「は」

「ノーザン……や、他の女たちはどうした？　安全なところに待避させておけよ」

「ゲメナらがお手伝いに参りましてございます。既に、地下食糧庫に避難された頃合かと」

「よし。わかった。……おい。何を待っている？」

「殿」

プレコトムスは仏頂面を耳から首まで真っ赤にし、その小さな純朴な瞳で、心にダトニオ

イデスを見上げた。

「どうか……どうか、ご無事で！」

「バカ」

ダトニオイデスは舌打ちをすると、プレコトムスの頭をぽんと叩いた。

「案ずるな。行け！」

「は！」

プレコトムスが小走りに見えなくなると、ダトニオイデスの頬の笑窪が消えた。彼は扉を閉めた。それから、大股に部屋を横切って、机を引きずっていった。その机を踏み台にして、執務室の奥側の壁に彫られたミトラ神の巨大な像の両眼に鋭く手指を突き入れ、飛び降りた。仕掛けが回り、ミトラの像はきしみながら脳天から真っ二つに割れた。その胎内には、漆黒の天鵞絨に包まれた長いものが納められている。ダトニオイデスはそれを片手にむんずと摑んで、再びミトラを閉じた。どこから舞いこんだか、紫色の蝶がダトニオイデスの回りにつきまとい、飛び回った。煩わしそうにそれを追い払うと、ダトニオイデスは黒い布を慌ただしく解きはじめた。

出て来たのは、闇よりもなお黒く、ひどく重たげな剣である。その柄には、コリドラス家の実りの紋章がくっきりと刻まれている。

「魔剣よ……比類なき大地の剣よ」

ダトニオイデスは愛しげにその刀身を撫で擦った。
「長らく待たせて悪かったな。やっと、時が至った。おまえを連れて行ってやる。薄汚い裏切者どもの血を、ふふふ、今日はこころゆくまで吸うが良い……！」

7

目覚めが訪れた時、ルビスはひとりだった。掛けものは薄く、空気は頬が切れるかと思うほどに冷たく、あたりにはかすかに覚え知らぬ不思議な匂いがした。掛けものをたぐりながらゆっくりと寝返りを打つと、みすぼらしい小屋の梁が眼に入った。ルビスは眉を顰めた。寝惚けた頭は、困惑のあまり白く濁り、まぶたはまだ重かった。再び睡魔の誘いに引きずられそうであった。
「……おお？　起きたか？」
湯気のたつ鍋を手に、だらしのない寝間着姿の老人がよたよたと現れたとたん、彼女は、何があったのか、どこにいるのかをはっきりと思いだした。
「よう眠ったのう。飯ぁできとるぞ」
「ディアルトは!?」
「ひゃあー」

挨拶も忘れて叫び飛びついた彼女に、老人は手の中のものを揺らし、床にこぼれたスープの実の卯芋からしゅうしゅうと蒸気があがった。
「おお、もったいない」
芋を拾うと、老人はふうふう言いながらひと口にそれを食べてしまった。
「ご、ごめんなさい」
「いんにゃ」
老人はかさかさの頬を皺だらけにして首を振ったが、その間にむぐむぐと飲みこんだ芋が胃の腑に落ちて急に熱くなったらしく、眼を白黒させながら腹に手を当てた。
「う、たたた」
「だいじょうぶですか？」
「いやいや、いやいや、なんのこれしき。そう気を使うことはない。……おお、なんだ、気震え立ちしておるな。そなたの家は山向こうでは気候の厳しいほうだと聞いたが、山はやはり寒いか」
「ええ」
粟立った肌を擦りながら、ルビスは愛想よく微笑み、あたりを窺った。
「ずいぶん違います」
どうもこの小屋の中には、他にひとの気配はないようだった。

「火のそばに寄るが良い。いま、掻き立ててな。……ああ、それから、ディアルトじゃが」
歩きかけて、老人は振り向いた。
「はい」
「でかけたよ。暫くは戻らん」
「そ……そんな！」
ルビスはがっかりして、頬をふくれさせた。
「ひどいわ。どこに？　どこに行ったんですか？　どうしてわたしを置いて……ちょっと起こしてくれればいいのに」
「そう拗ねるな」
戻って来ると、老人はルビスの肩に、ぐい、と手をかけた。
「無事を祈ってやんなさい。あれは、オーブに行ったのじゃ」
「オーブって……あの、魔峰にですか？」
「そうじゃ」
「だって……だって、オーブには入れないって……行ったひとはみんな帰ってこれなかったって……！」
震えるルビスの肩を抱き寄せるようにして倹しい暖炉のそばまで連れてくると、老人は彼女を座らせ、スープの皿を持たせた。

「ディアルトは戻る」

老人は言った。

「儂の弟子じゃもの、だいじょうぶ。戻って来る」

「でも、なぜ？　なぜ、今の今そんなことを」

「ああ、それはな」

薪を足し、火を起こしながら、老人はつぶやくように言った。

「あれは、ブラック・オーブを取りに行ったのじゃ。ラーミアの力を借りるためにな……！」

……神話は語る。伝説の怪鳥ラーミアを操ることができるのは、充分にオーブを帯びたものに限られていた、と。

雲を貫き蒼穹に屹立せるかの秀峰オーブは、裾野こそイデーン辺境にありながら、その実態はけして唯イデーンに属していたわけではない。その頂は神々住まう天界にまで届かんとし、その見えざる根はいまだ知られぬ地上にまで遥々と広がっている。しかし、オーブは、それ自体ひとつの独立した結界であって、天地イデーンのどこにもその存在を負うているものではない。

ラーミアは、もと神々の乗り物であった。ミトラそのひとはいざ知らず、神々のすべてがなべて充分に高い能力を持っていたわけではない。だが、かつては、どの神々も、ひとたび

七色の尾を持つ巨鳥の背に跨れば、天地の裂け目を軽々と越え、自由に行来することができた。地上なるひとびとが身近に神を知り、親しさと畏怖の双方を感じている時代があったのである。

平穏なる時世には、それで良かった。

ところが、ある時天に不幸な諍いがあったのである。

ひとりの美しい女神を巡っての恋の鞘当てと、汚名を濯がんと欲したとある若者の罰当たりなことばが災いして、考え浅い神々の根深い対立を生み、何名かが天に暮らすを厭うて地上に下ることとなった。その騒乱を介助したは、他ならぬラーミアの飛翔能力であった。ために、ミトラは憂えて英断を下し、二度とこのようなことがないようにラーミアを滅ばさんと欲し、七色の巨鳥を手当たり次第に捕らえては飲みこんでしまった。これを見て胸を痛めたのが、まだ年若いおとめであった慈悲の女神ラムプロローグスである。

ラムプロローグスは、一匹のラーミアを密かにその胸許に隠して天の隅にまで逃げだしたが、ミトラのまなざしより逃げきれるわけもなく、窮余の一策として、救いし鳥を、父である寛容の神オーヴェンスの懐に放りこんだ。この時鳥が、彼女の首飾りに蹴爪をひっかけたので、七色の宝石がばらばらになって共に入った。あまりに勢いこんで投げたため、オーヴエンスの太ったからだは裏返しにどこまでもどんどんとふくれ上がり、天を突き抜け雲を越え、遥かイデーンにまで達し、そこに立ちはだかっていたひときわ高い山に刺さって抜けな

くなった。

おとめラムプロローグスの純情なる涙と苦しみ悶えるオーヴェンスの姿に胸を痛め、酷い仕打ちができなくなったミトラは、ふたりを許し、オーヴェンスのからだの反転した部分をうまく天から切り離してやった。そして、残ったラーミアは、そのままほうっておくことにした。

が、おとめラムプロローグスの選んだラーミアは、たまたまその懐の内に今にも生まれんとする卵を持っていたのである。巨鳥はけして子だくさんな性ではなかったが、その生命が不死と呼ばれるほどに長かったため、幾百幾千の年月の間にはすこぶる増えた。神々の手を放れて後、彼等は何者にも縛られることはなかった。ただ、オーヴェンスとラムプロローグスには多大なる恩義を感じ、オーヴェンスの血肉であった場所と、ラムプロローグスの首飾りの宝石には、敬意を払うことを定められていたのである。

ゆえに、川辺の民は……ミトラによって追放されヴェリダヌスを越えて来たものたちではなく、その後生まれたものたちは……母の胎内を出る時からオーヴェンスの内であったオーブ山の周囲の大気を呼吸し、オーヴェンスの血の染みこんだ土地より湧きだす谷の水を飲んで育ったので、さほど苦もなくラーミアたちを操ることができたのである。このようなものたちを、オーブを帯びたものと呼ぶ。

また、谷はそれ自体、ラムプロローグスの首飾りから発していた。ミトラがオーヴェンス

のからだを切った時に凄(すさ)まじい風が吹(ふ)き抜けたので、彼女のものであった七つの宝石が散らばって飛び、魔峰の固い山肌(やまはだ)を砕(くだ)いて、青い水を湧きださせたのである。

グリーン・オーブとも呼ばれる天の翠玉(エメラルド)より来るせせらぎが一の谷に、

ブルー・オーブの名を持つ天の青鋼玉(サファイヤ)が二の谷に、

レッド・オーブなる天の紅玉(ルビー)が三の谷に、

パープル・オーブである天の紫水晶(アメジスト)が四の谷に、

イエロー・オーブと讃(たた)えられる天の黄玉(トパーズ)が五の谷に、そして、

シルバー・オーブと崇(あが)められた銀(シルバ)が六の谷になった。

だが、唯ひとつ、ブラック・オーブの名を借りる黒金剛石(ヘマタイト)だけは、深い雪に落ちて埋(う)もれ、その行方が知れなくなったと言われている……。

「その黒金剛石(ヘマタイト)……黒のオーブを、ディアルトが探しに行ったのね?」

ルビスは急(せ)きこんで尋(たず)ねた。両手の中のスープがすっかり冷えきってしまっていることにも、まるで気づいていない。

「それがあれば、オーブの麓(もと)で生まれたものでなくとも、ラーミアを操ることができるのね」

「そういうことだ」

暖炉を見つめたまま、賢者は肩をすくめた。

「他の六つなる珠は、六つの谷の源流の深い地中に埋まっておるはずじゃからな。掘りだすは難い。手に入るとすれば、ブラック・オーブだけなんじゃよ」
「でも、そんな……そんな昔から見えなくなったものが、簡単に見つかるのかしら？」
「むう」
老人は火を掻き回した。古き伝説を識るものの横顔は、皺だらけ染みだらけでくたびれ果てていたが、深い思慮と静かな諦観を秘めて不思議に神聖であった。
（確かに、このひとは賢者なんだわ）
とルビスは思った。
「なにしろ、黒金剛石というのは穏やかではないからのう。天の宝石は、儂等の知っている地上の宝石とは性質が違うやもしれぬがな。おまえさん、そのふたつ名を知っておるかね？」
「いいえ」
「斬血石じゃ」
その名を聞いたとたんに、ルビスはぞくりと寒気を覚えた。
「どうしてそんな……？」
「ふん。黒金剛石は、石ながら血を流しよる。切断・研磨に際し真紅の微粉を出すということなのじゃが。この粉を吸いこんだものは、永遠の生命を得ると言われている。が、同時に、血を見るに淫するようになり、残虐非道の限りを尽くさずにはおれぬ、女であれば天上天下

にふたつとない美貌を得るが、やはり夜ごと処女の生き血を浴びなければたちまち醜く老いさらばえる……と。ま、迷信じゃがの。尊い泉の許となるには、これはあまりにも禍々しすぎるわな」

「……………」

「さっきのおまえさんの質問じゃがの」

胸を圧迫する不安にルビスが指を噛んでいるのを見ると、老人は急になにげない口調で言い足した。

「その、不吉さが、かえっておまえさんの恋人と響き合うのではないかと、わしは思うな」

「響き合うですって？」

「そうじゃ。考えてみよ。ここに奇妙な符丁があろう。緑・青・赤・黄・黒は、それぞれ高き血の五大家の象徴。銀と紫は、太陽と月である二つの神殿の預り手の象徴であろうが。もとは七つ、七つあって完全、また七はラーミアの尾羽の色をも形容す。唯ひとつブラック・オーブのみが他の珠とは異なる状況に落ちたということは、これは、もともと、何かを意味しているとは思わんかね？」

「でも……でも、いったい何を？」

ルビスは身を乗りだした。それでも老人が杳として答えぬので、彼の腕に手をかけて揺すぶった。

「教えて、お爺さん！　いったい、どういうことなの？」
「むう……」
賢者は横目使いになってルビスの真剣な顔を見つめると、もごもごとつぶやいた。
「そこまでは知らん。たいした根拠があって言うておることでもない」
「そんな！」
「わからんものはわからんのじゃ。悪いが、儂はミトラではないからの……ちと、放してくれんか。痛い」
「ご、ごめんなさい」
ルビスが慌てて手を放すと、老人は腰を叩きながら立ち上がり、ぎくしゃくと背を伸ばした。
「っこらしょと……やれやれ。少し余計なことを話してしもうたかな。そう怖い顔をするでない。美人がだいなしじゃぞ、あーん？」
「わたし……わたし、ディアルトを追いかけるわ！　いっしょに、その石を探すわ！」
ルビスは両眼に炎を踊り上がらせたが、老人に大笑いされて、力が抜けた。
「止めなさい、無理じゃ無理じゃ！　足手まといになるだけじゃ。外は大雪じゃし、山はさらに荒い。ディアルトはラーミアに乗っていったのだ。徒歩のおまえさんが追いつくわけがなかろうが。道に迷うて凍え死ぬのがオチじゃ」

「だって！」

「気持ちはわかるがの」

老人は肩をすくめると、傍らから何やら遊戯盤らしきものを取りだし、前に据えた。

『聖竜探求』だが、知っとるかね？」

「知りません！」

「おやおや。世間知らずなことよの。山向こうではすこぶる流行っておるはずなんじゃが。ディアルトが苦労して手に入れて来てくれたのじゃよ。ま、面白いからやってみないか。暇が潰れるぞ。暇でないのまで潰れるぞ、うひゃひゃひゃひゃ」

「…………」

「いやか？　糞爺の相手はごめんか？」

「…………」

「ふむ」

遊戯盤をひっこめると、老人は頭を掻きながらしょんぼりと座りこんだ。

落胆させてしまってすまないことだと、ルビスは思ったが、胸はべっとりと黒く冷たく、とても陽気に遊んでなどいられる心境ではなかった。頬杖をついたまま、彼女は考えた。確かに追いかけるのは意味がない。

（どうしてディアルトはそんなものを取りに行ったのだろう。谷に生まれなかった誰にラー

ミアを使わせようというのだろう）
（わたし……？）
（違う。わたしならば、ディアルトがいっしょにいてくれれば飛べる）
（いいや、わたしかもしれない。ディアルトはわたしをひとりで逃がして、自分は何かをしようと思っているのかもしれない）
（何を）
（何を）
（山を……爆発を、どうにかしようというの……？）
（ああ、そんな！　危ないことを……!?）
たまらなくなって頭を上げると、老人がひとり、にやにやとやに下がっているのが眼に入った。
「なんですか？」
「お……？　あ、いやすまんな。つい。さっきのを思いだしてな」
「さっきの？」
「おお。なんだったかな？『わたし、追いかけるわ！』か？『いっしょにその石を、探すわ！』だよな。うーん。美しい。いや、羨ましいねぇ。若いってのはいいなぁ。うんうん、懐かしい。思いだすよ。儂だって、実は若いころはこれでもなぁ……」

あっけに取られるルビスに向かって、老人は饒舌に快活に、その遠い青春を語りはじめるのだった……。

8

……それより半日ばかり前のことになる。

早朝のうちに密かに老人の家を出、高台にある自分の苫小屋に戻ったディアルトは、父の形見なるホリゾンタリスに手をかけたとたん、眼の前の床にあぐらをかく小さな影を見て驚いた。

「ピパ・ピパ？」

「今度という今度は、おいらもいっしょに行くからね！」

と、ピパ・ピパは言った。

「ラーミアだって、もうちゃんと呼んでおいた。あんたとおいらの分と、二羽さ。見渡し丘のあたりで、待ってもらってるんだ。へっへっへ、よく気がつくだろう？　なかなか役にたつだろう、おいら？　ねぇねぇ？」

ディアルトはため息をつきながら、ホリゾンタリスを外しはじめた。

「なんだよ、何してんだよ。早く行こうったら！」

「帰りなさい」

手を止めぬまま、ディアルトは言った。いつになく冷たい声だった。

「遊びに行くんじゃあない。連れてはいけない」

「知ってるよ。ブラック・オーブを探しに行くんだろう？　そいつを、コダイコだかゴダイケだか、山向こうにいるあんたの親戚のとこに持ってって、ラーミアの秘密を教えてやって、その代わりに異変が来る前に谷のみんなを引っ越させてもらえるように話をつけるってんだろう？　いいじゃん。グッド・アイディアじゃん。おいらやるよ、手伝う。大賛成だもん。……へん。なんだい、とうちゃんもパーチもンドゥロもチズルムもぉぉ、みんな腰抜けだ。わからず屋だ。ったく、頭固いんだよなぁ……『ラーミアは御山を離れては生きられぬ』とか『御山にあるものを外に持ちだしてはならぬ』とかなんとか。カッコつけちゃって。百年前からおんなしことしか言わねぇのな。その御山がぶっとんじまうってんだ、いくらラーミアだって、どっか行き場所探さなきゃならねぇに決まってるじゃんか、なぁ！」

「……おまえ」

ホリゾンタリスが外れた。ディアルトはそれを畳みながら、ゆっくりと振り返った。

「また、立ち聞きしたな」

「だってさぁ！　入れてくれないのが悪いんだよっ。おいらだって、おいらだって、もう充分おとなのにさぁ」

できる限りのそっけない顔で睨みつけ叱りつけて、ピパ・ピパをきっぱり諦めさせようと思ったのにもかかわらず、明るくなった中で改めて少年の姿を見ると、ディアルトの口許は他愛もなく緩んでしまった。

ピパ・ピパは武装していた。鍋の兜をかぶり、樽の底を抜いて鎧とし、大きすぎる父親のブーツを蔓草でぐるぐると縛りつけ、居間の敷物として使っていたホリゾンタリスをマントにしている。マントはすこぶる暖かそうだったが、いかにも重たげに垂れ下がって、ピパ・ピパがどう背伸びをしても地面を引きずってゆくに違いなかった。

「わ、笑うな！」

ピパ・ピパは顔を真っ赤にして叫んだ。

「山で足手まといにならないように、おいら、いっしょけんめ考えたんだぞ。こんだけの準備がありゃあ、どんな妖術使いにだって、負けるもんかっ。おいらはこれでも武芸百般の……」

威勢のいいことばが中途で切れた。ピパ・ピパの顔面に、ぬうっと大きな影が落ちて伸びて行ったのだ。

「恐るべきいでたちだな」

「……あ……あわわわ、と、とうちゃん……！」

戸口にたったヤベ・ヤベはうさん臭そうに息子を頭からつま先まで眺め回し、静かに言っ

た。
「朝飯、できてたぞ」
「………………」
「冷めるぞ」
少年は悲しそうな顔をちらりとだけディアルトに向けて、肩をすぼめ、すごすごと出て行った。とぼとぼ歩くその雪の上の足跡を、やはり引きずってしまうマントがずるずると掃いて消してゆく。
（あれはあれで、便利な時もあるな）
と、ディアルトは思った。そして、少年の後ろ姿に声をかけた。
「ありがとう、ピパ・ピパ！」
聞こえた合図に、少年は振り向かぬまま片手をあげて、角を曲がり、見えなくなった。
ディアルトは何となく胸が温かくなって、くつくつ笑いながら、作業に戻った。外したホリゾンタリスをくるくる丸めて背負えるように細工をする。
「そんなもん、何にするんだ」
と、ヤベ・ヤベが尋ねた。
「うん。雪の中で野営しなきゃならないかもしれないからね」
ディアルトはちらりとヤベ・ヤベを見た。ヤベ・ヤベは下唇を突きだしながら、黙って見

つめかえした。

(ここには二度と戻れないかもしれないから、持って行くんだよ)

ほんとうの気持ちが脳裏を過ったが、ディアルトは言わなかった。黙々と立ち働いて、苫小屋を片づけ、薬草や短剣等を装備する。

「さて……と」

顔をあげると、ヤベ・ヤベはまだそこにいた。放心したような顔で小屋の外の岩に座り、山を見上げていた。ディアルトは少し考えてから、声をかけた。

「俺は、行くよ」

ヤベ・ヤベはゆっくりとこちらを向いた。

「みんなに反対されたのに……勝手をして、悪いとは思う。でも、行かずにはいられないんだ。なんなら、祈ってくれ。ブラック・オーブが見つからないように。やっかいものの俺が二度と戻って来ないように」

「ふん」

ヤベ・ヤベは視線を外した。

「あの娘はどうする」

「ルビスか。ルビスは……」

ディアルトの眉は曇ったが、無理に笑って、言った。



「だいじょうぶだよ。あれで結構しっかりしてるから。お爺もついてることだし……ガーとも仲よくやれたみたいだし。もしも俺が死んでも、どーってことはない。もっといい男がみつかるさ。俺といるより、きっといいことがある」
「へっ」
ヤベ・ヤベは鼻を鳴らした。
「なんて言い種だい。つくづく嫌な奴だな、貴様は」
「……………」
「女を泣かせて平気な顔をしていられるような男を、俺は全く信用できんな。信用ならん奴に、我等が御山になど、踏みこまれたくない」
黙ったままのディアルトを、恐ろしい目つきで睨みあげると、ヤベ・ヤベは立ち上がった。
「俺が、行く」
「……え」
にやり、と、ヤベ・ヤベは笑った。
「どうしてもと言うなら、おまえ、ついて来てもいいぞ」
ディアルトは唇を噛みしめた。ヤベ・ヤベは黙って肩を聳やかすとくるりと向こうを向いて、息子のマントのつけた跡の脇に大きな大股な足跡をざくざくと刻みながら、堂々と歩いて行った。

尾根を越え、谷を越え、二羽のラーミアは飛んだ。風は冷たく、空は灰色味を帯びて暗かった。魔峰オーブに近づくに連れて、周囲は次第に陽炎が立ってでもいるかのようにぼやけはじめ、いつしかあたりを濃い霧が包みこんだ。

「妙な具合になって来たな」

ヤベ・ヤベの野太い声がした。隣を飛ぶ鳥の翼も、既にろくに見えぬ。

「結界だ」

ディアルトは答えた。

「オーヴェンスの反転した体内に入ったんだろう。きっと、これで、みんな道に迷うんだ」

「ふん」

「なぜ来たんだ？」

ディアルトは尋ねた。

「みんなが反対したのに。おまえがこんなことするようじゃ、しめしがつかないじゃないか」

答えはしばらく返って来なかった。ディアルトは待った。やがて、遠くでぼそぼそと言う声がした。

「言ったろ。おまえには任せておけないからだ」

（たいした自惚れだぜ！）

ディアルトは唇を噛んだ。

「だが、ディアルト、おまえ、いったいどうやって探す気なんだ？　そのなんとかを」

「うん」

ディアルトには漠然とした考えがあった。

行方知れずになっている黒金剛石もまた、天の宝石である。本来ならば地を砕き岩を割って地下水脈を探りだし、谷の源流を成すほどの力を秘めていたのだ。そのような特異な存在は、イデーンの森羅万象をあまねく駆け巡る五行の聖気の自由な往来を阻み、その直なる進路を鋭くねじ枉げ狂わせ乱していることだろう。雪深い山肌のどこかにそのような乱れがないかどうかを、かりそめにも大地の種族の長の血を引く自分ならば、探ることができるかもしれない、と思ったのである。

が、精霊の力を持たぬヤベ・ヤベに、正直、このようなことがらが理解されるかどうかは、わからない。

「瞑想してみるんだよ」

小さな声で、彼は言った。

「なんだと？」

ヤベ・ヤベは嬉しそうに怒鳴り返した。

「よく聞こえなかったが。そいつはまさか、あの、パーチを助ける時に岩を割ったみたいな、

奇天烈な力を使うってぇことじゃあないだろうな？」
「…………」
「よーしわかった」
嘲笑うようなヤベ・ヤベの声に、ディアルトは頬を赤くした。
（そうさ。あんたにはわからないさ。あんたには手伝えないさ。
だから、誰も、ついて来てくれなんて言わなかったじゃないか！）
頼みもせぬのに余計な世話を買ってでるヤベ・ヤベの性格は、思えばこどものころから全く同じであった。
ヤベ・ヤベはいつもディアルトの前にいた。彼は年長で、賢く、からだが大きかった。頑丈な筋肉と強靭な体力を持ちながら、繊細な作業も計算ずくの頭脳戦も得意だった。そして、彼のようでないものたちを、いつも黙って庇った。言うなれば、痒いところに手が届くどころか、手を出してもらった側がそれから初めて自分が痒くなりかかっていたことに気のつくような塩梅であった。だから、彼はこどもたちのリーダーとなり、おとなたちにもことのほか信頼されていたのだ。真実、ヤベ・ヤベは生まれついての指導者だった。まとめ役だった。遊びでも仕事でも、ディアルトはなかなか彼に敵わなかった。だが、それは、ディアルトが大地の種族の能力に目覚める前までの話なのだ。
（庇ってやることができるのは、今では俺のほうなのに）

「おーい。そっちに行くのか?」
不意に、思いもかけぬほど遠くで、ヤベ・ヤベの声がした。はっとしてディアルトが振り向くと、霧の彼方に、ヤベ・ヤベのラーミアがぬうっと姿を現した。
「はぐれるな、この調子だと」
「ああ……」
「どうする」
(だからひとりのほうが良かったのに)
ちらりとそんな考えも浮かんだが、髭だらけの幼馴染みの瞳は濁りなくまっすぐにこちらを見つめている。今ここでそんなことを言いだしても何にもならなかった。
「うん……そうだ。待ってくれ」
ディアルトは背に負うた荷物の中から、赤い帯を取りだした。それは、ルビスを乗せて飛んだ時、彼女が自分と彼とをひとつに繋げた豪華な刺繍の飾り帯であった。あの時、返しそびれたまま、持っていたのだった。
「使ってしまうよ、ルビス」
ディアルトは短剣を出して注意深く帯を裂き、引いても解けぬ結び目を作って、長く繋いだ。できた。
「ヤベ・ヤベ! どこだ」

「おう！」
白闇の彼方、右手の少し後ろのほうから返事があった。
「これが見えるか」
ディアルトは帯を風になびかせて、うち振った。
「派手な紐だな。なかなかよく見えるぞ。それなら貴様を見失うことはないかもしれない」
「いや。違うんだ」
ディアルトは帯の端に凍り肉の塊を結わえて重りにした。
「投げるから、受け取ってくれ。充分な長さはあるだろう。お互いを結んでおこう」
「…………」
「腰か、いや、手首がいいな。ちょっと引っ張られても進路がわかる。……俺は右手に繋いだ。左手にしてくれ」
「……むう」
「どうした？　嫌か？」
その刹那、ディアルトは、ヤベ・ヤベの困惑の原因を知った。突然思いだしたのだ。こどものころ、滑りやすい岩を昇って行く時等に、ヤベ・ヤベが同じことをしたのを。生命綱、ということばを教えてくれたのは、彼だったことを。

どちらかが落ちそうになったら、もうひとりが踏ん張って助ける約束を交わしていた。どちらかと言っても、ヤベ・ヤベはきっぱり、落ちるのはディアルトのほうであると思っているような節があった。確かにそのころは、そう考えられるのも無理はなかった。ディアルトは夢中になると考えるより先に手の出るところがあった。よく足場を確かめぬまま脆い岩にうっかり体重をかけて、冷やりとすることが、しょっちゅうだったのだ。

その話を聞いたヤベ・ヤベの父が、とんでもないことだと家に怒鳴りこんで来たのを、ディアルトは忘れていなかった。他所者のおまえの息子の巻き添えを喰ってうちの大事な優秀な跡取りがもしも死んだらどうしてくれるのだ。涙まじりにそう怒鳴ったヤベ・ヤベの父も、途方に暮れたように口籠ってしまったディアルトの父も、共に今は、二の谷の共同墓地に眠っている。

――もう、よそうよ。きみの父さんが嫌がってた。

その次に崖登りをした時、差しだされた生命綱を押し返したディアルトに、ヤベ・ヤベは下唇を突きだし、言った。

――いいか。親父は誤解しているんだ。こいつはおまえのためじゃない。俺のためにしてることなんだ。おまえは、こいつが俺に繋がってるということを、けして忘れちゃならねえ。そうして、自分がちょっとドジ踏んだら、俺までくたばるかもしれないってことを、必ず、一歩一歩、考えながら登るんだ。わかるか？

渋々うなずくディアルトに、ヤベ・ヤベは満足そうにうなずいた。

もし、おまえがバカをやって落ちて、引っ張りあげてやることができなかったら……こっちまで落ちると思ったら、俺はすぐ綱を切るからな。

――そ……そんな！

――いや。そうする。それが、山の掟だ。ひとりなら助かる時に、ふたりも死ぬのは無駄だ。だから、切る。だから、もう親父のことなんか気にしなくっていいんだ。ほれ、さっさと結べ！

「……止める」

ディアルトが帯を引っこめようとした時、声があがった。

「早く投げろ」

こうして、ふたりは、互いの手首と手首を遠く繋ぎ、ひとつになって飛んだ。

その間にもラーミアはもの慣れた様子で羽ばたきつづけ、既に山の懐深く入りこんでいる。霧の薄い場所に来ると、魔峰オーブのごつごつとした岩だらけの山肌が純白の雪化粧を纏って輝いているのが、すぐ足許に見えた。油断すると激突してしまいかねない。

（そろそろだな）

ディアルトは肝を据えた。

「ヤベ・ヤベ！　コースは任せるから、できるだけ山肌に沿うように飛んでくれ」
「どうするんだ」
「俺は瞑想する。こころで山を探ってみる。だから、できたら、できるだけゆっくり飛んでくれ」
「……わかった」
ヤベ・ヤベは僅かに前に出ると、ラーミアの速度を緩めた。繋がった手首の帯の張り具合から、無意識のうちにであろうともその脇について飛べることを確かめると、ディアルトは瞑想に入った……。
半眼になり、静かに呼吸をする。胸いっぱいまで吸い、空になるまで吐く。全身をゆったりと弛緩させて、我が身を大気に、大地に、この世のすべてに溶けこまさんと欲す。
（さあ……来い、大地の力よ……イデーンの魂よ……我に集え……我を通り抜けよ！）
ディアルトは、自らの存在がたちまち透明になってゆくのを感じた。内と外との境界が朧になり、手が溶け、足が消え、視線がその限界を越えて、前後左右上下のどこをも同等に知覚する。彼のこころは無限にふくれ上がって世界に向けて触手を伸ばし、触手は幾千幾万の黒竜となって、魔峰の表面を撫で雪を抉り地に這い潜った……。
ゆっくりと、時は流れた。
ラーミアは魔峰の巨大な稜線を辿って飛び、探査は果てしもなく続いた。

いつしか霧が晴れ、中天にかかった太陽に純白の山肌が眩しく輝いた。周囲は鼓膜を圧迫するほどに静まり返り、時折吹く風に粉雪の蹴散らされる幽く音さえ、はっきりと耳にとまった。

ただじっと鳥の背に座っているだけなのに、ディアルトは凄まじい疲労を覚え、徐々に意識が混沌として来るのを感じた。全身を針にして、どんな小さな異常もけして逃さぬよう神経を限界まで張り詰めているのだ。凍てつくようなこの薄い大気の中で、彼のからだはかっかと火照り、びっしょりと汗をかいた。喉は渇き、肩はこわばった。知らぬうちに集中力がなくなって来ている。黒竜たちを制御していられるのも、今暫くかと思われた。

（少し……休まなければ）

苦しい息の下で、彼の小さな自我が囁いた。

（やはり、無駄だったか……いや、回復を待って、もう一度続ければきっと）

その時、投網のように眼下の山肌に散らばった黒竜の一匹が、突然、戸惑ったようにもがいて消えてしまうのを、彼ははっきりと識った。その方向に何か、尋常ならざる物体があるのだ。この世の何者にもけして阻まれぬはずの聖なる気の流れをも阻害し得る何かが……！

「そこだ……！」

眼を開けて、ディアルトは叫んだ。

「右だ。七尾鷲の頭のような形の尾根があるな、それを越えるんだ」

「おう！」
ヤベ・ヤベは力強く答え、即座にラーミアを急がせた。赤い帯がびんと張って、ディアルトは落ちそうになった。
「うわ、待て。そう慌てるなったら！」
（いい年こいてはしゃぎやがって。待ち草臥れたな）
舌打ちしながら続いたディアルトは、今度は急激に制動をかけたヤベ・ヤベにぶつかりそうになって、本気に腹を立てた。
「おい、いい加減に……！」
振り向いたヤベ・ヤベの顔は蒼白だった。尾根の先を見たディアルトも、心臓が冷たい手でぎゅっと捕まれたかのように縮こまって、続きが言えなくなった。
「……竜だ……」
如何なる運命の悪戯か、どんな神の成したもう技か、現れた斜面をまるごといっぱい埋め尽くして陣取っていたものは、ディアルトが自分の内なる力を象徴するものとしてたびたびこころに描くあの幻の黒竜に、あまりにも酷似していた。ただその大きさはまったく途方もなかった。たとえば鉤爪のある前足ひとつが、巨鳥と呼ばれるラーミア一羽にも相当しよう。鱗一枚を剥がすことができたならば、頑丈な盾として使えよう。
その巨大な頭が、不意にゆっくりと持ち上がった。まるで小山が動いたかのような具合で

あった。竜はうっすらとまぶたを開けた。巨大な瞳は三日月のように細く金色だった。ぎろぎろと光るその眼で、竜は、宙に凍りついたままのふたりを、ぎょろりと睨んだ。

――下巻につづく――

〈この小説は一九九〇年三月に発行された『ドラゴンクエスト精霊ルビス伝説〔中〕』を文庫化したものです〉

久美沙織

岩手県生まれ。長野県在住。犬2猫2栗鼠2その他の母。小説家。『プラトニック・ラブ・チャイルド』『きみの瞳にギャラクシー』『ガラスのスニーカー』『抱いてアンフィニ』『薔薇の冠　銀の庭』『丘の家のミッキー1～10』『SPEAK　EASYの魚たち』『あけめやみ　とじめやみ』『MOTHER』『風をつかまえて』『碧い宝石箱』『ドラゴンクエストIV』など著書多数。

ドラゴンクエスト
精霊ルビス伝説 中
運命の翼ラーミア

1992年3月19日　初版発行

著　者　久美沙織
協　力　横倉　廣

●　●　●

発行人　福嶋康博

発行所　株式会社エニックス
東京都新宿区西新宿7－5－25
西新宿木村屋ビル3F
営　業　☎03(3369)8982
書籍編集　☎03(3369)7200
印刷所　加藤製版印刷株式会社
乱丁・落丁本はお取り替え致します
定価はカバーに表示してあります



Dragon Quest NOVELS

精霊ルビス伝説 中

ドラゴンクエスト

運命の翼ラーミア

久美沙織

エニックス文庫

ノベル

ドラゴンクエスト 精霊ルビス伝説 中

久美沙織

エニックス文庫

EB39

P450

ISBN4-900527-85-8

C0176 P450E

9784900527850

1910176004506

定価450円(本体価格437円・税13円)

エニックス文庫 EB39

幻想の地イデーンの運命をのせてラーミアは羽ばたく。七つめのオーブ、ブラックオーブとは、どこにあり、なにをなすものなのであろうか？
ディアルトは七つのオーブを求め、魔の山へと向かった。イデーン崩壊の前兆は、もはや人々の感じるところとなっていた……。
待望のドラゴンクエスト外伝小説、第二巻。

イラスト／いのまたむつみ